



令和4年度

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング)
コンソーシアム構築支援事業
研究報告書・第3年次

令和5年3月



巻頭言

WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業3年目を終えて

中村学園女子高等学校

校長 石丸篤志

WWLカリキュラム開発拠点校に認定されてから3年、事業採択されてから2年となりました。コロナ禍とともに歩んだ3年間ではありましたが、コロナ禍によって教育業界も急速にデジタル化が進んだことが、逆にオンラインを利用してコミュニケーションや学びの可能性を広げることに繋がりました。生徒たちは「with コロナ・デジタル化」という新しいあり方を柔軟に受け入れ、試行錯誤や創意工夫を繰り返しながら多くの取り組みを成し遂げました。まさに予測不能な時代を生きる力を身に付けるということを体現してくれたと思います。

新型コロナウイルス感染症による制約が徐々に緩和される中、今年度1年生で実施したグローバル・キャンパスでは、学校に立命館アジア太平洋大学の国際学生を招いて対面で実施しました。また、1年GIクラスは3学期にカナダへの留学を行い、短期と中期の2コースから選択できるプランで、計18名の留学希望生徒たちが渡航しました。現地校へ通いながらホームステイを経験し、異文化理解や多様性受容力を高めるとともに、英語力や主体的に行動する力をつけることを期待しています。

この留学に対しては、希望者を対象に選考を実施し、選抜された意欲の高い生徒に対して学園から留学の支援金が支給されました。帰国後に実施される成果報告会では大きく成長している事を願っております。

2年GIクラスは海外フィールドワークをマレーシア・シンガポールにて実施しました。フィールドワークを通して各自の探究活動も深みを増したことと思います。

またフィールドワークでの知見を活かして年度末に開催した国際会議「食のサミット」では、連携校である国内外の高校生と意見を交換しながら主体的に行動し、司会進行などの運営も2年GIクラスの生徒が中心となって活動しました。

3年GIクラスでは、昨年度の「食のサミット」での経験を踏まえた探究活動の集大成となる論文作成にあたりました。コロナにて十分な活動ができたとは言い難い3年生でしたが、テーマ設定からリサーチやアンケート、そして分析と各人が自分の興味関心のあるテーマに沿って作成し、自身の探究活動として自ら積極的に取り組んでいたかと思います。

感性豊かな高校時代の3年間でイノベティブなグローバル人材育成のために必要な教育プログラムを、試行錯誤しながら進めています。本校での学習を通して生徒たちがどのように変化したかは本報告書を見ていただけますと幸甚です。

最後に、WWL運営指導委員の皆さまを始め、生徒の取材を快く引き受けて下さった皆さま、また、ご自身のことを生徒たちに分かりやすく伝えて下さった皆さま、多くの方々に支えられて、WWL事業を順調に進めていくことが出来ました。ご協力いただき皆さまに深く感謝申し上げます。

報告書 目次

I 令和4年事業完了報告書	p. 4
II 令和4年度事業実施計画書	
1. 事業実施計画書	p. 21
2. WWL コンソーシアム構築支援事業の構想概要	p. 28
III 管理機関の取り組み	
1. 夏期職員研修「ICT活用ワークショップ」	p. 29
2. 中村学会の開催	p. 29
3. 海外交流アドバイザーの配置	p. 30
4. 情報共有体制の整備	p. 31
5. 教員チームによるコーチング	p. 33
6. GI 留学プログラム参加支援	p. 34
7. SDGs の取り組み（コンポストの実施）	p. 35
IV AL ネットワークとの取り組み	
1. 全国高校生フォーラム参加	p. 37
2. 九州大学 世界にはばたく高校生の成果発表会への参加	p. 38
3. 京都先端科学大学附属高校 GSG および成果発表会への参加	p. 40
4. 高知県立高知国際中学校・高等学校での探究成果発表会への参加	p. 42
5. WWL 報告会	p. 42
6. GI フィールドワーク Basic（グローバル・キャンパス）の開発と実施	p. 47
7. GI フィールドワーク Advance（海外FW）の開発と実施	p. 51
8. GI スキルアップセミナー開発・実践①	p. 59
9. GI スキルアップセミナー開発・実践②	p. 59
10. GI スキルアップセミナー開発・実践③	p. 61
11. GI スキルアップセミナー開発・実践④	p. 62
12. 中村学園大学・短期大学部の科目等履修生制度（AP）の活用	p. 63
13. 中村学園大学・短期大学部の学部・学科説明会	p. 64
14. 立命館アジア太平洋大学（APU）学校説明会	p. 64
15. ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ（KCC）学校説明会	p. 64
V カリキュラム開発	
(i) 探究的な学び	
1. 「グローバル探究」の開発と実施	p. 66
2. GI 探究の開発・実践（1年）	p. 75

3.	GI 探究の開発・実践 (2年)	p. 77
4.	GI 探究の開発・実践 (3年)	p. 80
5.	英語探究の活動 (1年)	p. 81
6.	英語探究の活動 (2年)	p. 83
7.	英語探究の活動 (3年)	p. 85
8.	GI スタートアップセミナーの開催	p. 87
9.	GI プレゼンテーション (論文発表会) の実施	p. 88
10.	企業コラボの実施 (GI 探究)	p. 92
11.	第1回GI 講演 (グローバル講演)	p. 96
12.	TOTO 株式会社とのセッション	p. 98
(ii) 国際的な学び		
1.	GI 留学プログラムの開発・実施	p. 100
2.	留学生の受け入れ	p. 104
3.	夏期海外研修	p. 108
(iii) 国際会議の開催		
1.	「食のサミット」の開催	p. 110

VI 事業全体の検証

1.	検証委員会	p. 124
2.	第1回運営指導委員会	p. 125
3.	第2回運営指導委員会 兼 AL ネットワーク連絡会	p. 126
4.	カリキュラム検討委員会	p. 128
5.	指導指標の測定	p. 129

VII 関係資料

関係資料 1	令和4年度 WWL 関連年間行事一覧	p. 131
関係資料 2	令和4年度 WWL 事業 効果検証生徒アンケート結果	p. 134
関係資料 3	広報紙 (Nakajo-Times Global)	p. 136

I 令和4年度事業完了報告書

令和5年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1
管理機関名 学校法人中村学園
代表者名 理事長 中村 紘右

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記の通り提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年4月1日～令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 中村学園女子高等学校
学校長名 石丸 篤志

3 構想名 「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

4 構想の概要

これまでのSGH事業の成果をさらに発展・充実させながら、地球規模の課題「食」に関わる探究活動による課題解決を通じてSociety 5.0をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う「食」の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。この教育的基盤となるALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。育成過程において、文理融合型のカリキュラムやイノベーションスキルの育成法・評価法、生徒の多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓、留学生との協働を最適化する実践プログラム、大学教育の先取り履修による高度な学びの提供方法等の開発へ特に注力することで、「食」を切り口として新しい価値を創造し、グローバル・イノベーターを育成するための教育プログラムのスタンダードモデルを創りあげる。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年4月1日～令和4年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会開催	委員 依頼			連絡・調整			4日 開催			連絡・調整		10日 開催

AL ネットワーク 連絡会開催										連絡・調整 ←→	10日 開催
検証委員会開催										連絡 調整	22日 開催
留学プログラム参加 支援			説明会 エントリー	一次 選考		二次選考 結果通知					
事業評価の実施			生徒ア ンケー ト実施							生徒・教 員・学校 アンケート実施	
財政支援								GI 留学 支援金 支給			

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a. 管理機関の下、拠点校を中心に組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況

本事業では、次の表に示すAL ネットワーク組織を整備し、研究開発と実践を進めた。

区分	機関名・学校名	コンソーシアムにおける主な役割
管理機関	学校法人中村学園	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業全体の統括 ▶業務執行体制の管理と整備 ▶必要経費の管理と執行 ▶運営指導委員会の開催 ▶検証委員会の開催 ▶AL ネットワーク連絡会の開催 ▶事務局からの情報の発信・収集
事業拠点校	中村学園女子高等学校	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 探究」「グローバル探究」の開発と実践 ▶文理融合型選択制を導入したカリキュラム開発 ▶カリキュラム検討委員会の開催・調整 ▶国際会議「食のサミット」の開催・調整 ▶成果報告としての「WWL 報告会」の開催・調整 ▶事業連携校と相互に参加する機会の調整・実施 ▶学校ホームページ、広報誌の発行
事業連携校	中村学園三陽高等学校 京都先端科学大学附属高等学校 高知県立高知国際高等学校 SMK SultanIbrahim Girls School (マレーシア) 84 th School (モンゴル) Academic of Lyceum Westminster International University in Tashkent (ウズベキスタン) 信男教育学園高等学校 (中国)	<ul style="list-style-type: none"> ▶探究授業・成果報告会・国際会議への相互参加 ▶研究開発に関する情報交換 ▶AL ネットワーク連絡会への参加
事業協働機関	立命館アジア太平洋大学 九州大学共創学部 中村学園大学・中村学園大学 短期大学部 中村調理製菓専門学校 中村国際ホテル専門学校 ハワイ大学 KCC ウェストミンスター大学	<ul style="list-style-type: none"> ▶研修スタッフとしての学生の斡旋・協力 ▶研究発表イベントの参加奨励と指導・助言 ▶アドバンスト・プレイスメントの実施・整備 ▶高度な教科指導への協力・指導・助言 ▶探究活動・アントレプレナーシップ講座への講師派遣 ▶論文作成の指導・助言 ▶学校説明会の開催と進学準備の相談対応

	マーセッド大学 マレーシア工科大学 SG インキュベート株式会社 株式会社リンガーハット 株式会社久原本家グループ 国連 WFP 協会	▶国際会議「食」のサミットへの参加・ ▶AL ネットワーク連絡会への参加
カリキュラム アドバイザー	タイガーモブ株式会社 取締役副社長 中村 寛大 氏 九州大学基幹教育院 准教授 小島 健太郎 氏	▶「GI 探究」「グローバル探究」等カリキュラム 全般に関する指導・助言 ▶カリキュラム検討委員会への参加
海外交流ア ドバイザー	学校法人中村学園経営企画室 伊東正子 氏	▶留学希望者への支援、管理機関内の調整 ▶海外研修プログラムの企画・調整 ▶留学生受入れに関する外部機関との連携・調整

b. 管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況

本事業が円滑および適切になされるよう、必要に応じて管理機関の事務局と事業拠点校の担当者間で連携を図り情報の共有を行った。連絡手段としては、メールや電話での連絡に加え令和 4 年度新たに Microsoft 社の Teams によって両者間での連絡共有体制を整えた。体制構築を行ったことで、これまでよりも早く正確な情報共有が実施可能となった。

また、AL ネットワーク内においては、年度末（3 月 10 日開催）に AL ネットワーク連絡会を開催し、事業実績の年度報告や課題、今後の展望等を共有し意思疎通を図った。また、連携校でもあり、WWL 事業カリキュラム拠点校でもある京都先端科学大学附属高等学校の AL ネットワーク連絡会にも出席するなど、他校の情報共有体制の知見を積極的に取り入れるよう努めた。

対外的には、拠点校の WWL 事業に関する取り組み内容をホームページでタイムリーに掲載する等、情報公開を継続して行った。

c. 管理機関の長、拠点校等の校長が果たした役割

構想内容の水準を維持し必要な改善を図るために、管理機関は積極的な情報収集と適切な指示を事業拠点校へ向けて発出した。また、事業拠点校は管理機関からの指示を受け、カリキュラム開発を計画的・組織的に実施・改善を行なった。

管理機関の長である学校法人中村学園理事長は、事業責任者として AL ネットワーク組織を適切に管理し、事務局へ指導・助言を行いながら事業構想の深化へ向けて必要な改善を図った。事務局は管理機関長の指示を受けて、運営指導委員会や検証委員会を招集し、AL ネットワーク組織のより強固な協力体制の構築を図った。また、事業拠点校への適切な指示により、事業の進行全体を調整した。

事業拠点校の校長は、拠点校内および連携校との諸活動が円滑に進むよう、連携校の校長とも連絡を取りながら事業の管理を行った。また、校内の執行部にあたる教育開発部への指導・助言および業務の遂行について監督を行った。

d. 運営指導委員会の開催実績や事業の検証資料等の収集状況

[運営指導委員会の構成]

区分	構成員氏名	所属	役職
委員長	岩本 仁	学校法人福岡成蹊学園	理事長
委員	小野 博	グローバル人材育成教育学会	名誉会長
	高橋 信命	福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局	参事補佐
	末松 大和	NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡	専務理事

オブザーバー	相川 洋	SG インキュベート株式会社	代表取締役社長
	河邊 哲司	株式会社久原本家グループ本社	代表取締役社長
	副島 雄児	国立大学法人九州大学共創学部	総長補佐
	米濱 和英	株式会社リンガーハット	名誉会長

〔開催実績〕

回	日時	内容
1	令和 4 年 10 月 4 日(火) 15:00~16:30	令和 4 年度事業運営・体制の概要および昨年度からの変更点、半年間の事業運営報告、事業拠点校への指導・助言
2	令和 5 年 3 月 10 日(金) 13:30~14:30	今年度の事業総括、事業達成状況・検証結果、次年度運営計画の報告、事業拠点校への指導・助言

e. 拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡調査する仕組み等

事業拠点校の WWL 事業（旧 SGH 事業を含む）の対象となる SG クラスおよび GI クラス生徒の進路については、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）の指定時（平成 27 年度）に入学した生徒より、追跡を実施している。基本的には、卒業時の担任による進路先の記録と更新を随時行うものである。現在、同窓会組織と連携して卒業後のキャリア等のデータの取り扱いを行っていくことを検討中である。

f. アジア高校生架け橋プロジェクトや海外連携校等からリーダー、架け橋となる留学生等の日本での学習や生活を支援する体制

平成 30 年度より開始された「アジア高校生架け橋プロジェクト」については、事業拠点校が開始当初よりわが国で最も多くの留学生を受け入れている学校の一つであり、今年度も 7 か国から 7 名を受け入れた。留学生に対する日常の生活面はもちろんのこと、日本語学習や健康面の相談等においても、事業拠点校の教育開発部員が主に担当する体制をとり、計画的に親身な指導を行っている。また、公益財団法人 AFS 日本協会の博多支部とも綿密に連絡を取り、生活面の援助や事業拠点校で開催する諸行事を共同で実施している。

令和 2・3 年度はその他の留学生の受け入れはコロナ禍を鑑みて行っていなかったが、今年度はロータリークラブが実施する交換留学制度で 1 名の生徒を受け入れた。

g. 事業拠点校で取り組みについて、本事業による取り組みが学校全体の授業改善や関係機関の教職員や生徒の意識改革を促した状況

〔授業改善〕

事業拠点校では、毎学期末にすべての常勤教員を対象とした指導指標の自己評価の測定を行っている。この指導指標は、これから生きる生徒たちにとって必要とされる 21 世紀型スキル等の能力を習得するにあたり、教師が指導上改善すべき項目を事業拠点校で独自の基準を設け指標化したものである。令和元年度から令和 4 年度までの測定結果（いずれも年度ごとの平均達成率〔%〕）は次の表の通りである。

大項目 ※（ ）内は指標項目数	令和元年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度
A 授業の基本姿勢 (5)	69.2	66.3	78.4	74.7
B 生徒の「深い学び」を促す授業への取り組み (4)	45.9	38.6	52.4	51.9
C 「生徒が学びの主人公」となる授業づくり (2)	38.4	70.1	84.5	90.8
全項目平均 (%)	53.7	56.0	67.7	69.3

令和 3 年度まではコロナ禍でオンライン授業を行った期間があったが、令和 4 年度はほぼすべて対面授業を行ったこともあり、表中の A、B の項目で令和 3 年度と同じ水準であった。事業拠点校の教員の授業改善に対する意識の向上や 21 世紀型スキルをはじめとする「生徒に身につけさせたい力」の共通理解が浸透した結果と予測できる。また表中の C の項目に関しては昨年度から肯定的な回答の割合が増えている。グローバル探究の実施で、探究活動が GI 以外のクラスも広が

ったことが影響していると考えられる。

〔生徒の意識〕

本事業により事業拠点校の生徒の意識の変化がどのように見られたかについては、年2回（令和4年度は9月・3月実施）の効果検証アンケートによって調査している。9月と3月の結果を比較すると、「グローバル関心度」「コミュニケーション力」「課題解決力」「グローバルキャリア形成」といった項目は全体としては肯定的評価が増加している。「GIフィールドワーク Basic（グローバルキャンパス）」や「WWL 報告会」、「食のサミット」等の行事や、それらにつながる計画的な探究学習を通して、国際的な事柄への関心の強まりや、探究活動による成長の自覚を深めているのではないかと考えられる。一方で「突破力・忍耐力・レジリエンス」の項目がおしなべて肯定的評価が低下している。探究活動や行事を通じて、逆にできないことや改善すべき点に目が向くようになっているととらえることができるだろうが、今後は検証が必要である。

h. アジア高校生架け橋プロジェクトの受け入れ国および人数

- ▶ 受け入れ国（アルファベット順）：カンボジア、インド、インドネシア、ラオス、マレーシア、ネパール、スリランカ 計7か国
- ▶ 受け入れ人数：各国1名ずつ 計7名

【財政等支援】

- a. 管理機関が、本事業の運営に関わる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの
 - ▶ 留学プログラム実施に伴い、本校からは参加希望者19名の内、選考を通過した3名に総額150万円の渡航費用をGI留学支援金として支給した。（詳細はbに記載）
- b. 事業の実施に必要な取り組みに対し、人的または財政的な支援や教職員を育成するための研修やセミナー等を実施した状況
 - ▶ GI留学プログラム参加者への支援
令和3年度に初めて実施したGI留学プログラムに於いて、学園より支援金制度を設置した。留学に対する強い意志を持ち意欲ある参加希望者の経済的負担を軽減し、より良い成果をあげることを支援するものである。支援対象者の選考は、1次の書類選考を内部選考委員会（校長・教頭・事務長・進路部長・大学学生部長）で実施し、2次選考を学園審査として行った。
 - ▶ 夏期教職員研修
ICT教育の一環として、併設校の三陽高等学校の実践事例を拠点校の教員に共有し、ICTの活用方法を学ぶとともに意見交換を行った。拠点校が女子高で、併設校は男子校であるという特徴を生かし、生徒に適した指導方法を考える機会にすることができた。
- c. 国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと
委託期間終了後、連携校・事業協働機関との継続的なパートナーシップを築いていくために、自走化に向けて既存のプログラムの充実を図り、新たな連携先の開拓等を行う。
例年実施している主要行事の「GIフィールドワーク basic(グローバルキャンパス)」や国際会議「食のサミット」は、拠点校全ての生徒が国際理解や高次の課題解決力、協働力を身に付けられるような内容の見直しを行った上で継続する予定である。また、「WWL 報告会」においても、年間の探究学習の成果報告会の場として全校生徒が参加できるよう実施の方法を検討する。その他現在連携校・事業協働と実施している各取り組みの一部を、GIクラスのみではなく、全校生徒へ展開できるよう「グローバル探究」の時間等を使用し内容を検討していく予定である。
今後も継続的に連携を図り、カリキュラムの充実に向けて取り組んでいける国内外の連携先を開拓する。

【AL ネットワークの形成】

a. AL ネットワーク運営組織の実績

本事業の構想目的・計画・達成状況及び今後の課題や方向性を確認するために、管理機関や事業拠点校の代表者、連携校・事業協働機関の代表者を招集して AL ネットワーク連絡会を開催している。令和4年度の開催実績は次の通りである。

▶ AL ネットワーク連絡会：令和5年3月10日（金）13:30~14:30

内容：今年度の事業総括、事業達成状況・検証結果、次年度の課題と計画、質疑応答等

b. 関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな協働事業の開発、有効な事業実施を実現したこと

AL ネットワーク内の連絡は、主として管理機関の事務局及び事業拠点校の教育開発部が、年度初めに作成したメーリングリストを用いて連携校や事業協働機関とメールや電話、郵送等の手段で情報の共有を行っている。また、連携校や事業協働機関を訪問し、情報共有や事業の取り組みにおける相談等を行った。

事業拠点校の諸行事の運営における企画～実施の一連の流れにおいては、管理機関の事務局と事業拠点校の教育開発部の担当者が連携を図り内部での情報共有を行った。

c. AL ネットワークの運営組織が、当該プログラム修了生の、国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進に寄与したこと

今年度も事業拠点校では、国内外の事業協働機関による学校説明会を開催し、国際的な分野を学ぶことへの進学意欲を喚起する試みを継続して行った。実施したのものとしては下記の通りである。なお、実施はすべてオンラインである。

説明対象校	開催日時	対象	内容
立命館アジア太平洋大学	令和4年8月3日（火） 15:30~16:30	事業拠点校の希望する生徒・保護者	学部・学科紹介、学費、学生生活、個別相談
ハワイ大学 KCC	令和4年11月28日（月） 16:00~17:00		学校紹介、入試のシステム、学費、渡航までのスケジュール、インターンシップ制度

d. AL ネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況及び本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況

事務局の設置及びカリキュラム開発に関わる人材配置は次の表の通りである。

区分	機関・担当者等	カリキュラム開発に関わる主な業務項目
事務局	学校法人中村学園理事長 学校法人中村学園経営企画室長	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業計画の作成・進捗管理 ▶ AL ネットワーク内の連絡・調整 ▶ AL ネットワーク全般の情報の収集・発信 ▶ 事業評価の実施 ▶ 事業経費の管理・運用指導
カリキュラムアドバイザー	タイガーモブ株式会社 取締役副社長 中村 寛大 氏 九州大学基幹教育院 准教授 小島 健太郎 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業拠点校のカリキュラム開発全般に関する指導・助言 ▶ カリキュラム検討委員会への参加
海外交流アドバイザー	学校法人中村学園 経営企画室 伊東正子 氏	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 事業拠点校の留学プログラムや海外研修の企画・実施、留学生の受入等国际交流全般に関する指導・助言・外部機関との連携調整 ▶ 教育開発部会への参加
事業拠点校	教育開発部員 10名	▶ 本事業に関わる教育実践を円滑に進めるた

	(外国人講師 2 名を含む)	めの企画・運営全般 ▶ 事務局への報告 ▶ 教育開発部会への参加
	探究授業担当者チーム	▶ GI クラスの探究授業の計画・実践・評価 ▶ 教育開発部への報告

e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催準備状況

高校生国際会議については、事業拠点校が主催する「食のサミット」を平成 29 年度より開始し、今回が 6 回目の開催（令和 5 年 3 月 10・11 日開催）となった。今回は前年度に続き、新型コロナウイルスの感染防止対策により、海外校はオンライン参加とした。また、例年は参加チームを国内外から広く公募しているが、今年度も同様に感染防止の観点から連携校のみの参加とした。

今回のテーマは「『すべての人に、安全な食を』(Safe Food for All People)」とし、事業拠点校及び国内連携校から 4 チーム 13 名、海外連携校から 2 チーム 9 名の生徒が参加して模擬国連形式で議論を交わした。また、これとは別に事業拠点校内で同テーマのポスターセッションを行い、事業拠点校の GI クラスだけではなく全生徒が食の課題について理解を深めた。このサミットでまとめた提言書を国連 WFP 協会へ提出した。次回（令和 5 年度）の開催テーマを早急に決定し、早期に準備に着手することとしている。

f. 社会に開かれたフォーラムや成果報告会等の実施（あるいは計画）

事業拠点校では、探究成果の報告として年 1 回の WWL 報告会を開催している。そこでは WWL 事業対象の GI クラスだけではなく、非対象生徒も含めた全校あげでのイベントとして令和 4 年度は 12 月 17 日に開催した。講堂ステージにおいて、GI クラス生徒及びアジア高校生架け橋プロジェクト留学生による発表、国内連携校 3 校の代表者がオンラインで成果発表を行った。来賓 9 名が来校し、オンラインによりカリキュラム検討委員 1 名、運営指導委員 3 名が参観した。

本年度からは、事業拠点校の GI クラスが 3 年次へ進級するにあたり「GI プレゼンテーション」と称する論文発表会を開催した。GI クラスは 3 年間の集大成として論文制作を 3 年次に行うが、論文完成前の最終指導として 7 月 29 日に論文の中間発表を行った。運営指導員を中心とした 6 名の論文指導員から指導を受けた。

g. 構想目的の達成に資する取り組みを計画し、その効果的かつ円滑な運営のために行った情報収集の実績

下表に今年度の実績についてまとめた。いずれも管理機関および事業拠点校の担当者間で連携を図り実施した。

項目	関連機関	内容
広報紙の発行・配布	AL ネットワーク内外の機関	広報媒体を通して、本事業での実践（主に特別授業や行事）に関するタイムリーな情報を年 2 回発信
連携校への訪問	京都先端科学大学附属高等学校 高知県立高知国際高等学校	事業の説明、運営に際しての情報交換、学校設定教科の運用に関する質疑応答
事業協働機関への訪問	国連 WFP SG インキュベート株式会社	行事への協力依頼
AL ネットワーク内の諸連絡・調整	AL ネットワーク内の全機関（特に国内連携校）	主に行事の相互参加に関する連絡・調整等

h. AL ネットワーク運営組織の基盤となる関係機関との協定文書等

該当無し

実施日	対象	協働機関	内容
令和4年5月23日(月)	GI2年生	株式会社石村萬盛堂	仕様書案へのフィードバック
令和4年6月21日(火)	GI2年生	SG インキュベート株式会社	価格設定について
令和4年7月15日(金)	GI2年生	SG インキュベート株式会社	ターゲットと PR 方法について
令和4年12月6日(火)	GI2年生	株式会社石村萬盛堂	共同開発商品の試食
令和5年3月12日(日) ・14日(火)	GI2年生	株式会社石村萬盛堂	共同開発商品の販売

c. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行うグローバル探究等の教科・科目を設定した状況について

事業拠点校のGIクラスでは、英語の中で「英語探究」の科目を設け、英語を用いて文理融合的な内容（主として「食」に関わるテーマ）について探究活動を実践している。1年次は課外授業扱いで1単位相当、2・3年次は正規の授業として各2単位を設定している。この「英語探究」では、「GI探究」で習得した探究活動のノウハウを活用し、探究活動を英語で学習するものであり、英語によるレポートや論文の作成法・ディベート・発表方法等を扱う。また、オンラインで海外との交流活動も実施しており、今年度は2年GIクラスがリトアニアの高校生とそれぞれの社会文化について意見交換を行った。GIクラスでは外国人講師が副担任を務めているため、これらの授業に関わらず日常から英語を用いた指導を行っている。

令和4年度入学生からは、これまで「総合的な探究の時間」の一部として実施してきた「GI探究」に代わり、新たな学校設定教科として「グローバル探究」を全クラスに導入した。年間を通じて、「食と社会文化」「食と環境」「食と経済」「食と栄養」の4領域ごとに個人テーマを設定し、調査・分析を行い、成果を発表・共有した。食をテーマとした探究を通じ、探究学習に必要な心構え、論理的な思考方法、文献等の調査方法、ポスター発表を主眼と置いた発表方法を学んだ。

d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置づけて実施したこと

① GI留学プログラムの実施

事業拠点校では、グローバルでイノベーティブな人材育成のために欠かせない英語運用能力の育成を目的として、1年GIクラスの希望者が3学期に約2か月間の留学プログラムに参加できるシステムを令和2年度入学生より開始した。今年度は生徒のニーズに合わせて1か月コースと2か月コースの2つのパターンで実施した。それぞれ5名と13名の参加で、31名在籍のうち18名がカナダへ留学生活を送っている。

② GIフィールドワーク Advance の実施

事業拠点校の2年GIクラスでは、探究活動で培ってきたスキルを国内または海外の実習地で活用し、生徒自身が設定した課題の調査や解決法をさぐる「GIフィールドワーク Advance」を9～10月に計画している。令和4年度はマレーシア・シンガポールでの海外研修を9月10日～15日に計画通り実施した。アブラヤシ農園や食品廃棄物を堆肥にかえる農園では経営者の理念を学ぶことで「課題解決力」を養い、連携校であるSIGSやマレーシア工科大学の生徒と交流することで異文化理解や語学学習に役立てることができた。

e. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて

文系・理系の区分にとらわれず、生徒の興味・関心に応じた科目を選択できるシステムを構築し、選択できる開講講座を令和3年度構想していたが、時間割作成に関する教務部との調整がつかず決定は見送られていた。令和4年度より高校1年生に「グローバル探究」の科目を設定した。「食」

をテーマとして調査、分析、発表、探究学習の基礎的な手法を学ぶ授業を展開した。令和 5 度は生徒の興味・関心に応じて探究テーマを設定させ、生徒のテーマをジャンルごとに大別し、1 つのジャンルに 1 人の担当者を配置する「ゼミ形式」での探究授業とその指導を計画している。「ゼミ形式」にすることで、文系・理系問わず生徒の知的好奇心に即した学習活動を行う体制づくりを整理することができた。

f. 学習活動が構想目的の達成に資するよう工夫したこと

より多くのイノベティブなグローバル人材を輩出するために、事業拠点校内だけの閉鎖的な枠組みにとらわれることなく、外部に「開かれた」教育手法を用いて、生徒たちに本物に触れさせ刺激を与え、体験的に視野の広がりや発想力を促すことが必要と考えている。

令和 3 年度より GI クラスの論文作成の指導に関して、事業拠点校内の教師による指導だけではなく、運営指導委員の一部や外部の有識者（以下、学外指導者と称する）も定期的に指導にあたることで、生徒の活動意欲を高めるとともに論文の質的向上を図ることをねらいとした取り組みを行っている。3 年 GI クラスは昨年度 2 月に論文テーマ発表、今年度の 6 月に中間指導を受け、7 月に「GI プレゼンテーション」と称する論文発表会を行った。本校教員とは違った専門的な切り口での指導は、論文の質的向上と生徒の探究活動への姿勢の改善に大きく影響があった。

アントレプレナーシップ講座に限らず、GI クラスのみが行っている行事について他クラスの生徒の参加や、主にオンラインにはなるが連携校の参加についても、「開かれた」教育手法の確立のために検討していく必要がある。

g. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取り組みを実施したこと

管理機関である学校法人中村学園では、事業協働機関である中村学園大学・中村学園短期大学の学生以外で講座を履修する者を「科目等履修生」と称し、特定の授業科目を履修することで単位を取得した生徒が中村学園大学または同短期大学部に進学した場合は、習得単位として認定される仕組みとなっている。事業拠点校及び事業連携校の高校 2 年生の希望者を対象として実施している。令和 4 年度は、昨年に引き続き新型コロナウイルス感染拡大防止のため、授業の受講およびレポート、小テスト、課題の提出等はオンラインにより実施された。試験のみ大学の会場で実施した。

h. アジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制を整備したこと

事業拠点校では、平成 30 年度から 5 か年計画で開始した文科省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」に於いて、令和 4 年度までの 5 年間で約 15 ヶ国 40 名の留学生を受け入れた。令和 4 年度は 7 ヶ国 7 名を受け入れ、7 月から翌年 3 月までの約 8 か月間の滞在期間中、1・2 年生 GI クラスに配属し、本校生徒と同様の授業に参加し、探究授業ではグループワークやプレゼンテーション等において在校生と協働し異文化理解・交流を図った。また、教育開発部の国際担当者や海外交流アドバイザーが連携し、日本語レッスン(週 2 回実施)や日本文化の紹介(華道・茶道・書道レッスンを調整)、生活指導を組織的に行い留学生の指導にあたった。生活面においては、学期中は事業拠点校の寮で生活をし、夏休み・冬休みは校内でホストファミリーを募りホームステイを実施し、集団生活や日本の生活・慣習を体験する機会を提供した。

i. その他について

▶ 夏期海外研修業者説明会の開催

事業拠点校では、海外研修や留学プログラムがカリキュラムに組み込まれているのは現在のところ GI クラスだけである。そこで他のクラスの生徒にも、できるだけ多くの海外研修の機会を提供し、多くの生徒の視野を広げることを目的として、昨年度より夏期海外研修業者説明会を開催している。今年度は 6 月 6 日(月)に開催した。3 社の旅行業者が企画した研修プランを参加者へプレゼンテーションし、興味・関心を持ったプランについて、各社との個人相談を経て、最終的には後日に参加申し込みを行うという流れで実施した。各企画については、あらかじめ事業拠点校の教育開発部や海外交流アドバイザーの意見を取り入れ、選定した企画を紹介していただい

た。説明会には生徒 32 名と保護者 24 名が参加し、そのうちのべ 10 名が国内語学研修、3 名は海外(インドネシア・バリ島)の観光・環境問題プログラムに参加した。

▶ Blue Earth 塾の開催

NPO 法人 Blue Earth Project が主催する環境イベントに、事業拠点校の GI クラスが参加した。このイベントを通して生徒たちの身近な環境問題解決への意識の向上を図るとともに、課題解決力、表現力、創造力、コミュニケーション力、多様性受容力等の様々な力が養われた。

7、8 月には、「エコ給水キャンペーン」を福岡市の商業施設で行った。プラスチックごみの削減を目的に、水筒を店舗に持ってきた消費者に無料で水を提供するというキャンペーンを 1・2 年の GI クラスで各店舗に依頼するという活動を行った。10 月は事業拠点校にて女子大生と 1・2 年 GI クラスの生徒がエコ活動、起業といったテーマでディスカッションを行った(対面実施)。

1 月はオンラインで実践報告を視聴した。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. イノベティブなグローバル人材の育成状況

[WWL 事業効果検証アンケートの結果から]

事業拠点校では毎年 2 回の事業効果検証アンケート (各回 32 問) を全生徒に実施している。令和 2 年度後期の調査から本事業で育成するイノベーターに必要とされる力に関する設問 (前後期で計 20 問) を新たに作成し、調査を実施している。各設問について力が身につけていると肯定的な回答をしている生徒の割合 (%) を下の表に示す。

単位 (%)		イノベーターに必要とされる力に関する設問					育成するすべての力に関する全設問平均
学年・クラス	調査時期	①突破力・忍耐力・レジリエンス	②調和力	③マインドセット	④高次の課題解決力	①~④平均	
1 年 GI	前期	83.1	90.3	59.7	85.5	79.6	79.4
	後期	72.9	91.7	83.3	87.5	83.9	84.0
1 年他クラス	前期	80.3	87.1	66.8	83.4	79.4	72.8
	後期	70.7	89.0	80.6	81.1	80.3	82.2
2 年 GI	前期	84.1	81.8	80.3	87.9	83.5	80.9
	後期	73.9	93.5	80.4	84.8	83.2	86.1
2 年他クラス	前期	83.0	89.1	71.9	87.2	82.8	76.3
	後期	75.8	89.5	80.8	79.3	81.4	81.8
3 年 GI	前期	89.1	90.6	84.4	96.9	90.2	88.4
	後期	82.1	96.4	85.7	92.9	89.3	90.3
3 年他クラス	前期	89.5	91.9	81.7	92.6	88.9	82.0
	後期	80.5	90.3	85.8	85.4	85.5	85.7

※ 調査時期：前期 9 月、後期 3 月

事業拠点校では、グローバルリーダーとして必要な力に加え、イノベーターに必要とされる力を次のように定義している。

- ▶ 「突破力」...大きな壁 (課題) にぶつかっても、諦めることなく論理的な思考で乗り越える力。
- ▶ 「忍耐力・レジリエンス」...得られた知識を活用しながら様々な手法を試行し、失敗の経験を生かして次の改善につなげ、答えのない問題にも諦めずに取り組む意欲や態度。
- ▶ 「調和力」...国内外の人とのつながり・協働にとどまらず、新しい知識と既存の知識・自己の経験と他者の経験等を結びつけて協働する力。
- ▶ 「マインドセット」...自分の可能性を信じ粘り強く努力することで、自己の能力が発達し、持続可能な社会が実現するという考え方。
- ▶ 「高次の課題解決力」...答えのない課題や予測不能な事態に対して、いち早く的確に状況を察知・観察し、核心をつき問いかけを何度も行い、それに合う最適な方法でプロジェクトを企画・実行し、状況に応じた最適解を導くために必要な力。

この結果より、次のことが考察できる。

- ▶ 1年 GI クラスに関しては、他クラスに比べてイノベーターに必要とされる力が身につけていると肯定的に捉えている生徒の割合は、前期 0.2 ポイントに対して後期 3.6 ポイントとなり差が広がった。しかし、本事業で育成するすべての力については、前期 6.6 ポイントの差であったが、後期では 1.8 ポイント差に縮まっている。以上のことから、1年生に関しては新設のグローバル探究の影響で「課題解決力」や「グローバル関心度」といった面で総じて変化があったといえるが、GI クラスは課外学習での英語探究やアントレプレナーシップ講座の実施で、探究活動自体に深まりがあり、イノベーターに必要とされる力の値に差があったのだと考えられる。
- ▶ 高校 2 年生は全体の傾向として、GI・他クラス関係なくイノベーターに必要とされる力の値はともに微減、育成するすべての力の値はともに大きく上昇している。学校生活を通じてリーダーシップを発揮する機会が増えたため、GI と他クラス間に大きな差が出ていないと考えられる。ただし GI クラスの育成するすべての力の値は目立った値(86.1)になっている。9月の海外フィールドワークや WWL 報告会、食のサミットを通じて「アイデンティティ」「グローバル関心度」といった値の上昇が理由として考えられる。GI クラスの各行事が、イノベーターに必要とされる力に有効的につながっていないとも考えられるので、行事の運営の仕方に工夫が必要であろう。
- ▶ 高校 3 年生は全体の傾向として、GI・他クラス関係なくイノベーターに必要とされる力の値・育成するすべての力の値がともに減少している。理由として高校 3 年生には WWL 事業に関わる大きな行事がなく、進路実現に向けた活動が学校生活の多くの割合を占めるからであろう。それでも、イノベーターに必要とされる力の値については前後期の比較で GI クラスは-1.3、他クラスは-4.8 であった点は注目したい。GI クラスは論文作成と GI プレゼンテーションを通じ、「高度課題解決力」「調和力」について肯定的なとらえている生徒が多かったことと予測される。数字上ではマイナスになっているが、他のクラスと比べた際に論文作成の効果が目に見えるかたちになったと判断できるのではないだろうか。

[英語力測定の結果から]

高い英語力もイノベータティブなグローバル人材には必要な能力の一つと考えている。下の表は、令和 4 年度の英語能力検定試験の受検による CEFR の各レベル達成者数と達成率を示したものである。これによると、WWL 対象生徒である GI クラス生徒は、3 年生までを含む WWL 非対象生徒に比べて、B1・B2 レベル達成者数の割合が高くなっている。この要因として、3 年 GI クラスは自身の進路実現のため、2 年は GI 留学プログラムや海外フィールドワーク等海外渡航による動機づけが考えられる。また 1 年 GI クラスに関しては、過去 2 年間の GI クラスの活動が拠点校周辺地域に認知されるようになり、英語学習に前向きな生徒が募集段階で集まっていることが考えられる。今後、GI クラスについては B2・B1 等高いレベルの CEFR レベルの達成率の向上を、他のクラスに関しては A2・B1 レベル達成者数の底上げが課題である。

	対象人数	CEFR A2	CEFR B1	CEFR B2
WWL 対象生徒 (1～3 年 GI クラス)	103	34 (33.0%)	22 (21.4%)	6 (5.8%)
WWL 非対象生徒 (1～3 年他クラス)	981	272 (27.7%)	106 (10.8%)	12 (1.2%)

b. ALネットワークが果たした役割

区分	主な役割
管理機関	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業全体の進捗状況管理・事業拠点校への指導 ▶AL ネットワーク内の連絡・調整及び事業に関わる各種委員会の開催 ▶必要経費の管理・執行
事業拠点校	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 探究」の実践及び本年度より開始した「グローバル探究」の教科内容の開発・指導計画の策定 ▶各種行事の企画・運営 ▶事業連携校の行事への相互参加および情報交換
事業連携校	<ul style="list-style-type: none"> ▶事業拠点校の探究活動・成果報告会・国際会議への相互参加 ▶研究開発に関する情報交換 ▶海外研修時の協力 ▶AL ネットワーク連絡会での事業拠点校の事業の進捗に関する助言
事業協働機関	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [全ての機関] <ul style="list-style-type: none"> ・AL ネットワーク連絡会への参加 ▶ [中村学園大学・中村学園大学短期大学部] <ul style="list-style-type: none"> ・事業拠点校及び中村学園三陽高校の 2 年生を対象とした科目等履修生制度（アドバンスト・プレイスメント）の実施 ・進学説明会の実施 ▶ [立命館アジア太平洋大学] <ul style="list-style-type: none"> ・「GI フィールドワーク Basic」における国際学生(研修スタッフ)派遣 ・進学説明会の実施 ▶ [SG インキュベート株式会社] <ul style="list-style-type: none"> ・「スキルアップセミナー」への講師派遣 ▶ [九州大学共創学部等] <ul style="list-style-type: none"> ・九州大学主催「世界に羽ばたく高校生の成果発表会」参加 ・GI3 年生の論文作成における指導 ▶ [ハワイ大学 KCC 等] <ul style="list-style-type: none"> ・進学説明会の開催学校説明会等を開催 ▶ [マレーシア工科大学] <ul style="list-style-type: none"> ・「GI フィールドワーク Advanced」における大学訪問・現地学生との交流 ▶ [国連 WFP 協会] <ul style="list-style-type: none"> ・国際会議「食のサミット」への協力・講評
カリキュラムアドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ▶カリキュラム検討委員会への参加および事業拠点校の主要行事の企画と実施、「GI 探究」の実践、「グローバル探究」の教科内容や指導計画等、カリキュラム全般に関する指導・助言
海外交流アドバイザー	<ul style="list-style-type: none"> ▶「GI 留学プログラム」の実施に向けた参加希望者への支援 ▶留学支援金の授与対象者の決定等における管理機関との連絡・調整 ▶夏期海外研修プログラムにおける旅行業者との連携・調整 ▶留学生の受入における外部機関との連携・調整
その他（事業協働機関以外の大学、企業等）	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [株式会社石村萬盛堂] <p>産学連携事業の一環として事業拠点校と協働し、商品開発等を行った。</p>

c. 短期的・中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況

次の表に本事業の構想計画書に記載した8項目(①～⑧)について短期・中期・長期の目標をあげ、それぞれの項目の下段に進捗状況を記した。

短期目標 (1～3年以内)	中期目標 (3～5年以内)	長期目標 (5～7年以内)
① 教科横断型教科及び文理融合カリキュラムの設定		
学校設定教科「グローバル探究」の施行・改善、文理融合カリキュラムの実施	学校設定教科「グローバル探究」の英語運用による活動の定常化	共通の学習内容・指導法のもとで「グローバル探究」の全クラス・全学年での実施
〔進捗状況〕 計画していた「グローバル探究」を令和4年度より施行した。教科内容・指導計画に関して、育成したい生徒像・能力を念頭に置いた3年間のプログラムの完成を目指していきたい。「グローバル探究」を生徒の興味・関心に応じたゼミ形式で展開していくことで、文理の区分に縛られない自由な探究活動を実現していく。		
② 留学・海外フィールドワークのカリキュラム化(オンラインでの実施を含む)		
研修先の開拓・開発(3カ国、3ヶ所以上)、留学プログラム(期間選択制)の施行・改善	研修先の開拓・開発(5カ国、5ヶ所以上)、校内他クラスの留学プログラム実施	研修先の開拓・開発(5カ国、10ヶ所以上)、長期留学プログラム(1年間)の実施
〔進捗状況〕 留学プログラムおよび「GIフィールドワーク advance(海外研修)」については、当初の予定通り執行した。留学プログラムは今年度2回目の実施となり、昨年度は2か月間のターム留学(カナダ)を行ったが、今年は留学期間を1か月間と2か月間の選択制に変更し生徒の希望に応じて選べるようにした。海外研修は、新型コロナウイルス感染拡大の緩和に伴いマレーシア・シンガポールへの海外渡航が実現でき、連携校・事業協働機関との交流を行った。 研修先の開拓としては、現在ハワイをはじめ数か国との連携・調整を図っている段階である。		
③ 留学生との探究活動(オンラインでの実施を含む)		
留学生と協働した活動プログラムの完成及び施行・改善	留学生の母国との交流を含めた探究活動の実施	交換留学を通じた双方向の探究プログラムの構築
〔進捗状況〕 今年度「アジア高校生架け橋プロジェクト」が最終年度を迎え、過去最長の8か月間の学校生活を拠点校で過ごした。GIクラスに配属し本校生徒と同様の授業を受け、学校行事等にも参加した。探究活動においてはプレゼンテーションやディスカッション等で協働学習を行った。		
④ 国際会議の開催(オンラインでの実施を含む)		
拠点校で開催する連携校の参加する定例国際会議「食のサミット」の実施	連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加	海外連携校での「食のサミット」または食に関連する国際会議の開催・連携校の参加
〔進捗状況〕 昨年度に続き「食のサミット」をハイブリッド実施し、海外連携校はオンライン参加、国内連携校は対面・オンラインにて代表チームが参加した。今年度は初めて事業協働機関の国連WFPにも参加頂き講評等を依頼した。また、サミットと並行し、一般生徒も同様のテーマに沿ったポスターセッションを行い、学校全体として行事を運営することができた。		
⑤ ALネットワーク連携の質的向上と拡大		
福岡県内のベンチャー企業と連携	国内外で活躍するベンチャー企業と連携	ALネットワーク内で計30団体以上と連携
〔進捗状況〕 「GIスキルアップセミナー」の開催により、県内のベンチャーキャピタル企業「SGインキュベート株式会社」と直接連携し、アントレプレナーシップの養成に必要な講義等を実施できた。次年度はこのセミナーを継続しつつ、県内のベンチャー企業とも連携し、ALネットワークへの新規参加の要請を検討する。		
⑥ 高大連携及び大学課程の早期履修(APプログラム)、大学講座の配信		

併設大学・短期大学部への入試における多面的評価システムの完成、現地参加型 AP プログラムの完成及び施行・改善	AP プログラムの受講可能講座数を事業開始時の 3 倍以上に増加、ICT を用いたライブ講義や講義動画の提供を開始	連携校への AP プログラム導入に向けた試行・改善
〔進捗状況〕 AP プログラムに関しては、昨年度に続きオンラインでの実施(試験のみ会場にて実施)になったが、実施 5 年目になりプログラム自体は概ね完成したものが整備できている。中期目標にある講座数の増加は、事業協働機関である中村学園大学にて検討を進めているため、調整には時間を要する。		
⑦ 国内外トップ大学への進学・起業家の輩出 ※開発するカリキュラムによる卒業生の輩出後からの期間として		
国内 10 名・海外 5 名以上進学 起業家 1 名以上	国内 15 名・海外 7 名以上進学 起業家 3 名以上	国内 20 名・海外 10 名以上進学、 起業家 5 名以上
〔進捗状況〕 令和 4 年度は GI クラス 1 期生が卒業した。開発カリキュラムで学んだ様々な知識、経験から得られた課題観を専門分野に結び付けた探究活動を行うことによって、栄養学(食をめぐる探究)、語学(英語探究や食のサミット)、経営学(アントレプレナーシップ)といった進路決定につながる事ができた。SGU 指定大学には、33 名中 4 名が進学した。海外進学者はコロナの影響もあって今年度いかなかったが、来年度以降輩出していきたい。 高校卒業後すぐに起業家を輩出することは難しいため、今後は高大接続・連携を進めながら、目標の実現を目指したい。		
⑧ 教員向けの教育研修・セミナーの実施 (オンラインでの実施を含む)		
国内外の連携校との合同研修会や情報交換会の実施	地域(県内または九州内)を包括したグローバル・イノベーター教育セミナーの開催	AL ネットワーク全体を包括した国際的な教育セミナーの開催
〔進捗状況〕 教員を対象とした事業連携校との合同研修については、令和 4 年度は中村学園三陽高校と 7 月に ICT 教育に関する研修と情報交換会を開催した。京都先端科学大学附属高校や高知国際高校とはWWL 事業担当教員が視察・情報交換を行ったが、合同研修会の実施まではできていない。来年度は開催できるよう計画をしていきたい。		

9 次年度以降の課題及び改善点

▶ 本事業に関する管理機関の課題や改善点

コロナ禍 3 年目となり、オンラインでの対応に係るファシリティの整備は概ね整ったが、現場の教員の ITC に係るスキルの向上や、連携校とのよりオンラインを活用した取り組みには至らなかった為、次年度には連携校とのオンラインを活用した取り組みの強化を行なっていきたい。

連携校とは、国際会議の際に連携強化の旨をお伝えし、双方に成果が上がる内容を検討し実施を行う。

また、連携校とは管理機関と拠点校で結んだ Microsoft 社の Teams にて事業実施体制はシームレスに連携できる検証ができたが、連携校まで拡大することができていなかったため、今後連携校ともより一層連携が可能になる仕組みを検討する。

▶ AL ネットワークの課題や改善点

令和 4 年度は、連携校相互の行事参加をはじめ昨年度同等の交流活動に取り組むことができた。しかし、事業の見直しや行事・探究活動の内容充実を優先したため、ネットワークの活性化につなげることはできなかった。単発に終わらず、年間を通じたネットワーク交流をはかるとともに、新規の連携校を増やししながら生徒どうしの交流機会を増やしていく必要がある。令和 6 年度からはじまる本事業の自走化も考慮に入れた上で、年間スケジュールの見直しやそれぞれの行事のブラッシュアップをはかっていきたい。

▶ 研究開発にかかる課題や改善点

令和3年度までは新型コロナウイルス感染症拡大のため、多くの学校行事が中止や実施方法の変更を余儀なくされた。令和4年度は感染症の拡大やその対応が少しずつ緩和されていったこともあり、海外渡航や対面での国際交流を実現することができた。高校1年生対象の「フィールドワーク basic(グローバルキャンパス)」や、高校2年生対象の「フィールドワーク advance(海外研修)」がそれにあたる。コロナ禍によって奇しくもオンラインでの教育・交流が可能となり、今後は対面とオンラインのハイブリット化を様々な教育活動で検討していきたい。

令和4年度はGIクラス3年目の集大成の年となった。研究成果を披露する論文発表会にあたる「GIプレゼンテーション」を初めて開催した。論文作成の成果を第三者に伝えることを通して、自分の頭にある知識をいかに論理的・客観的にまとめ、表現することが難しいか学んだ生徒も多かった。今後も学際機関を中心に、論文指導の質的向上を図る取り組みを継続していきたい。また、探究活動の成果を最大限に活用し、国内外のトップ大学への進路実現やイノベーターの誕生にまで到達できるよう、指導法及び実践の研究を今後も続けていく。

また、新しい学校設定教科「グローバル探究」を学年進行で開始した。これまではGIクラス単独で行ってきた探究活動を学年全体に広げることで、教員間の指導能力の差を埋めるために、より組織的な探究活動の体制づくりが必要となっている。来年度は学校全体が探究活動に不自由なく対応できる体制の構築を目指していきたい。

【担当者】

担当課	法人本部 経営企画室	TEL	092-831-0981
氏名	松本 公典	FAX	092-831-0985
職名	室長	E-mail	wwl-njh@nakamura-u.ac.jp

Ⅱ 令和4年度事業実施計画書

Ⅱ-1 事業実施計画書

令和4年 1月27日

事業実施計画書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 福岡県福岡市城南区別府 5-7-1
管理機関名 学校法人中村学園
代表者名 理事長 中村 量一 印

1 事業の実施期間

契約締結日～ 令和5年 3月 31日

2 事業拠点校名

学校名 中村学園女子高等学校
学校長名 奥井 裕紀子

3 構想名 「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

4 構想の概要

これまでのSGH事業の成果をさらに発展・充実させながら、地球規模の課題「食」に関する探究活動による課題解決を通じてSociety 5.0をたくましく創造的に生きる人材を育成する。ここで扱う「食」の課題は、食に関わる4領域（社会文化・環境・経済・栄養）及びSDGsのターゲットである。この教育的基盤となるALコンソーシアムを組織し、拡大と発展を図りながら、広く生徒たちに高度な学びの機会を提供し、より多くのイノベティブなグローバル人材を育成する。育成過程において、文理融合型のカリキュラムやイノベーションスキルの育成法・評価法、生徒の多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓、留学生との協働を最適化する実践プログラム、大学教育の先取り履修による高度な学びの提供方法等の開発へ特に注力することで、「食」を切り口として新しい価値を創造し、グローバル・イノベーターを育成するための教育プログラムのスタンダードモデルを創りあげる。

5 令和4年度の構想計画

(1) ALネットワークの形成

a. 運営組織の拡充【管理機関・拠点校】

管理機関と拠点校とが一体となり、様々な連絡手段をフルに活用して組織内の意思疎通を密にしながら、広範囲に渡る事業項目の施行を円滑に進めていくことで引き続きALネットワークの着実な拡充を目指す。

b. 情報共有体制の整備【管理機関・拠点校】

ALネットワーク連絡会に限らず、連携校や事業協働機関と定期的に会議や情報交換を引き続き行う。可能な限り共有事項の発信をホームページやメール等で相互に行う。

c. 国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進【拠点校】

① 教員チームによる生徒のコーチング

課題研究や論文作成、進路指導等にあたる教員チームを作成し、担当する生徒に対して適切なコーチングを行う。

② 事業協働機関である大学の学校説明会や入試対策講座の開催

事業協働機関である立命館アジア太平洋大学、中村学園大学・短期大学部、ハワイ大学 KCC、マーセッド大学等の学校説明会を開催し、参加を推奨する。また、入試対策講座も開講する。

③ 留学プログラム、海外研修、国際シンポジウム等への参加の奨励

1年 GI クラス対象の留学プログラムや全校生徒対象の夏期休暇を利用した海外研修（オンライン研修を含む）について、説明会を開催して参加を奨励する。また、国際的な発表や意見交換、リーダーシップ養成等のイベントの情報提供を積極的に生徒へ行い参加を促す。

d. カリキュラム開発のための人材の雇用と配置【管理機関・拠点校】

専門性を有するカリキュラムアドバイザー2名を配置し、カリキュラム検討委員会を定期的に開催する。

e. テーマと関連した高校生国際会議等の開催と参加

① 「食のサミット」の開催【拠点校・連携校】

食に関わる地球規模の課題について、世界各国の中高生がその解決策をチームで考え発表する形式でのコンテストを毎年開催している。国内外の連携校をはじめ、他の学校にも参加を広く呼びかける。

② 「グローバルシミュレーションゲーミング」への参加【連携校】

連携校である京都先端科学大学附属中学校・高等学校が開催する模擬国連形式の大会であり、国内外から多数の参加がある。拠点校からも代表チームが参加を予定している。

f. フォーラムや成果報告会の開催と参加

① 「WWL 報告会」の開催【拠点校・連携校】

拠点校の全校生徒が食に関する課題とその解決策について、探究的な取り組み成果のステージ発表やポスターセッションを行う。また、国内外の連携校からも研究発表の参加を予定している。

② 「課題研究成果発表会」「探究成果報告会」への参加【連携校・拠点校】

1年間の探究活動の成果発表の場として連携校の京都先端科学大学附属高等学校が「課題研究成果発表会」を1月に開催する。食に関わる探究成果の発表を拠点校の代表チームが行う予定である。また、連携校の高知西高等学校も同様の趣旨で「探究成果報告会」を3月に開催し、拠点校の代表チームが発表を行う予定である。

g. 情報収集・提供等、その他の取組【拠点校】

① 広報誌の発行・配布

拠点校の本事業の取り組み内容と成果を広く発信するために、定期的に広報誌を発行し、生徒や保護者、近隣の学校等に配布する。

② 学校ホームページの充実

広報誌のみならず、拠点校のホームページにグローバル教育等の項目を設け、本事業の取り組み内容と成果をタイムリーに発信する。記事は日英両言語で記載する。

③ SNS の利用と動画の紹介

拠点校の生徒が作成した本事業に関連する活動についての記事や写真を Instagram を用いて定期的に広報する。また、生徒の活動動画を拠点校のホームページや Youtube を活用し紹介する。

(2) 研究開発・実践

a. テーマとして設定するグローバルな社会課題【拠点校】

本事業のテーマは『「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成』である。管理機関が創立以来、継続して研究してきた「食」について、SDGsと結びつけた探究活動に取り組む過程において、生徒たちにイノベティブなグローバル人材として必要な基礎力が養成されると考えている。

b. 関係機関との協働による先進的なカリキュラム開発【拠点校・事業協働機関】

①「GI 探究」の開発と実践（2・3年GIクラス）

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部をはじめとする大学、各企業等の食に関する高度で専門的な知見を取り入れ、授業方法や教材の開発を引き続き行う。

②「グローバル探究」への移行と開発・実践（1年全クラス）

これまでの「GI 探究」に換わり令和4年度入学生より学年進行で実施する新しい学校設定教科「グローバル探究」の教科内容や評価法等の開発を引き続き行うとともに、指導する各担任の円滑で効果的な実施を促進するための体制を整備する。

③「GI フィールドワーク Basic」の開発と実践（1年全クラス）

事業協働機関である立命館アジア太平洋大学の留学生と英語でコミュニケーションを図りながら、異文化交流を通してコミュニケーション力や多様性受容力を養成することを目的として実施する。

④「GI フィールドワーク Advance」の開発と実践（2年GIクラス）

連携校であるスルタンイブラヒム女子高校との文化交流や、事業協働機関であるマレーシア工科大学の学生とテーマに基づくディスカッション等を行う予定である。

⑤「GI 留学プログラム」の開発と実施（1年GIクラス）

連携校であり、留学プログラムの実施に精通する京都先端科学大学附属中学校・高等学校と密に情報交換を行い、2度目の実施となる今年度もより効果的で円滑な実施を目指す。

⑥「GI スキルアップセミナー」の開発と実施（2年GIクラス）

事業協働機関であるSGインキュベート株式会社と連携し、アントレプレナーシップに関するセミナーの企画・運営を行い、起業家の育成を図る。また、年度後半は、中学3年～高校2年の希望者を対象としたアントレプレナーシップのセミナーとワークショップを開催し、より多くの生徒に対して起業への意識の向上を図る。

⑦「GI プレゼンテーション（論文発表会）」の開発と実施（3年GIクラス）

論理的思考力や表現力を養う場として、GIクラス生徒一人ひとりが3年間の探究活動の成果として作成した研究論文を発表する機会を設ける。可能であれば、2年GIクラスの生徒は論文の中間発表的な位置づけにできるよう調整し計画を進める。

c. 新たな教科・科目の設定【拠点校】

①探究授業の実践と外国人講師・ICTの活用

「GI 探究」や「グローバル探究」は、課題探究活動を通してグローバル・イノベーターを育成するための主軸となる探究教科であり、GIクラスでは外国人講師と複数名の担当教員でチームを組み指導にあたる。ICTを活用した調査活動・発表・国内外との交流等を含む。令和4年度2・3年次で実施の「GI 探究」は次の内容で進める。

[2年次：2単位] 地球規模の課題である「食」に関する課題発見、課題解決のための調査、解決策の提案、発表等をグループから個人へと学習形態を徐々に変換して活動を進める。GI フィールドワーク Advanceの事前準備や成果発表も学習活動に取り入れる。

[3年次：1単位] 2年次での調査研究活動の集大成となる論文作成と発表、外部への発信を行う。GI スキルアップセミナーで習得したイノベーションスキルを生かした独創的・創造的な課題解決法を含む論文となるよう指導する。

②新しい学校設定教科「グローバル探究」の開発・実践

令和4年度入学生から学年進行で開設する新しい学校設定教科であり、現在GIクラスのみが履修する「GI探究」に換わり全クラスで実施する。「GI探究」の学習内容をベースとして教育開発部会等で指導計画を作成して担任会で説明・内容確認の後、各担任により円滑な実践を行う。1年次は次の内容で進めていく予定である。

〔1年次：1単位〕日本（特に地元福岡）と世界（特にアジア）を知る、食の4領域（食と社会文化、食と環境、食と経済、食と栄養）等の学習を通して課題発見・課題解決法を見出す、課題研究の方法の基礎・基本の理解等に関連させた内容についてグループ学習を中心に進める。

d. カリキュラムに位置づけられた短期・長期の留学や海外研修【管理機関・拠点校】

①「GI留学プログラム」（1年GIクラス）

3学期に希望者を対象として約3ヶ月に渡るカナダへの留学プログラムを実施する。プログラム概要の説明会、参加者対象のオリエンテーション等を計画的に行う。また、参加者の費用を管理機関が支援する候補者の選考を秋に実施する予定である。

②「GIフィールドワーク Advance」（2年GIクラス）

9月または10月にGIクラス全員が参加する海外研修であり、課題解決力、突破力、創造力、調和力等を養成することを目的として実施する。新型コロナウイルスの感染拡大の可能性を考慮し、オンラインでの研修も視野に入れて計画を進める。

e. バランスよく学ぶカリキュラムの編成【拠点校】

1年生全員が「グローバル探究」、2・3年GIクラスの全員が「GI探究」を履修する。いずれも文理融合的な学習内容の学校設定教科である。また、文系・理系の区分に関わらず生徒の興味・関心や進路希望によって選択できる科目の履修等を可能にするカリキュラムの研究開発を引き続き行う。

f. 工夫された学習活動の実施【拠点校】

①ICTの活用（全学年全クラス、主としてGIクラス）

学習の個別化・最適化を図るために、反転授業によるビデオレッスン、英会話のマンツーマンレッスンを実施する。また、国内外の連携校や事業協働機関とのオンラインでの授業や会議を年間のべ10回以上行う。

②学校設定科目「英語探究」の活動（GIクラス）

学習した英会話力を生かし、留学生や外国からの訪問者に学校や地元の名所・旧跡を案内すること等を通して、日本の歴史や文化を体験し習得できる機会を設ける。

③指導指標に基づく教員の指導力向上（全教員）

生徒が21世紀型スキルを習得するために教師が授業に臨む姿勢を示した指標に基づき、それらを達成するための授業改善を繰り返し行い指導力の向上を目指す。

g. 大学教育の先取り履修【拠点校・連携校・事業協働機関】

事業協働機関である中村学園大学・短期大学部の科目履修生制度を後学期から拠点校及び連携校である中村学園三陽高等学校の2年生が受講できるよう準備を進める。令和3年度に続きオンライン・オンデマンドの方式により、履修可能な講座数を増やすとともに履修者増を図る。

h. より高度な内容を学習できる環境整備【拠点校】

①「GI講座」の開催（全学年全クラス）

事業協働機関等から講師を招聘し、食やイノベーション等の高度な専門的内容に関する講演・講座を年数回開催する。

②各教科による取り組み（全学年全クラス）

毎年実施している定期的な英検準1級対策講座、CEFR B1・B2レベル突破講座、魚介類の解剖と食文化を絡めた実験実習等、各教科教員による高度な学びの機会を提供する。

i. 留学生の受け入れと学校体制の整備

①「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生の受け入れ【拠点校】

平成30年度より4カ年でのべ13カ国33名を受け入れており、令和4年度も数名を受け入れる予定である。

②信男教育学園高等学校からの転入生の受け入れ【拠点校・連携校】

連携校である中国の信男教育学園高等学校からは、平成29年度より5カ年でのべ14名を受け入れており、令和4年度も引き続き2学期より数名を受け入れる予定である。

(3) 財政支援等【管理機関】

a. 自己負担額の支出

事業名	予算(千円)		
	管理機関負担	参加者負担	計
運営指導委員会(オブザーバー謝金)	200	0	200
GIフィールドワーク Basic(参加費用)	0	300	300
GIフィールドワーク Advance(参加費用)	0	5,000	5,000
GI留学プログラム(留学費用)	0	23,670	23,670
食のサミット(招聘・実施費用)	2,595	0	2,595
海外交流アドバイザー等(人件費)	4,128	0	4,128
企業連携費用	300	0	300
WWL事業実施内容報告(報告費用)	516	0	516
合計	7,739	28,970	36,709

b. 人的または財政的な支援、研修やセミナー等の実施

(ア) 学園グループとして専門性を有する講師の派遣

管理機関が設置している中村学園大学等及び姉妹法人が設置している中村調理製菓専門学校等の教員による専門性の高い研修等を実施する。

(イ) 海外交流アドバイザーの配置

管理機関の教職員として配置し、海外関連教育活動の企画立案に携わる。

(ウ) 中村学園国際交流基金の活用

管理機関が設定している基金より、WWL事業にかかる一部の経費を負担する。

c. 国の委託終了後の継続的な実施

3年間の研究・実践のうち、成果が高かった内容をより効率的に継続実施をしていくと共に、企業や研究機関に寄付講座を依頼し、食を通じた広範かつ深い学びの実現を図る。また、管理機関が平成29年度に開催した「YAKUZEN EXPO」にて協賛金900万円を得た実績を活かし、「食のサミット」等の各事業におけるスポンサー募集を行なうことも検討している。

<添付資料>

- ・令和4年度教育課程表

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
①運営組織の拡充	学校法人中村学園	副理事長 中村紘右
②情報共有体制の整備	学校法人中村学園	副理事長 中村紘右
③教員チームによるコーチング	中村学園女子高等学校	教育開発部 平田晃己
④学校説明会や入試講座の開催	中村学園女子高等学校	進路指導部 鬼島隆
⑤留学・海外研修等の参加奨励	中村学園女子高等学校	教育開発部 平田晃己
⑥カリキュラムアドバイザーの配置	学校法人中村学園	副理事長 中村紘右

WWLコンソーシアム構築支援事業の構想概要

「食」の課題解決により持続可能な社会を創出するイノベーターの育成

■ 研究開発の概要（オンラインでの実施を含めた開発）

- ① 「食」を切り口とした文理融合型カリキュラム及びそれに位置づけられたイノベーションスキルの育成法・評価法の開発
- ② 「食」に関する多様な目的や課題に対応した国内外の研修先の開拓と開発
- ③ 「食」に取り組む学校や機関によるALネットワークの拡充と組織化（効率よく成果を最大限に上げる方法）の開発
- ④ 留学生との協働を最適化するプログラムの開発
- ⑤ 多面的評価による入試方式とAP導入による高度な学びの提供方法の開発

■ イノベティブなグローバル人材に必要な資質・能力等（育成する人材像）

まずは日本人としての自覚と素養を備え持つ。これに加え、グローバル・リーダーとして必要な地球規模の課題への関心、多様性受容力、コミュニケーション力を併せ持ち、自主的な学習ができる。さらに、イノベーターとして必要な課題解決力、突破力、創造力、調和力を兼ね備えている。

GI（グローバル・イノベーター）として社会への貢献 ▶ 進路実現：国内外のトップ校を含む大学・起業家



Ⅲ 管理機関の取り組み

Ⅲ-1	夏期職員研修「ICT活用ワークショップ」	
	2021.7.21(水) 9:00～12:10	拠点校：視聴覚室、各教室

拠点校の夏期職員研修が7月20～21日の2日間に渡って行われ、2日目の午後に「ICT活用ワークショップ」を実施した。本校ではアクティブラーニング型の授業や探究活動をより豊かにする、効率化するために株式会社LoiLoの「ロイロノート・スクール」というアプリを全教職員・全生徒に本年度より導入した。授業、部活動、行事といったあらゆる学校生活の場面において、ICTを積極的に活用していくきっかけとなることを目的としており、連携校である中村学園三陽高校をまねき研修を実施した。中村学園三陽高等学校は先んじてこの「ロイロノート・スクール」を教職員・生徒に導入しており、学校生活で活用事例や、学習効果の上がる使い方の先行事例を多く有している。今回講師としてお招きし、教科ごとにワークショップを行った。ICTについての研修という位置づけだけでなく、ALネットワークの連携の強化も目的とした研修として実施することができた。

研修の内容については、はじめは全体会として、中村学園三陽高校の代表の教員に基本的な操作方法などの紹介をしてもらった。その後は教科ごとに分かれ、それぞれの教科や科目に応じた実践事例(成功・失敗共に含む)を中村学園三陽高校の各教科の教員から拠点校職員に事例共有を行った。教科によっては具体的な単元を例に、生徒に実際行う教育活動を拠点校教員にさせてみながら使用感を聞くといった研修が行われていた。また、拠点校は女子高で中村学園三陽高等学校は男子高であるため、男女別学校同士で同じアプリを使用した場合、「男子では、女子では、こうすればうまくいく」といった性別差がどのように指導の違いにつながるのかといった興味深いやり取りも多く見られた。

Ⅲ-2	中村学会の開催	
	—	—

中村学園グループ内の併設校である中村学園女子高等学校(WWL 拠点校)および中村学園三陽高等学校(WWL 連携校)の選抜された有志若手職員で構成し、教育手法の研究開発を通じて教授法等の提案を教育開発部に行い、双方の協働により教育力の向上を図ることを目的とする。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により開催ができなかった。

III-3	海外交流アドバイザーの配置	
	通年	管理機関

令和4年度の海外交流アドバイザーは、昨年度に引き続き管理機関の職員である伊東正子氏が担当した。本年度、留学生の受入や海外研修・留学、海外連携校の開拓における外部機関との連携・調整を図るとともに、WWL事業の各種行事における企画・運営に携わった。

担当した業務に関しては以下のとおりである。

1. 事業拠点校の海外研修・留学に関する企画・実施

- ▶ GI1年生対象「留学プログラム（参加希望制）」及びGI2年生対象「GIフィールドワーク advance（海外研修）」における、関係機関との連絡・調整、説明会の開催
- ▶ 留学支援金の合格者選考に関する企画・運営、管理機関と事業拠点校間の連絡・調整
- ▶ 夏期海外研修（全校生徒希望者対象）における、関係機関との連絡・調整、プランの選定、説明会の開催

2. 事業拠点校の学校行事

- ▶ 「GIフィールドワーク basic（グローバル・キャンパス）」における、事業協働機関立命館アジア太平洋大学（APU）での国際学生（研修スタッフ）募集・連絡・調整

3. 教育開発部会

- ▶ 教育開発部会への参加
- ▶ 決定事項や議案に関する管理機関への連絡・調整

4. その他

- ▶ アジア高校生架け橋プロジェクトにおける、AFSとの連携・調整、留学生対応
- ▶ 留学生・外国からの転入生の問い合わせ等の対応
- ▶ 留学や進学に伴う海外渡航に関する教職員・生徒への相談対応
- ▶ 海外連携校開拓に伴う関係機関との連携・調整

III-4	情報共有体制の整備
通年	事務局・拠点校

国内外の連携校とは相互の学校行事への参加に関する連絡を中心にして、メールや電話などで共有を行っている。下記、本事業の主となる行事や授業関係の連絡および情報交換については、事務局および拠点校の教育開発部が行った。なお実施した行事については、拠点校および連携校のホームページに掲載し、拠点校の広報誌にも取り上げるなど、外部への情報公開を推進した。なお、管理機関や拠点校内についてはサイボウズ Garoon および Microsoft Teams にて連携を行い、拠点校と生徒・保護者間については Classi を使用して常時情報を共有している。

1. 連携校との情報交換など

(1) 拠点校主催の行事

- ▶ GI フィールドワーク Advance (海外FW)におけるスルタンイブラヒム女子高校(SIGS) (マレーシア) 訪問のための連絡・打ち合わせ
- ▶ WWL 報告会での課題研究の発表参加のための連絡・打ち合わせ
- ▶ 食のサミットへの代表チームの参加募集、事前打ち合わせ、事前会議・プレ会議の連絡など

(2) 連携校主催の行事

[京都先端科学大学附属高等学校]

- ▶ AL ネットワーク連絡会(5月25日実施)への拠点校教員参加のための打ち合わせ
- ▶ St. Pedro Poveda College によるオンライン特別講義(6月25日)への拠点校生徒聴講の調整
- ▶ 職員研修会(8月23日実施)での拠点校職員の実践発表に伴う連絡・調整
- ▶ グローバル・シミュレーション・ゲーミング(1月24日実施)への参加案内
- ▶ 探究成果発表会(3月13日実施)への参加案内、拠点校生徒参加の調整

[高知県立高知国際高等学校]

- ▶ 探究成果発表会(3月11日実施)への参加案内、拠点校生徒参加の調整

(3) その他

- ▶ 信男教育学園上海文来高校(中華人民共和国)からの転入生受け入れの調整

2. 事業協働機関との情報交換など

(1) 中村学園大学・中村学園短期大学部

- ▶ 中村学園大学・短期大学部学校説明会への拠点校生徒への参加案内など
- ▶ 科目等履修制度(大学講座の先取り履修)の拠点校生徒への説明および募集・実施など

(2) 立命館アジア太平洋大学

- ▶ 立命館アジア太平洋大学学校説明会(8月3日オンライン実施)の拠点校生徒への参加案内など
- ▶ GI フィールドワーク Basic(グローバル・キャンパス)における指導学生の募集・決定・実施要領説明など

(3) 中村調理製菓専門学校、九州大学共創学部

- ▶ 論文指導講師の派遣依頼

(4) ハワイ大学 KCC

- ▶ 進学説明会への参加案内など

- (5) マレーシア工科大学(UTM)
 - ▶ GI フィールドワーク Advance(海外FW)における大学訪問のための連絡・打ち合わせ
 - (6) SG インキュベート株式会社
 - ▶ GI スキルアップセミナーの要領説明および講師紹介依頼など
 - ▶アントレプレナーシップ・セミナー／ワークショップの講師紹介依頼など
 - (7) 国連 WFP 協会
 - ▶ 食のサミット(3月10・11日実施)への招待、提言書の提出
3. 管理機関との情報交換など
- (1) 事業全体の進捗管理
 - (2) 運営指導委員会等の会議の開催

III-5	教員チームによるコーチング	
	通年	拠点校 GI クラス

高校 3 学年の GI クラスでは、探究授業担当者によって組織した教員チームが、クラスの生徒個々の指導を分担して行った。いずれの教員チームも、下表のように英語・国語・数学・地歴公民・理科・家庭科・情報の教科担当者を含む 7～8 名で、生徒の幅広い興味・関心に対応できる体制を整えた。探究活動のなかでのレポート作成や発表指導は通年行っているが、特に 3 年 GI クラスでは 4～10 月に論文を作成し、論文の完成度を高めるためにより細やかな個人指導を行った。

今年度の高校 1 年生から GI クラスだけでなく学年全クラスがグローバル探究を実施することになった。GI クラス以外は担任がクラスの探究活動を指導している。今後 2 年次・3 年次も担任が指導することになるため、各担任の指導力の向上や、それを実現する体制を整備する必要がある。

表 GI クラスの教員チーム(探究授業担当者)

学年・クラス 教科	1 年 GI クラス	2 年 GI クラス	3 年 GI クラス
英語	豊見山・長島	三浦・ハイダー	永松
国語	篠原	橋本	神谷
数学	石井	横山	池田
地歴公民	西川	藤岡	西岡
理科	中垣内	江口	平田
家庭科	佐藤	上野	上野
情報	手島	手島	手島

III-6	GI 留学プログラム参加支援	
	2023. 7～9 月	管理機関・拠点校

昨年度より開始した「GI 留学プログラム」(GI1 年生対象・カナダ)では、参加者を多く募るために学園で実施していた留学支援制度の拡充を実施した。本制度は留学希望者を対象に学園関係者による選考を経て、渡航費用の半額相当の支援金(給付型)が支給された。留学支援の目的は、以下の3点である。

- ▶ 生徒のモチベーション、学習意欲向上に繋げる
- ▶ 留学目的を整理させ、留学の成果を高める
- ▶ 経済的支援により、留学希望者を増やすことで海外進学者の増加が期待できる

選考においては、審査基準として学業成績のみならず、時代の変遷に即したかたちで「思考力」「判断力」「表現力」をより重視するようにした。なお、選考は一次選考(校内選考)・二次選考(学園本部選考)とし、選考スケジュールは以下のとおりである。なお、選考委員は日々の中で生徒と関わらない学園関係者で構成し、不要なバイアスにとられない様に厳正な審査を行った。

[選考スケジュール]

日程	内容
7月9日	説明会(対象：生徒・保護者)
7月15日～7月29日	一次選考(エッセイ)受付 エッセイテーマ：「留学で学びたいこと」等 ※日英両言語
7月30日～8月2日	選考委員による審査
8月3日	選考委員による協議
8月5日	一次選考結果通知発送
9月17日	二次選考(プレゼンテーション) プレゼンテーションテーマ：「なぜ留学をしたいか」 ※日本語
9月20日	結果通知

一次選考では志願者19名中9名が通過し、二次選考では3名が合格した。合格者3名については、帰国後に成果発表を行う。

III-7	SDGs の取り組み(コンポストの実施)	
	2022. 5. 9～	拠点校

1. 実施の目的

管理機関である中村学園では、グループ内の大学・高等学校・幼稚園・各事業所で生ゴミを堆肥にかえるコンポストを作成・設置している。これはグループ全体でSDGs 「11番 住み続けられるまちづくりを」「12番 つくる責任 つかう責任」について取り組もうとはじめた活動である。拠点校においては、生徒自身が日ごろ利用しているカフェテリアの生ゴミを生徒自身の手で堆肥化することで、SDGsについて自ら考え、実践し、自分事として捉える機会にすることを目的としている。

2. 実施方法

放課後、係生徒がカフェテリアへ生ゴミを取りにいき、決められたコンポストバッグにカフェテリアで廃棄された生ゴミ(1日約5kg)を入れる。

3. 実施の流れ

▶ 5月9日(月)

1限目のLHRでコンポストに関する講演を聞く。※ZOOMにて実施

[講師] ローカルフードサイクリング株式会社 代表取締役 たいら 由以子 氏

特定非営利活動法人 循環生活研究所 理事 木村 真知子 氏

▶ 5月21日(土)

コンポストに使用する物品の説明・準備を高2各クラスの係に行う。その様子をZOOMにて高2全クラスに中継し、作業後は係によるクラス生徒への説明を実施する。

▶ 5月23日(月)

放課後、コンポスト作り開始。

▶ 7月末

高2コンポストは熟成期間に入る。

▶ 8月末

屋上にコンポストで作成した堆肥を補完する木枠を設置。

▶ 9月12日(月)

コンポストに使用する物品の説明・準備を高1各クラスの係に行う。その様子をZOOMにて高1全クラスに中継し、作業後は係によるクラス生徒への説明を実施する。

▶ 10月3日(月)

高1生ゴミ投入開始。

▶ 10月7日(金)

高2プランター作り：バッグ内で熟成させた堆肥に土を混ぜる。

▶ 12月

高1コンポストは熟成期間に入る。

[実施により得られたデータ]

日付	バッグの平均温度	気づいたこと	日付	バッグの平均温度	気づいたこと
5月23日	23.0	今日のさざいはさらさらだった。	10月3日	24.0	今日入れた生ごみが結構綺麗に発酵するらしいので楽しみです。虫はいませんでした。
5月24日	23.6	野菜を細かく切るのは大事だと思った	10月4日	29.0	においはまだ気にならなかった
5月25日	23.5	虫がいた、ご飯の匂いがまだ残っていた	10月6日	22.8	湿っていて前回よりも匂いがきつかった。
5月26日	28.0	温度が高かった	10月14日	22.9	白カビが出てきた
5月27日	24.8	匂いはそこまで気にならなかった	10月17日	25.8	温度はあまり高くなってなかったけど湿っていた。袋に穴が空いていたので虫が入らないといいなと思いました。
5月30日	29.0	細かくして入れることが大事	10月18日	19.8	前回より温度が上がっている
5月31日	29.6	虫がいた、温度が上がっていた、土を増やした	10月19日	21.6	大変匂いがきつかったでございます。
6月1日	35.3	40度超えるものがあった。土の奥の方が暑い。	10月20日	27.5	混ぜるときに温かった。湿っていた。
6月2日	35.5	量が多かった	10月21日	27.7	相変わらず臭いです。
6月3日	37.7	温かった。思ったより臭いがしなかった。	10月24日	22.2	臭いはそんななかった。2、3週間前に入れたものが分解されてきていた。
6月6日	27.8	かびがはえてた	10月25日	22.6	温度がしっかり上がっているのと変わらないのがあった
6月7日	32.0	前回より温度が上がった。野菜が多い。	10月26日	23.1	臭い。温度が下がってました。
6月8日	34.9	温度が低くなってる	10月27日	34.5	とてもしめっていた。温度の差があった。くさかった。
6月9日	38.7	送信したらWi-Fiが切れて全部無かったことにされました。温度は適当です。すみません	10月31日	30.8	土が暖かくなっていた
6月13日	30.8	人間の体温より低くてびっくりした。土が固かった。	11月1日	23.0	温度が前より上がっているものがあった。白カビが生えていた。
6月14日	30.2	オレンジが沢山入っていた。	11月2日	24.6	全体的に温度が上がっていて少し重くなった。
6月15日	33.7	虫がいっぱいた	11月4日	24.7	臭い
6月16日	35.0	虫が多くなってきた	11月7日	19.0	臭い
6月17日	32.5	温度が下がってきている	11月8日	18.9	温度がどんどん下がっていている。あんまり発酵されていない。
6月20日	27.1	虫がたくさんいた、残り物の量が多かった	11月9日	20.6	中身が少なくなっているように感じた
6月21日	32.2	前回よりも虫が増えた。	11月10日	21.0	今日も相変わらず臭いです。
6月22日	35.3	1週間前より温度が、下がった	11月11日	22.6	とても湿っていた。
6月29日	29.6	虫が減ってた	11月14日	30.8	今日も大変臭かったです。
6月30日	34.9	むしがたくさんいました	11月15日	21.9	前回よりも温度が高くなってた。たけのこなどの大きいものはまだ分解されてなかった。
7月1日	34.6	栄養があるから虫が沢山いた。	11月16日	21.3	前回とあまり温度が変わっていない。
7月4日	31.9	むしがうまれた	11月17日	21.0	臭い、ご飯が多い
7月5日	31.3	虫が増えました。	11月18日	26.8	虫がいた、温度がいつもより高い、とても湿っている
7月6日	32.7	分解されてない野菜が多い、特に皮	11月25日	27.0	ひとつ温度が高いのがあった
7月15日	30.1	虫が沢山いた	11月29日	26.4	温度もすごく上がっていて、初めの方に入れたものがなくなっていているように思えた。
			11月30日	14.3	臭い
			12月1日	7.9	温度がいつもより低かった。
			12月2日	8.9	臭い



IV AL ネットワークとの取り組み

IV-1	全国高校生フォーラムへの参加	
2022. 12. 18(日) 13:00~17:30	オンライン	

本年度も、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業「全国高校生フォーラム」(オンライン開催)に参加した。研究テーマは参加生徒4名が話し合っ設定し、フードロス削減のために、個人や団体が長期的に実践し続けられる対策を検討した。

フォーラム当日は、全国のWWLやSGHの高校生と世界的な課題を英語でディスカッションすることで、本校生徒も他校の生徒の英語力や探究力に刺激を受ける良い機会となった。同発表内容は、後日本校にて開催したWWL報告会において、代表生徒がプレゼンテーションを行うことで全校生徒にも共有している。発表内容の概要については以下の通りである。

1. 発表タイトル

“Food Loss and Our Society—Reduce food loss and enhance environmental sustainability”

食品ロスと私たちの社会—食品ロスを削減し、環境の持続可能性を高める

2. 発表の要約

食品ロスは、気候変動や私たちの生活に大きな影響を及ぼしている。食品ロスに効果的に対処しなければ、飢餓や地球温暖化などの問題が深刻化することが予測される。本研究では、食品ロスに対する高校生の意識調査を行い、改善に向けて多くの人たちが実践を継続できる方法について考察する。

3. 発表資料(一部抜粋)



IV-2	九州大学 世界にはばたく高校生の成果発表会への参加	
2022. 12. 18(日) 13:00~17:30	対面参加	

1. 概要と代表チーム選考の流れ

九州大学主催の「令和 4 年度 将来の夢を切り拓く“高大連携”世界に羽ばたく高校生の成果発表会」に、2年GIクラスから2チーム(合計8名)が参加した。今回、参加希望者が約20名となったため、1チーム4名に分かれ、それぞれに研究計画書を作成し、発表会に参加する2チームを選抜した。

「環境問題」「ジェンダー(LGBTQ+)問題」「自己肯定感に関わる問題」などをキーワードに、生徒は様々な課題解決について研究した。選考の結果、以下の2チームが九州大学の発表会に参加することになった。

両チームとも生徒が主体的に研究し、チーム①は気候変動に対する独自の視点が評価され、参加者投票賞を受賞した。チーム②は受賞こそ逃したものの、テーマや調査手法、アクションプランの充実度に関して、大学の教員からも良い評価を得ることができた。また、WWL、SSH、SPH 指定の高校を多数含む九州各地から出場した高校生の意欲や質の高い研究から大いに学び刺激を受けた様子であった。また、九州大学の成果発表会に出場した2チームは、本校開催のWWL 報告会においてプレゼンテーションを行い、全校生徒と研究内容を共有することができた。

研究テーマの設定や研究手法の適正化、論理的な構成などについて改善の余地があるため、3年次のGI 課題論文発表に向けてスキルアップを図りたい。

チーム①「気候変動と私たち」(口頭発表)

チーム②「女子高生とファッションロス ～ファストファッションの裏側を知っていますか～」(動画発表)

2. 九州大学成果発表会での発表資料(一部抜粋)とコメント

[チーム①「気候変動と私たち」※参加者投票賞受賞]



気候変動と私たち
中学校園女子高校



研究目的
・気候変動に対する個別の意識
・政治や教育がどれくらい影響しているか
↓
可視化
現在の政治や教育に何が必要か明確にする



研究方法
① アンケート実施し 日本と他国を比べる
② 既存データで 日本と他国を比喩
③ ①、②の結果から考察する



気候変動意識調査アンケート



研究結果
Q5. 気候変動に関して何を感じるか教えてください
What do you feel about climate change?
不安 33%
悲しい 16%
希望がない 13%
怖い 12%
悲しい 7%
不安 25%
希望がない 6%
怖い 6%
不安 10%
希望がない 13%
怖い 16%
不安 33%
他国 日本



1
希望がないと感じる日本人の割合が多い
↓
サクセスストーリーを作れない教育に起因
↓
行動を起こそうと思わない
例) 投票率の低さ



国	希望がないと感じる日本人の割合が多い	サクセスストーリーを作れない教育に起因	行動を起こそうと思わない
日本	25.1%	44.8%	60.1%
イギリス	84.1%	92.0%	95.8%
フランス	79.4%	88.0%	97.0%
韓国	49.1%	74.6%	82.2%
中国	65.3%	84.8%	92.4%
インド	89.0%	96.5%	96.0%
アメリカ	82.2%	89.8%	91.1%
ブラジル	78.1%	88.0%	93.7%
インドネシア	82.6%	83.4%	92.4%



日本人の「自分で国や世界を変えられると思う」人の割合
18.3%
5人に1人



まずは今ある問題に気づき、それについて話すこと。

[チーム②「女子高生とファッションロス ～ファストファッションの裏側を知っていますか～」]



○ 参考：頂いた講評

この研究は、女子高生を対象に、ファッションロスの認知度やファストファッションへの意識を調査している。ファストファッションブランドとその他のブランドの店舗の利用率や購入した服の着用期間、着れなくなった際の対処法などを比較している。近隣の高校の協力も得て、短期間で275名にアンケート調査を行い、対処法の約9割が「譲る・売る・捨てる」だと明らかにした点が優れている。また、ファストファッションの問題を知り行動してもらうために、学校で古着を集めてリメイクするパッチワークプロジェクトを企画した点も面白い。研究にアクションが伴うことの大切さを感じさせてくれる発表であった。

IV-3	京都先端科学大学附属高校 GSG および成果発表会への参加	
GSG : 2022. 1. 24(日)	成果発表会 2023. 3. 13(月)	GSG : 対面 成果発表会 : オンライン

1. GSG (グローバル・シミュレーション・ゲーミング)

本年度、WWL 国内連携校である京都先端科学大学附属高校が主催する GSG(グローバル・シミュレーション・ゲーミング)に本年度初めて参加した。GSG とは、東京大学と立命館大学国際関係学部で開発されたシミュレーション・ゲーミングであり、2014 年に立命館大学で行われた Global Simulation Gaming のために作成されたガイドラインを、京都先端科学大学附属高校での実施により適した形式にアレンジした国際関係バーチャルリアリティゲーミングである。

GSG では、参加者全員がそれぞれのアクター(国際関係における主体)になりきって、国際政治や国際経済の動きの中で、課題設定、政策立案、交渉、条約締結、政策行使という一連のプロセスを擬似的に体験する。模擬国連に似た要素も多いが、特筆すべきはメディア・アクターが含まれており、政治とメディアの関係も含めて、よりリアルに国際関係を学ぶことである。GSG の主な到達目標の一部は下記のとおりである。

- (1) 多角的な視点から見た国際情勢への知識・理解力を養い、それを通して行動力を身につける。
- (2) 課題設定・政策立案・外交交渉を行うことで、現実の国際社会についての理解を深める。
- (3) 生徒同士で協働しながら学ぶ(ピアラーニング)を踏まえて、今の学習目標を作り発展させる。

本年度の GSG のテーマは「気候変動による難民の危機」であり、GI クラス 2 年生 8 名(4 人組×2 チーム)が参加した。参加者のうち 6 名は 1 年次にカナダへの短期留学を経験している。また、8 名全員が、海洋プラスチックや地球温暖化の抑制を目指す Blue Earth エコ給水キャンペーンや東南アジア(マレーシア・シンガポール)における GI 海外 FW に本年度参加している。このような背景もあり、彼女たちの参加動機は、「英語力を伸ばしたい」、「国際会議を経験したい」、「環境問題に興味がある」など様々であるが、どの生徒にとっても国際情勢や各国の状況を英語でリサーチし、交渉やディスカッションをする経験は貴重なものとなった。GSG について、2 月の職員会議において報告を行い、教職員間で以下のような内容の情報共有を行った。

○ GSG の報告資料の一部(抜粋)

<p>GSG (IN京都) / 2年GIクラス</p> 	<p>京都先端科学大学附属高校 </p> <ul style="list-style-type: none"> ◆京都市・花園 ◆永守 重信 理事長 (日本電産株式会社設立者) ◆WWL連携校 	<p>GSGの目的 (育成を目指す能力)</p>  <ul style="list-style-type: none"> ◆現実の国際社会の理解 (多角的な視点から課題・政策・外交を捉える) ◆生徒同士の協働力 (ピアラーニング) ◆学習目標と行動力 (グローバル人材に向けて)
<p>テーマ: 気候変動による難民の危機</p>  <p>GSG2022 (1/24 TUE)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆国内外約100名の高校生 (海外はオンライン参加) ◆約25か国のチーム (政府の要人やメディアの役割) ◆全て英語で議論・交渉 (決議案の採決を目指す) 	<p>2年GIチーム (フランス&バングラディシュ)</p>  <p>世界難民フォーラム(2019)でフランスは積極的な役割を果たしました!</p> <p>本国の現状は、難民への救済は一過性で、本国返還に責任が当たっている!</p>	<p>参加生徒の感想</p> <ul style="list-style-type: none"> ●国際情勢や各国の立場を考えて、英語で議論・交渉する良い機会になった。 ●議長担当の京都の高校生の英語力はもちろん、ハイブリットの国際会議をスムーズに進行させる対応力に大きな刺激をもらった。 ●私も英語力や大きなイベントでの対応力を磨いていきたい



今回、GSGに参加することで得た成果としては、生きた国際交流の中で、ICTを活用して主体的に活動し、世界各国の立場や国際情勢について理解を深めたことである。何よりも、国内外の全国の高校生と交流するなかで、より成長したいという刺激を得たことが生徒にとって一番の成果であろう。参加した生徒達からは、次のような感想の声を聞くことができた。

- ▶ 国際情勢や各国の立場を考えて、英語で議論・交渉する良い機会になった。
- ▶ 議長担当の京都の高校生は、英語力はもちろん、対面とオンラインで行われるハイブリットの国際会議をスムーズに進行させる対応力に大きな刺激をもらった。
- ▶ 私も英語力や大きなイベントでの対応力を磨いていきたい。

このように、同じ年代の高校生に出会い、その姿から「私もこうなりたい」という憧れや目標を持つことができた経験が、生徒にとって貴重なものであると考える。

一方、課題としては、本イベントでは英語のみでコミュニケーションをとらなければならないため、英検準1級以上のより高度な英語力を身に付け、リサーチや交渉、ディスカッションを円滑に進めることが求められる。また、批判的思考力を持って情報を分析・活用していくスキルを磨くことも必要である。

2. 課題研究成果発表会

WWL 連携校である京都先端科学大学附属高校(以下 KUAS)のもう1つのイベント「課題研究成果発表会」にも参加する機会に恵まれた。KUAS と連携校の愛媛大学附属高校と本校も含めて自由なテーマでプレゼンテーションを行った。本校は、2年GIクラスの生徒2名がオンラインで参加した。

本校生徒のテーマは「LGBTQ+に関する考察」であり、LGBTQ+の人々の理解と多様性を受け入れる社会の実現に向けて考察したものである。日本で約10%いるとされる性的少数者(株式会社LGBT総合研究所, 2017)がいる一方で、『LGBTQ+を知ってはいるものの自分事化できていない「知識ある他人事層」が最も多い』(電通, 2020)という現状に対して、LGBTQ+の認知度が低いことや、同調圧力などの影響を考察した。本校生徒は、LGBTQ+について知ること、当事者の人たちが打ち明けられる環境づくりや、お互いの多様性や生き方を受け入れて尊重する必要性について発表した。

本発表会を参観して、KUASの国際科の生徒の発表の英語力や研究内容を参考に、本校も英語力やリサーチスキルを高める工夫をしていきたいと考えた。また、生徒が自由にテーマを選択して研究発表を行うことで、生徒の興味・関心と社会的・学術的な課題、そして進路選択の3つの条件を満たすような行事やカリキュラムの必要性も感じた。本発表会で学んだことを、今後の教育研究活動に生かしていきたい。

IV-4	高知県立高知国際中学校・高等学校での探究成果発表会への参加	
2023. 3. 10(金)～3. 11(土)		高知県立高知国際中学校・高等学校

連携校である高知県立高知国際中学校・高等学校が主催する「探究成果発表会」に拠点校の1年GIクラスの代表生徒2名と教員1名が参加した。この発表会は3部で構成されており、第1部では連携校の中学3年生、高校1、2年生の代表生徒が身近な社会課題とその解決策、あるいは自分の興味・関心に関する研究成果を発表した。この中で、本校代表生徒は、本年度の探究活動全体の振り返りとしてBlue Earth Project 2022 や、RKB カラフルフェスでの活動内容等について発表した。

第2部では、九州大学教育学部花井渉准教授をファシリテーターに迎え、高知県立高知国際中学校・高等学校の代表生徒8名(中学3年生2名、高校1年生3名、高校2年生3名)によるパネルディスカッションが行われた。「高知国際中高生として、どのような学校文化を目指すか?」という議題に、生徒一人一人がその文化の形成、継承に関わり自分事として考えていることが感じられた。活発な意見交換に拠点校生徒は感銘を受け、自分たちも同議題で意見交換を行ってみたいと刺激を受けていた。

第3部ではポスターセッションが行われ、連携校全生徒が発表者もしくは聴衆として主体的に参加していた。特に、発表者と聴衆との活発な質疑応答、意見交換が行われているのが印象的であった。この会全体を通じて、探究活動が一部の生徒や教員だけの行事でなく全校をあげた活動であること、生徒たちが自らの意見を持ち、心理的安全性を感じながら発言している様子に触れることができ、学びの多い参加となった。

IV-5	WWL 報告会	
2022. 12. 17(土) 9:30～12:00		拠点校：講堂

今年度の探究活動の成果発表会となる「WWL 報告会」が拠点校で開催された。コロナ禍であることから、県外の連携校である京都先端科学大学附属高校と高知県立高知国際高校はオンラインでの参加となった。

1. 参加者

- ▶ 対面での参加：中学生、高校1・2年生、高校3年GIクラス(計約800名)、
来賓9名(運営指導委員を含む)
- ▶ オンライン参加：連携校発表者5名と関係者2名、教育関係者1名

2. 報告会の内容

司会：2年GIクラス生徒

- (1) オープニング(2年GIクラス生徒)
- (2) 学校長挨拶
- (3) 生徒発表
 - ▶ 高1 グローバル・キャンパス代表発表(1年代表2チーム)
 - ▶ 探究・活動報告(1年GIクラス生徒。アジア架け橋留学生の発表も含む)

- ▶ 高知県立高知国際高校(連携校)代表によるオンライン発表
- ▶ WWL全国高校生フォーラムでの発表(2年GIクラス生徒)
- ▶ 九州大学成果発表会での発表(2年GIクラス生徒・2チーム)
- ▶ 探究・活動報告(2年GIクラス生徒)
- ▶ 京都先端科学大学附属高校(連携校)代表によるオンライン発表
- ▶ 論文作成(3年GIクラス生徒)
- ▶ 3年間の探究・活動報告(3年GIクラス生徒)
- ▶ 中村学園三陽高校(連携校)代表によるオンライン発表

3. HRにて振り返り(アンケート記入)

[発表内容]

(1) 高1 グローバル・キャンパス代表発表(1年代表2チーム)

9月に、事業協働機関である立命館アジア太平洋大学(APU)の国際学生と拠点校で実施した「グローバル・キャンパス」の報告を行った。グローバル・キャンパスで国際学生とともに作り上げた、英語での食に関する探究プレゼンテーションについて、学年の生徒アンケートで最も好評であった2チーム(うち1つはGIクラス)が代表として発表を行った。

(2) 探究・活動報告(1年GIクラス生徒。アジア架け橋留学生の発表も含む)

アジア架け橋留学生は、自国と日本の教育制度の違いについてプレゼンテーションを行った。食堂などの施設や体系的なカリキュラム、マナー指導などの日本人にとっては当たり前のことが、外国人にとっては驚き・刺激となっている事例が多数紹介され、日本での日常を再考する良いきっかけとなった。

高校1年生GIクラスは、夏を中心に行った「Blue Earth プロジェクト」やテレビ局の行事「カラフルフェス」への参加について発表した。Blue Earth プロジェクトについては、海洋汚染を防ぐために、ペットボトルではなくマイボトルを持参しようと訴え、商業施設の店舗にマイボトルへの給水をお願いする「店舗アタック」を実施した。カラフルフェスでは、害獣駆除の対象であるイノシシの肉を使ったジビエカレーを調理し、イベントの来場者に販売した。どちらの活動も、実施の難しさと達成感について全校生徒に伝えることができた。

(3) 高知県立高知国際高校(連携校)代表によるオンライン発表

連携校から2名の生徒が「学校給食の残飯率を減らす方法」について探究活動の成果と今後の展望について発表した。魚や野菜を苦手とする生徒が多いため、いかにして美味しく食べられるように促していくか、独自の試みとその結果に期待を感じさせられた。

(4) WWL全国高校生フォーラムでの発表(2年GIクラス生徒)

12月18日に開催される「WWL 全国高校生フォーラムに向けた発表(英語)」を行った。“Food Loss and Our Society—Reduce food loss and enhance environmental sustainability.”をテーマとして、食品ロスを削減し、環境の持続可能性を高めることを目的とした内容であった。食品ロスについて生徒から意識調査を行い、結果を検証して教育現場での食品ロスへの意識喚起を提案した。

またコンポスト活動など、学校で生徒が実行できる環境活動について訴えた。

(5) 九州大学成果発表会での発表(2年GIクラス生徒・2チーム)

12月18日に九州大学で開催される「世界に羽ばたく高校生の成果発表会」へ向けてエントリーした2チームの発表を行った。「気候変動と私たち」「女子高生とファッションロス ～ファストファッションの裏側を知っていますか～」というそれぞれのテーマのもと、1チーム目は気候変動と政治・選挙に関する意識調査を行い、「気候変動についての知識があっても行動を起こさないのは、個人の『サクセスストーリー』が少なく、自分の行動が社会を変えるという意識に結びつかないから」とし、自分の行動に意味や価値を見出す教育の重要性を訴えた。2チーム目はファッションロスの認知度やファストファッションへの意識を調査し、大量廃棄へ対処するため学校で古着を集めてリメイクするパッチワークプロジェクトを企画した。

(6) 探究・活動報告(2年GIクラス生徒)

多岐にわたる高校2年生の探究活動の取り組みを、代表生徒が紹介した。「企業コラボ」については株式会社石村萬盛堂様との商品開発をめぐる仕様書の作成や商品案の紹介を行った。「アントレプレナーシップ講座」については、身近な社会課題に取り組むベンチャー企業を紹介し、12月に参加したToryumonという若手起業家のピッチイベントで学んだことを発表した。9月に実施した「GI フィールドワーク advance」(マレーシア・シンガポール研修)については、両国間の社会文化の違いや日本との比較、環境問題に取り組むNGOの紹介や、事業協働機関であるマレーシア工科大学で行ったプレゼンテーション内容を発表した。

高校2年生の1年間で、課題を発見したり、その解決策を考え実際に行動を起こすことについて学び、イノベーターに必要なスキルの獲得に体系的に取り組んだことをまとめることができた。

(7) 京都先端科学大学附属高校(連携校)代表によるオンライン発表

京都先端科学大学附属高校は4つのコース制を敷いており、それぞれのコースから探究活動の発表を行った。「大豆ミートと日本人の食」「LEGOで作成した宇宙探索ロボット」「光るセンサーを利用したアート」「世界遺産・観光×SDGs」といった、各コースの教育内容の特徴や生徒の個性に応じた探究活動が印象的であった。

(8) 論文作成(3年GIクラス生徒)

GIクラス3年生1名が、作成した論文の要旨を代表として発表した。研究テーマは「音が味覚に及ぼす影響」であり、実験に協力した生徒に、音の種類やテンポの違う音楽を聴きながら食事をさせ、味の印象が変わるかという実験とその結果を紹介した。

現在探究活動を行っている中学生や高校1年生、入試や進路決定を控えた高校2年生にとって有意義な内容であった。

(9) 3年間の探究・活動報告(3年GIクラス生徒)

GIクラス3年生3名が、3年間の活動の振り返りと成果を発表した。探究やフィールドワーク等の活動は多岐に渡ったが、自身の進路や将来に結びつく学びを経験した。異文化に興味をもった生徒は外国語学部、食の問題に興味をもった生徒は栄養学部、起業に興味をもった生徒は経営学部

への進路を決めたことを報告し、GI クラスのカリキュラムを通して進路決定につなげていた点が印象的であった。

(10) 中村学園三陽高校(連携校)代表による発表

連携校である中村学園三陽高校の代表生徒3名が来校し、「身の回りでできるエコ活動」について実践報告を行った。学校をあげてのコンポストの設置と堆肥作り、地域の公民館での小学生への堆肥作りレクチャー、作った堆肥で育てた「ひまわりポット」の商業施設での提供と、堆肥作りをテーマに一貫した探究実践を発表した。

4. アンケート

参加生徒の興味関心や意識の変化を調査することを目的とし、WWL 報告会の事前と事後にアンケートを実施した。

[GI クラス以外の生徒] (対象：高校生 588 名、数値は%)

	【事前】 肯定的意見	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	68.03	94.14	31.97	5.86
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	66.33	93.78	33.67	6.22
世界の諸問題がどのように日本と(私達と)繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	60.03	96.8	39.97	3.22
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	51.19	74.07	48.81	25.93
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	61.5	86.86	38.5	13.14
現在起こっている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	43.27	83.84	56.73	16.16
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	88.88	91.47	14.12	8.53
連携校の生徒と積極的に意見交換を試みたいと思う	55.78	82.06	44.22	17.94

[GI クラスの生徒] (対象：高校 GI クラス 86 名、数値は%)

	【事前】 肯定的意見	【事後】 肯定的意見	【事前】 否定的意見	【事後】 否定的意見
現在、日本で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	89.29	97.67	10.71	2.33
現在、世界各国で起きている問題について調べたことがある/調べたいと思った	94.05	97.67	5.95	2.33
世界の諸問題がどのように日本と(私達と)繋がっているか考えたことがある/考えるきっかけになった	84.52	97.67	15.48	2.33
フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる	88.10	95.35	11.90	4.65
解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う	77.50	95.35	22.50	4.65
現在起こっている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある	77.38	97.67	22.62	2.33
世界に目を向けて行動できる人物になりたいと思う	95.24	95.35	4.76	4.65
連携校の生徒と積極的に意見交換を試みたいと思う	92.77	96.51	7.23	3.49

5. アンケート分析

今回のアンケート項目は、いずれも日本や世界に存在する課題についての意識調査となってしまうため、事前アンケートの時点で肯定的な意見が多く、報告会を通じてさらに肯定的な意見の割合が増えるという結果となった。生徒の「道徳心」に訴えることができ高い数値であったことは自明であるが、細かな課題観を把握することはできなかったため、今後は質問内容を見直し、生徒の機微な意識の変化を調査・分析できるアンケートにしていく必要がある。

アンケートで明らかになった点としては、GI クラス以外の生徒と GI クラスの生徒を比較することで、GI クラス独自のカリキュラムを受けている成果について傾向を見出すことができた。具体的には、質問項目「フードロスやプラスチックごみの問題について、説明することができる」、「解決が困難な社会課題も、自分の努力次第で克服できると思う」「現在起こっている社会課題解決のため、取り組んでいることがある/取り組みたいことがある」の3項目に関しては、事後の肯定的意見の割合が、GI クラスの生徒の方が 21.28%、8.49%、13.83%と数値が高い。様々な探究活動を通じて、社会課題に取り組みたいという前向きな意識が高まるカリキュラム編成ができていると言って差支えないであろう。また、質問項目「連携校の生徒と積極的に意見交換を試みたいと思う」について、肯定的意見の割合が GI クラスの生徒の方が全体として高い。興味深いことに、同項目の GI クラス以外の生徒の肯定的意見が、事前と事後で約 30%も伸びていることである。現在、連携校との協働活動は GI クラスに限られていることが多いが、今後は学校全体で連携校との協働活動を増やしていける教育的な試みも検討していく必要がある。

IV-6	GI フィールドワーク Basic(グローバル・キャンパス)の開発と実施
2022. 9. 13(火)・9. 14(水) 9:30~16:30	拠点校

1. 実施内容

9月13日(火)・14日(水)に、本校の恒例行事「グローバル・キャンパス」を開催した。本行事は、事業協働機関である立命館アジア太平洋大学(APU)の国際学生と英語でコミュニケーションを取りながら、食を中心とした地球規模の課題についての認識を深めることを目的としている。以前は合宿研修として行っていたが、過去2年間は新型コロナウイルス感染症の蔓延によりオンラインで実施した。今年度は新型コロナウイルス蔓延のピークを過ぎていたこともあり、学年全体を2団にわけ、拠点校での1日プログラムとして2日間実施した。

恒例行事ではあるが拠点校での実施、1日での実施は初めてということもあり様々な点で変更や工夫が必要となった。プログラムは大きく3つ、「自己紹介・留学生の母国の紹介」、「チームフラッグ作り」、「食についての探究テーマの英語プレゼンテーション」とした。生徒7~8人で1つグループを構成し、そこに留学生を1人担当として配置した。グループごとにそれぞれの活動を行った。またクラス全体のコーディネーター役を1人つけることで、円滑な運営を心がけた。1日完結のプログラムに変更したことで留学生との交流の時間が限られているため、9月5日(月)にオンライン事前セッションを行い、アイスブレイクと探究テーマの紹介を事前に済ませるといった工夫を講じた。

当日はアジアを中心とした16カ国、29名の留学生が本校を訪れた。生徒にとっては初めて会う国の出身者も多く、留学生の自国紹介では日本とは異なる文化に驚く声が多く聞かれた。チームフラッグ作りでは、グループのメンバーの大切にしている信条を盛りこみオリジナルの国旗をつくることで、生徒・留学生の心理的な距離感の接近に役立てることができた。英語プレゼンテーションでは、留学生からプレゼンテーションスキルを学び、探究活動の発表を英語で行った。クラス内でそれぞれのグループが発表を行った後、ルーブリック評価に基づいてクラスの代表を選出した。(後日、学年のなかで優秀プレゼンをさらに選出し、2チームが12月のWWL報告会で全校生徒の前で発表を行った)

グローバル・キャンパスの最後は「グローバルタレントショー」と題した、留学生持参の民族衣装を生徒が着用し異文化体験を行った。

様々な活動を通じて、生徒にとっては今後の英語学習の動機づけ、異文化理解・多様性の受容につながる行事となった。ただ実施する中で、本校の生徒よりも留学生との打ち合わせや情報伝達の方により事前準備が必要だと痛感させられた。立命館アジア太平洋大学(APU)は事業協働機関なので、より関係強化に努めて、実施効果を高めていきたい。



2. グループごとの探究テーマ

Themes of group research on food issues in the world

Session	Class	Group	カテゴリー	探究テーマ
A 団	1	A班	食と環境	水汚染が及ぼす食品への影響とは？
		B班	食と栄養	世界の果てまで行ってfood ~Global School lunch~
		C班	食と社会文化	世界の宗教と食の違いとは？
	4	A班	食と環境	なぜコンビニ食品はフードロスが多いのか？
		B班	食と社会文化	日本の郷土料理について
	5	A班	食と経済	経済の変化がもたらす世界的な食糧問題
		B班	食と社会文化	長い歴史的文化に基づいた日本の多様な食文化
		C班	食と栄養	現代のライフスタイル・変化する食料ニーズに伴う新たな栄養問題
		D班	食と経済	世界の環境の変化は、経済格差を招き、健康に被害を及ぼす
		E班	食と環境	現代の生活がもたらす食に対する問題と解決策
	6	A班	食と経済	貧困を減らすために食品の値段をどのように決めればよいか？
		B班	食と環境	食品ロスをなくすために私たちができることは何か？
		C班	食と社会文化	世界遺産「和食」をどのように広めていけばよいか？
		D班	食と栄養	理想的なジャンクフードとは？
	7	A班	食と栄養	和食と洋食
		B班	食と経済	飲食業界 with コロナ！！
		C班	食と環境	外食と環境問題
		D班	食と社会文化	世界の給食、日本との違いは？
	8	A班	食と環境	持続可能な食システムを目指して
		B班	食と栄養	各国の主食について
		C班	食と経済	フードロスに使われるお金
		D班	食と社会文化	世界の伝統料理を残すためには
		E班	食と栄養	摂取量と栄養量に関する海外と日本の違い
		F班	食と環境	食と気候問題について
B 団	2	A班	食と経済	食で日本経済を成長させるにはどうすればよいか？
		B班	食と栄養	サプリメントは本当に栄養がとれるのか？
		C班	食と社会文化	なぜ食べ物に制限のある宗教があるのか？
		D班	食と環境	フードロスをなくすには？
	3	A班	食と栄養	発展途上国と先進国の学校給食の違いは？
		B班	食と経済	SDGsのつくる責任つかう責任の達成度は？
		C班	食と社会文化	ヨーロッパの各地域の食と文化の共通性は？
		D班	食と環境	「食」で熱帯雨林を守る方法とは？
	5※	A班	食と経済	経済の変化がもたらす世界的な食糧問題
		B班	食と社会文化	長い歴史的文化に基づいた日本の多様な食文化
		C班	食と栄養	現代のライフスタイル・変化する食料ニーズに伴う新たな栄養問題
		D班	食と経済	世界の環境の変化は、経済格差を招き、健康に被害を及ぼす
		E班	食と環境	現代の生活がもたらす食に対する問題と解決策
	9	A班	食と社会文化	日本と世界の給食は何が違うの？
		B班	食と環境	福岡のアイドル！！あまおうをつくるには？
		C班	食と環境	健康的な食生活とはなんだろう？
		D班	食と栄養	安全なサプリメントを摂取するには？
		E班	食と環境	フードロスが環境に及ぼす影響とは何なのか？
		F班	食と栄養	効率よくダイエットをしながら、栄養を得る方法とは？
		A班	食と環境	地球温暖化がもたらす農作物生産量の変化
	10	B班	食と社会文化	伝統料理から国を分析する
		C班	食と栄養	ダイエットをしてどれだけ栄養がとれるか
		D班	食と経済	フードマイレージの数値が高いことで生じるデメリット
		E班	食と栄養	バランスのとれた良い給食の国内地域別での比較
F班		食と環境	フードロスの行方	

3. タイムスケジュール

時間	プログラム	内容	場所	配時	形態
9:30～10:10	1.オープニング	9:30～9:35 校長挨拶 9:35～9:40 代表生徒挨拶・本校紹介(GI) 9:40～10:00 APU代表学生挨拶・学生紹介 10:00～10:10 当日スケジュールの確認・注意事項	講堂	(40分)	一斉
10:10～10:30	各クラスへ移動・休憩			(20分)	
10:30～11:20	2.モーニングセッション①	10:30～10:40 生徒自己紹介 10:40～10:50 APU(GL)学生生活紹介・自己紹介 10:50～11:00 GL母国の食文化紹介・ What's that? ゲーム 11:00～11:20 グループフラッグ作り	各教室・講義室・講堂	(50分)	クラス・班毎
11:20～11:30	休憩			(10分)	
11:30～12:20	3.モーニングセッション②	11:30～11:50 グループフラッグ班別発表 11:50～12:20 グループ毎にプレゼンテーションの練習・終了時にGLから生徒に質問・コメント	各教室・講義室・講堂	(50分)	クラス・班毎
12:20～13:10	昼食休憩			(50分)	
13:10～14:00	4.アフタヌーンセッション①	グループ毎にプレゼンテーションを実施 1学期探究学習成果発表(食の4領域) 各班5分程度でプレゼンテーション 各班のプレゼンテーションに対して、別の班の代表者が質問・コメント・GLはルーブリックに評価を記入	各教室・講義室・講堂	(50分)	クラス・班毎
14:00～14:10	休憩			(10分)	
14:10～14:40	5.アフタヌーンセッション②	グループ毎にプレゼンテーションを実施 1学期探究学習成果発表(食の4領域) 各班5分程度でプレゼンテーション 各班のプレゼンテーションに対して、別の班の代表者が質問・コメント・GLはルーブリックに評価を記入 発表終了後、各クラスのベストプレゼンテーションを選出	各教室・講義室・講堂	(30分)	クラス・班毎
14:40～15:00	休憩・講堂へ移動			(20分)	
15:00～15:30	6.クロージング	各団代表生徒によるグローバルタレントショー GI代表生徒による御礼の言葉 学年主任挨拶	講堂	(30分)	一斉

4. グローバル・キャンパス事前事後生徒アンケート結果

以下の22項目に対し、意識調査として生徒に4段階評価(1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない)を行った。(回答数: 294名)

高1GC/事前事後アンケート比較	肯定的意見	否定的意見
自分とは異なる文化的背景をもつ人々と、一緒に活動することに違和感を感じない。	87.4 → 88.3	12.6 → 11.7
海外で勉強(留学)してみたい。	51.4 → 59.0	48.6 → 41.0
生活のいろいろな場面で、他の国との関わりが増えることにより、自分の可能性が広がると思う。	89.1 → 95.2	10.9 → 4.0
英語が公用語化されても十分に能力を発揮できる。	30.3 → 36.6	69.0 → 63.0
世界中の人との交流の機会や情報を活かせるようになりたい。	81.0 → 88.3	18.7 → 11.0
外国の人々とのコミュニケーションに興味がある。	75.5 → 84.2	24.1 → 15.4
外国の人々と一緒に学びたい。	68.4 → 79.9	31.3 → 19.8
外国のことについて知識や理解を深めることは、自分の可能性を広げることにつながると思う。	90.5 → 95.2	9.5 → 4.4
グローバル化が進展することは、自国の発展や豊かさにつながると思う。	90.1 → 95.2	9.5 → 4.4
外国について知識を深めることは大切だ。	95.6 → 96.7	4.4 → 2.6
外国に関する知識や理解を深めることと同様に、自国に関する知識や理解を深めることは重要だと思う。	95.6 → 97.8	4.4 → 1.8
自国や郷里を誇りに思う。	96.9 → 98.2	3.1 → 1.1
自国の文化や習慣などについて良く知っている。	80.6 → 81.7	18.7 → 17.9
英語ができなくても自分には全く問題ない。(選択肢注意)	21.8 → 19.8	78.2 → 79.9
英語がもっとできるようになりたい。	96.3 → 95.6	3.4 → 4.0
英語を母国語とする人のような英語を話せるようになりたい。	85.4 → 88.3	14.3 → 11.4
英語の発音は大切だ。	95.2 → 96.3	4.8 → 3.3
クラスメイトの前で英語を話すのは恥ずかしい(選択肢注意)。	57.1 → 56.8	42.5 → 42.9
自分の意見をはっきりと持っている。	66.7 → 74.0	33.3 → 25.6
何にでも興味を持つほうだ。	73.1 → 78.0	26.9 → 21.6
すぐに行動に移さないと気がすまないほうだ。	55.8 → 59.3	44.2 → 40.3
この研修(グローバルキャンパス)に意欲的に参加しようと思っている。(事前) 参加することができた。(事後)	86.7 → 92.7	12.9 → 6.2

5. アンケート分析

グローバル・キャンパスを行ったことで、国際・異文化理解や外国語学習について肯定的な意見の割合が全体的に上昇している。特に大幅に割合が増えた項目が以下の5項目である。

- (1) 海外で勉強(留学)してみたい。
- (2) 世界中の人との交流の機会や情報を活かせるようになりたい。
- (3) 外国の人々とのコミュニケーションに興味がある。
- (4) 外国の人々と一緒に学びたい。
- (5) 自分の意見をはっきりと持っている。

(1)～(4)の項目に関しては、実際に外国人の留学生と英語でのコミュニケーションをとることで、自信がついたことが割合増加に影響していると思われる。「自分の英語が通用するか」わからない生徒にとって、ボディランゲージや友人と協力することでコミュニケーションをはかることができた経験が、学習意欲向上につながっていると考えられる。また(5)の項目の割合が増加していることが興味深い。日本人だけでコミュニケーションをとるとき、所謂「空気を読む」姿勢というのが存在するのだから初対面の外国人の前では通用しない。英会話にチャレンジすることで、自然と自分自身と向き合う機会になっていたといえよう。一方で、「クラスメイトの前で英語を話すのは恥ずかしい(選択肢注意)」という項目にほとんど変化がなかったことは注視すべきだ。ここには日本の英語教育の長年の課題がある。英語に限らず、あらゆる学校の活動において、集団内の「心理的安全性」や「関係性のあり方」に起因していると思われる。教育および訓練を通じて、「他者の発言を容認する姿勢」を育む仕掛けが必要である。それはこの行事に限らず、日ごろの教育活動のなかで心がけていかなければならない。

IV-7	GI フィールドワーク Advance (海外 FW) の開発と実施	
2022. 9. 10 (土)～2022. 9. 15 (木)	拠点校、マレーシア、シンガポール	

GI フィールドワーク Advance (以下海外 FW) であるが、昨年度はコロナ禍の影響により国内研修への変更を余儀なくされた。今年度は依然として厳しい状況下ではあったが、感染症対策に万全を期して、GI クラスとして初の海外 FW を決行した。クラスの約 3 分の 1 の生徒が昨年度の冬にコロナ禍の中でカナダでの短期留学から無事に帰国して学校で活躍していたため、クラスの大半の生徒が海外渡航に意欲的な状況も海外 FW 実施への追い風となった。実施の概要は以下の通りである。

2年6組 GI 2回生 第1回 GI 海外フィールドワーク 実施要領

1. 目的

- (1) 自分の課題研究テーマについて、海外でのリサーチや大学でのプレゼンテーションやディスカッションを通して知見を深めるとともに、自信を高める。
- (2) マレーシアの姉妹校スルタン・イブラヒム女子校との交流を通して国際的友好を深める。
- (3) 他民族国家であるマレーシア、シンガポールでの体験を通して国際的な視野を養い、異文化理解力と多様性受容力を高める。
- (4) グループやクラス全体での活動を通して、GI クラス全体のチームワークを強化する。

2. 期間：令和4年9月10日(土)～9月15日(木)4泊6日

3. 研修先：マレーシア・シンガポール

4. 主な内容：

(1) マレーシア(3泊)

- ①アブラヤシ農園見学 (マレーシアの農業・産業についての学び)
- ②マレーシア工科大学での活動 (研究テーマの英語プレゼン・ディスカッション)
- ③フォロファームバンブー見学(有機農法、SDG s など)
- ④Sultan Ibrahim Girls School 学校交流 (国際理解、国際交流)

(2) シンガポール(1泊)

- ①マーライオン公園 散策(観光名所散策)
- ②市内フィールドワーク(グループ毎の研究テーマ)
- ③ユニバーサル・スタジオ・シンガポール(クラス内の親睦)

5. 参加人員：GI クラス 2年6組 32名

6. 引率者：三浦 隆博、ハイダー・ディル、旅行会社添乗員・現地スタッフ

[GI 海外 FW 行程表(簡略版)と記録]

[1 日 目 : 9 月 10 日 (土)]

時刻	スケジュール (場 所)	行 程 ・ 備 考
10:55	出 発 (福岡空港国際線)	福岡空港 出発 (SQ655 便)
15:55	シンガポール着 (チャンギ空港)	到着・降機
17:40	シンガポール出国・マレーシア入国	国境にてシンガポール出国・マレーシア入国
19:30	夕 食 (レストラン)	夕食 (マレー料理)
20:50	ホテル 到着	KSLホテル&リゾート到着

前日に結団式を終え、翌日 10 日 (土) に 2 年 GI クラス 32 名が福岡空港国際線に集合した。校長先生より温かな激励を頂いた後、生徒は期待と不安を胸に、福岡空港を旅立った。約 6 時間のフライトを終え、シンガポールのチャンギ国際空港に降り立った時の生徒たちの嬉しそうな表情が印象的であった。生徒は夕食でマレー料理を堪能した後、翌日のマレーシア工科大学での発表に備えた。



海外 FW 結団式(オンライン)



出発式(福岡空港)



見送り(福岡空港)



チャンギ国際空港到着



夕食(マレー料理店)

[2 日 目 : 9 月 11 日 (日)]

時刻	スケジュール(場 所)	行 程 ・ 備 考
8:45	アブラヤシ農園	マレーシアの産業や農業・SDGs について(質疑応答)
10:15	マレーシア工科大学	マレーシア工科大学 ①オリエンテーション ②講義(マレーシアのSDGs について) ③ミニスピーチ(全体) ④昼食(お弁当予定) ⑤個人研究テーマを全体でプレゼンテーション ⑥グループでディスカッション・全体で共有 ⑦キャンパスツアー・交流(記念撮影・挨拶を含む)
16:15	現地スーパー	現地スーパーマーケットにて流通調査・買い物
17:30	夕食(レストラン)	夕食(中華料理)

海外FW 2日目は、アブラヤシ農園にてマレーシアの産業や農業・SDGsについて現地の農家の方からお話を聞き、実際にアブラヤシを収穫する現場を見せてもらった。その後、今回の海外FWの目玉であるマレーシア工科大学へと向かった。現地では、数十名の大学生と教員に出迎えてもらい、アイスブレイクの後に参加生徒全員による英語での個人研究テーマプレゼンテーションを行った。生徒のテーマは環境問題、若者の自己肯定感、食の問題、ジェンダー、芸術、スポーツなど多岐に渡っており、プレゼンテーションを聞いてアドバイスをしてくれる教員や大学生からも「非常に興味深いテーマが多いし、データや考察などがよくまとめられていた」と好評価をいただいた。海外の大学で、研究テーマについて本格的な英語プレゼンテーションを行うのは皆初めての体験であり、発表前は緊張していた生徒たちも発表後は安堵の表情の中に自信が感じられた。その後のディスカッションも盛り上がり、生徒から滞在時間を延長できないかと打診されるほど良い経験となった。



アブラヤシ農園に到着



アブラヤシの収穫の様子



マレーシア工科大学到着



本校生徒代表のあいさつ



現地教員の講義(SDGs)



ミニスピーチ(自己紹介)



アイスブレイク②



個人研究テーマプレゼン①



個人研究テーマプレゼン②



ディスカッション風景



キャンパスツアー



記念写真撮影

[3 日 目 : 9 月 12 日 (月)]

時刻	スケジュール(場所)	行程・備考
8:30 10:30	フォロファームバンブー見学	① 農園の概要説明 ②農園見学・質疑応答 (食品廃棄物の堆肥化、有機農法、マレーシアのSDGs)
11:30	姉妹校での交流・活動 (SMK Sultan Ibrahim Girls School)	SMK Sultan Ibrahim Girls School ①Welcome Speech ②Students' Representative Speeches ③Gift Presentation ④Lunch Time ⑤Performance from Both Schools ⑥Exchange (Free and Easy Chatting) ⑦School Tour ⑧Group Photos
16:00 16:30	コタイスカンダル(イスカンダル エリア)	コタイスカンダル見学(州と連邦政府の合同庁舎)

海外FW 3日目は、朝からフォロファームバンブーを訪れた。ここでは、食品廃棄物の堆肥化、有機農法について学んだ。この施設自体が、食品廃棄物を出さず、農薬も使わず、動植物と共生するモデルとなっており、エリア内の豊かな自然の中を歩きながら、生徒たちもサステナビリティについていろいろと考えており、NPOの代表に対しても積極的に質問をしていた。

その後、本校の姉妹校であるスルタン・イブラヒム女子高校を訪問した。校長先生を始め、多くの教職員や生徒が出迎えてくださり、マレーシアの伝統的な楽器の演奏法やダンスと一緒に体験したり、学校生活やお互いの国の文化などについて自由に会話をしたりと、両校の生徒ともに積極的にコミュニケーションを図っていた。コロナ禍の影響でここ数年は同校を訪問できていなかったが、今回の海外FWを機に再び交流を活性化させることが重要だと考えた。



フォロファーム代表



エリア内の自然の中を散策



食品廃棄物の堆肥化の解説



姉妹校到着・伝統音楽で歓迎



姉妹校校長先生のあいさつ



姉妹校の生徒との交流①



[4 日 目 : 9 月 13 日 (火)]

時刻	スケジュール(場所)	行程・備考
10:00	マレーシア出国・シンガポール入国	国境にてマレーシア出国・シンガポール入国
11:30	マーライオン公園	マーライオン公園散策
12:00	シンガポール市内FW開始	グループごとにフィールドワーク (マーライオン公園から各地へ出発)
17:00	市内FW終了・ホテルへ	

海外 FW 4 日目は、マレーシアからシンガポールへと移動し、マーライオン公園を散策した。その後、グループの自主研修へと移った。生徒は事前学習を通して関心があるテーマを定めており、それに沿って観光名所や史跡等を巡るフィールドワークを行った。特に生徒が関心を持っていたのはチャイナタウンやリトルインディア等であり、人種や宗教など多くの点において日本よりも多様性のある社会を肌で感じ取った様子であった。



記念写真(マーライオン公園)

グループ・フィールドワーク

チャイナタウンの街の風景

時刻	スケジュール(場 所)	行程・備考
10:00	USS 到着	ユニバーサル・スタジオ・シンガポール到着
18:30	出 発	
19:00	ショー鑑賞(ガーデンバイザベイ)	ガーデンラブソディ(光と音楽のショー)鑑賞
20:30	空港到着(チャンギ空港)	チャンギ空港到着
1:55	出 発(チャンギ空港)	チャンギ空港 出発(SQ656便)
8:55	到 着(福岡空港)	福岡空港 到着

[5 日 目 : 9 月 14 日 (水) ~ 6 日 目 : 9 月 15 日 (木)]

海外 FW 5 日目は、生徒たちが待望したユニバーサル・スタジオ・シンガポール(USS)を訪問した。生徒たちは、日本のユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ)と規模やサービスを比較したり、英語の

ガイドンスに従って各種アトラクションを楽しんだり、非常に充実した様子であった。

その後、ガーデンバイザベイの幻想的な光と音楽のショーを鑑賞後、帰国に向けてチャンギ空港へと移動した。

9月15日の午前9時頃に無事に帰国し、教頭先生がねぎらいのスピーチを行い、生徒代表が保護者の方々への感謝の気持ちを伝えて解団式を終えた。コロナ禍の影響が残る中で無事に全員で帰国することができ、大変充実した海外フィールドワークとなった。



インスタ映えスポット (USS)



ギフトショップ (USS)



ガーデンバイザベイのショー



帰国前(チャンギ空港)



教頭出迎え(福岡空港)



生徒代表挨拶(福岡空港)

[おわりに]

海外FWの実施にあたっては、参加生徒の帰国後の探究活動や国際交流、そして進路につながるように、事前に生徒自身が自由に研究テーマのリサーチと発表準備を行い、マレーシア工科大学の教員や大学生の前で英語でのプレゼンテーションやディスカッションを行うことを研修の目玉に据えた。海外において英語でプレゼンテーションを行ったという経験は、生徒にとって大きな自信となり、その後の人生でも積極的に国内外で活躍する際のベースとなると考えたからである。コロナ禍の中、海外で常に感染症対策に気を張りながらの研修となることを考慮して、FWの5日目にユニバーサル・スタジオ・シンガポール訪問を配置し、海外FWの終盤に生徒が楽しめる時間を設けた。

今回の海外FWは、生徒が日本人としての自覚、異文化理解と多様性受容力などを含めた国際的なコミュニケーション能力を伸ばす絶好の機会となった。次年度以降のGIクラスでも、より発展的な内容で海外FWの継続および改善が毎年なされていくこと、そして参加生徒が海外の異なる文化に触れ、喜びや苦労を経験することで、帰国後に大きく成長することを期待したい。

[参考資料① 海外FW 生徒の感想(一部抜粋)]

- ▶ 英語を通して、日本、シンガポール、マレーシアの学生や人々とコミュニケーションを取ることができるため、世界共通言語とも言える英語の重要性を改めて認識した。
- ▶ 初めての海外で、マレーシアの大学の大勢の人の前に立って英語でプレゼンテーションをするのは緊張したが、やり終えたことで自信がついた。
- ▶ バリアフリーの視点からシンガポールやマレーシアの学校や街並みを見ると、お互いの国の進んでいる部分や遅れている部分などに気づくことができた。また、なぜそのような違いが生まれているのか、原因を調べたくなった。
- ▶ シンガポールとマレーシアは隣国なのに経済格差が大きく、その違いに驚いた。マレーシアからシンガポールに通勤する車やバイクが国境付近で渋滞を起こしている光景からも、両国間で大きな収入の格差があると学ぶことができた。
- ▶ 日本とシンガポール・マレーシアを比較することで、日本の当たり前が当たり前ではないと気付いた。例えば、授業中のマナーは日本の方が良く、海外では授業中に携帯を触る生徒がいた。また、トイレは日本が清潔さ・機能の面で圧倒的に優れていて、マレーシアでは清掃されておらず、ティッシュを持ち歩かないといけないことに驚いた。逆に、マレーシアは話した人々が日本よりも明るく生き生きしていることが多いという印象を受けた。
- ▶ カナダ留学を経験していたので、日本とカナダに加えてシンガポールとマレーシアを訪問したことで、4カ国を比較して物事を見ることができるようになった。日本人の考え方や日本のシステムが当たり前ではないと学んだので、各国の良いところから学んだり、日本の良さを伝えていったりしたいと思う。
- ▶ マレーシア、シンガポールを訪問して、以前よりアジアの国々に興味が湧いてきた。アジアでも最も親日国であるタイ王国を訪問するイベントがあるので、応募してチャレンジしてみようと思う。

[参考資料② 海外FW 事後アンケート(2022年10月実施)]

質問項目	肯定意見割合	否定意見割合
	YES	NO
【出発前】海外フィールドワーク(以下 海外FW) 以前に、海外に行った経験がありましたか。	66%	34%
【出発前】英語でコミュニケーションをとることに不安はありましたか。	63%	38%
【出発前】海外で英語を用いてプレゼンテーションを行うことに不安はありましたか。	66%	34%
【出発前】英語を用いたプレゼンテーションの準備をするうえで、意欲的に取り組むことができましたか。	94%	6%
【FW中】英語を用いて、失敗を恐れずに海外の人とコミュニケーションをとることができましたか。	91%	9%
【FW中】世界規模の課題について、考えることができましたか。	97%	3%
【FW中】現地のNGOや学生と交流する中で、自分自身や将来のビジョンについて考える場面はありましたか。	84%	16%
【FW中】日本と、シンガポール・マレーシアの文化・習慣・生活様式の違いを感じることができましたか。	100%	0%
【FW中】日本と、シンガポール・マレーシアの文化・習慣・生活様式の違いを比較しながら活動を行うことができましたか。	100%	0%
【全体】外国の文化について、さらに知りたくなりましたか。	100%	0%
【全体】日本の文化について、さらに知りたくなりましたか。	91%	9%
【全体】FW後、英語力をさらに伸ばしたいと思うようになりましたか。	100%	0%
【全体】機会があれば、また海外に行きたいと思いませんか。	100%	0%
【全体】世界規模の課題について、さらに知りたい・調べたいと思うようになりましたか。	100%	0%
【全体】英語でプレゼンテーションをしたりディスカッションを行ったりしたことで、自分に自信を持つことができましたか。	91%	9%
【全体】出発前と比べて、クラスのチームワークは向上したと思いませんか。	97%	3%
【全体】GIクラスでよかったと思いませんか。	100%	0%

IV-8	GI スキルアップセミナーの開発・実施①(GI アントレプレナーシップ講座)
2022. 6. 21 (火) 14:10~15:50	拠点校 : AL ルーム

本年度も、事業協働機関である西部ガスグループ SG インキュベート株式会社のご協力のもと、2年生の GI クラス生徒を対象として、イノベーター育成に向けて起業家精神(アントレプレナーシップ)の基礎を学ぶ講座を、6月と7月の計2回実施した。

第1回の講座では、前半に九州初のCVC(コーポレート・ベンチャー・キャピタル)であるSG インキュベート株式会社の概要や、ベンチャーキャピタルとは何か、スタートアップ企業への投資を決めるポイントについて講義を受けた。中盤では、事前課題「商品の値付けをしてみよう」について、生徒が発表を行った。この課題内容は、当時2年GIクラスで株式会社石村萬盛堂様と企業コラボで商品開発(菓子)を行っていたため、企業が値付けする際のポイントやブランディング方法などについて学習することで相乗効果を図ろうというご配慮からである。講座の最後に、同社代表取締役社長の相川様を中心に数名の講師にフィードバックをしてもらう形で進行した。概要は以下のとおりである。

[講 師] SG インキュベート株式会社 代表取締役社長 相川 洋氏ほか数名

[テーマ] 1. 「“SG インキュベート” って??」
2. 「商品の値付けをしてみよう」

[内 容] 1. (1)自己紹介 (2)西部ガスグループ・SG インキュベートの事業概要
(3)企業のSDGsへの取り組み (4)投資の目的と目線および投資実績
(5)投資先との事業連携例
2. (1)事前課題I「商品の値付けをしてみよう」グループ発表
(2)質疑応答 (3)全体講評 (4)次の講座の事前課題提示

IV-9	GI スキルアップセミナーの開発・実施②(GI アントレプレナーシップ講座)
2022. 7. 15 (金) 9:45~11:25	拠点校 : 視聴覚室

第2回目の講座では、商品開発において対象者・売り場・売り方・PR等を踏まえた事前課題をもとに、グループ発表と講評が行われた。講座の後半には、イノベーションと具体的な事例、若手起業家や注目企業などが紹介された。概要は以下のとおりである。

[講 師] SG インキュベート株式会社 代表取締役社長 相川 洋氏ほか数名

[テーマ] 1. 「商品売るターゲットとPRの方法を考えよう。その時の値付けをしてみよう。」
2. 「イノベーションの実例を通して学ぼう」

[内 容] 1. (1)事前課題II「商品のターゲット、PR方法、値付けについて」グループ発表
(2)質疑応答 (3)全体講評
2. (1)イノベーションとは (2)イノベーション企業の紹介
(3)イノベーションを起こすためのポイント

講座のテーマ1の講評では、商品売る際に、低価格・大量販売の場合と高価格・少量販売の場合

では、ターゲットの層(年齢・居住地・年収など)が変わり、それに伴いPR方法も変わるため、ペルソナ設定が重要であることを学び、生徒も新鮮な話題に対して興味深く聞いていた。また、前者の場合では原料費や人件費、光熱費等を抑える努力が重要になり、後者の場合は原料へのこだわり、高級品としてのブランド化、リピーターの獲得に力点が置かれる傾向についても学び、発表を終えた生徒たちも自分たちが考慮できた点と見過ごした点を確認することができた。

講座の終盤では、イノベーションについて「社会に新たな価値をもたらす」とはどのようなことなのか、社会的課題の解決や社会的弱者の救済に取り組むイノベーション企業について、事例を通して分かりやすく学ぶことができ、起業に対しても自分とは程遠いものではなく、自分も何かを生み出したいと話す生徒もいた。最後に、2か月後に海外フィールドワークを控えている生徒たちに向けて、日常生活や海外経験の中で課題を発見すること、特に自分が困った経験をもとに発想を広げることがイノベーションにつながるというお話をいただき、本講座の内容を活かして、今後の日常生活やあらゆる行事において生徒がイノベティブになるように締めくくっていただいた。最後に、2回の講座を終えての生徒の感想を以下に紹介したい。

[GI2年生 アントレプレナーシップ講座 感想(抜粋)]

- ▶ 起業について漠然としたイメージしかなかったが、多くのスタートアップ企業の事例を紹介していただいたので興味が湧いてきた。
- ▶ 商品の値付けをする際に、材料費や広告費などは考えていたが、人件費、光熱費など他にも多くの要素を考えた上で値段をつける必要があると学ぶことができた。
- ▶ 将来は漠然と起業してSDGsの促進につながる仕事をしたいと思っていたので、起業家や注目企業などについてお話を聞けてイメージが具体的になり、起業にさらに興味を持った。
- ▶ 商品の値付けやPRに関する発表に対して、ターゲットの設定やブランディングの仕方など様々な視点からアドバイスをいただけて勉強になった。
- ▶ 女子高にいたので、現在活躍している女性起業家についてもっと話を聞きたいと思った。また、どのような視点で投資をする企業を決めるのかについてさらに詳しく知りたくなった。



イノベーション企業の紹介①



生徒による司会



生徒の発表の様子①



生徒の発表の様子②



イノベーション企業の紹介②



相川社長からの講評・激励

IV-10	GI スキルアップセミナーの開発・実施③(GI アントレプレナーシップ講座)
2022. 12. 15(木) 10:40~12:20	拠点校：視聴覚室

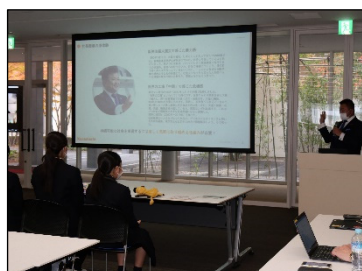
事業協働機関である西部ガスグループ SG インキュベート株式会社のご協力のもと、1年生のGIクラス生徒を対象として、イノベーター育成に向けて起業家精神(アントレプレナーシップ)の基礎を学ぶ講座を12月と1月の計2回実施した。

1年生対象の第1回の講座では、社会貢献型ショッピングサイト「Kuradashi」を運営している株式会社クラダシの、持続可能な社会の実現やフードロス問題に対する取り組みについての講義を受講した。講演者である 関藤竜也 氏 自身が阪神淡路大震災で感じた無力感や、20年前「世界の工場」と呼ばれていた中国で感じた資源枯渇の危機感など、様々な体験談を通して、ビジネスによる課題解決の大切さを学ぶ良い機会を得ることが出来た。「気候変動とカーボンニュートラル」「循環型経済とサーキュラーエコノミー」「SDGs とフードロス問題」等をキーワードとして取り上げつつ、社会的な仕組みを事前に調査させることで、ビジネスにおけるデータの重要性を生徒達に認識させ、理解を深めることができた。

[講師] 株式会社クラダシ 代表取締役社長 関藤竜也 氏

[テーマ] 「SDGs とフードロス問題。ビジネスでの解決方法」

[内容] 1. 自己紹介 2. 関藤社長の原体験 3. 震災・大量廃棄・博愛 4. 気候変動
5. 循環経済 6. SDGs とフードロス問題 7. クラダシについて(ビジネスでの解決方法)



[生徒アンケート抜粋]

- ▶ 普段から SDGs には触れていますが、流通の過程での廃棄されるものなどは改めてもったいないと感じました。
- ▶ 私は今まで SDGs に関わるようなボランティアに多く参加してきましたが、ボランティアに動く人が限られてくると思っていました。ですが、Kuradashi はボランティアのように与えることだけでなく、こちらも商品を楽しくお買い物できて社会貢献出来る画期的なシステムになっていて驚きました。今回のお話できっとクラダシに商品を出している会社や、応援している会社も、素敵なのだろうと感じました。
- ▶ 522万トンのフードロス削減が必要と聞いて、私たちもより積極的な取り組みが必要であることを実感しました。

IV-11	GI スキルアップセミナーの開発・実施④(GI アントレプレナーシップ講座)
2023. 1. 25(水) 10:40~12:20	拠点校：オンライン(ZOOM)での実施

1 年生対象の第 2 回の講座では、地域・自治体のパートナー事業を営む株式会社キッチハイクの実績を主軸として、地域課題の解決についての講義を受講した。当日は大雪のため本校生徒は登校中止となり自宅学習、講演者の方も来校が難しい状況となったため、急遽 ZOOM を利用しての遠隔実施となった。講演者である 酒井美加子 氏は同社が手がけるサービス「保育園留学」におけるプロジェクトマネジメントチームリーダーを務められており、地域活性化に向けた最新の取り組みについて具体的な事例を分かりやすくご教授頂いた。今回は地域課題を解決するための取り組みと、そのスタートアップをテーマに取り上げて頂き、生徒は「関係人口」「保育園留学」「事業のスタートアップ」「地域活性化」等をキーワードに学習活動に取り組んだ。講義の後半では ZOOM のブレイクアウトルームの機能を利用し、5 名×6 班の小グループに分かれてのディスカッションで「任意の地域における 10 年後の課題は何か?」「その課題解決にアプローチすることで世界にはどんな影響があるか?」について考えをまとめ合った。最後は出し合った意見やアイデアを各班で集約し、全体で発表する場を設け、酒井氏からのフィードバックを頂くことができた。急遽 ZOOM での遠隔実施というイレギュラーな状況での講演となったが、生徒にとっては初めての遠隔での質疑応答やディスカッションを体験することができ、有意義な活動として終えることができた。

[講師] 株式会社キッチハイク 事業開発 酒井美加子 氏

[テーマ] 「地域」から「地球」へ繋ぐ地域課題を解決するスタートアップの働き方

[内容] 1. キッチハイクのミッション 2. 関係人口 3. 保育園留学 4. スタートアップ
5. 小グループに分かれてのディスカッション(ブレイクアウトルーム)
6. 全体発表 7. フィードバック、講評



[生徒アンケート抜粋]

- ▶ 今回の講演を聞いて、留学と聞くと日本から海外へ、高校生か大学生の時といったイメージしか思いつきませんでした。まさか、保育園留学という今まで耳にしたことがないワードを聞いてとても興味深いなと思いました。実際に動画で見てみるとほんとに素晴らしいことをしていて、この活動から色々な課題が解決して、少しでも将来 10 年後の課題が減るようになればいいなというふうに思いました。私も日本の課題、世界の課題を解決できる、それに関する職に就きたいと思うきっかけになりました。
- ▶ 今回の講演では、保育園留学が印象に残りました。初めて知ったことでもあり、地域の魅力を発信できる取り組みだと感じたからです。今回お話いただいた内容は私たち GI クラスにも似ている内

容で、新しい知識を増やすことが出来ました。グループワークでは、私が実際に体験したことも踏まえながら一人一人がしっかり意見をだし、アイデアを考えることができました。

- ▶ 今回お話を聞いて私自身、ローカルなことについてはまったく知識がないと感じました。世界のことを学ぶことも大事だと思いますが、もっと日本のことや自分の住んでいる街のことについてしっかりと知り世界の人々に魅力を発信していける立場になれば良いと思いました。「保育園留学」という取り組みを初めて知って小さい時からいろいろな地域でその場所ならではのライフスタイルを体験できることはとっても素敵なことだと思います。また、ぜひ私も「保育園留学」を広める立場になればいいなと思いました。

IV-12	中村学園大学・短期大学部の科目等履修生制度(AP)の活用	
	2022. 9. 15(木)～2022. 1月	中村学園大学、オンライン

今年度で4年目となるAP(アドバンストプレイズメント)を拠点校および連携校である中村学園三陽高等学校の高校2年生の希望者を対象に実施した。中村学園では、中村学園大学・短期大学部の学生以外の者が開講される授業を履修する者を「科目等履修生」と称し、在学生と同じ授業科目を受講し、定期試験等によって学期末に成績評価することになっている。大学での高度な学びを経験することを目的としており、単位を取得した生徒が中村学園大学または同短期大学部に進学した場合は、習得単位として認定される仕組みとなっている。受講希望者は6月中に中村学園大学教務部に出願し、受講が決定すれば10月から開始される後学期の講座を受講することができる。

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、授業はオンデマンドでの受講となり、ミニレポート等の提出が授業参加の確認方法として利用された。また、講座の受講登録、諸連絡はオンラインによって実施されている。

受講者は、拠点校からは5名で、各自1科目(2単位)を受講し、4名が単位を取得した。実際に生徒が受講した科目及び人数は次の通りである。

[大学] 現代社会と教育(1名)、食の科学(1名)、経済学(1名)、社会福祉とボランティア(1名)

[短期大学部] 心理学(1名)

高大接続の取り組みとして、今後受講者・単位取得者を増やしていきたい。内容の充実とともに、実施時期の再検討等も行っていきたい。

IV-13	中村学園大学・短期大学部の学部・学科説明会	
2022. 6. 13(月)～2023. 7. 2(金)		拠点校、中村学園大学、オンライン

拠点校の併設校でもあり、WWL 事業の事業協働機関でもある中村学園大学・短期大学部の学部・学科説明会を拠点校の生徒・保護者を対象として実施した。今回は新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンラインで開催し、のべ180名が参加した。開催日程および学部・学科は次の通りである。

日時	対象	学部・学科
6月13日(月)16:20～17:45	高校3年生・保護者	栄養科学部(栄養科学科、フード・マネジメント学科)、食物栄養学科
6月15日(水)16:20～17:45	高校1・2年生	流通科学部、キャリア開発学科
6月17日(金)16:20～17:45	高校1・2年生	教育学部、幼児保育学科
7月22日(金)16:40～17:30	高校1・2年生	模擬授業(短期大学部)
7月25日(月)16:40～17:30	高校1・2年生	模擬授業(大学)

IV-14	立命館アジア太平洋大学(APU)学校説明会	
2022. 8. 3(水) 15:30～16:30		オンライン開催

本校と連携協定を締結している立命館アジア太平洋大学の説明会を令和4年8月3日にオンラインで開催した。中学・高校生徒及び保護者を対象として生徒7名、保護者4名が参加した。会では個別相談及び本校卒業生との交流も行った。

IV-15	ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジ(KCC)学校説明会	
2022. 11. 28(月) 16:00～17:00		拠点校：視聴覚室

事業協働機関であるハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジの学校説明会を11月28日(月)に拠点校で実施した。生徒12名と保護者3名の計15名が参加した。内容としては下記の通りである。

1. 学校紹介
2. 教育プログラム(授業内容、ハワイ大学・中村学園大学への編入等)
3. 入試システム
4. 学費
5. 質疑応答

生徒・保護者からは特に生活費や入試での学力水準、現地の様子などについて細かな情報を求める

質問が多かった。拠点校や事業協働機関である中村学園大学との接続教育プログラムや、ハワイの治安の良さ、生活環境としての充実さについて理解を深める機会となった。コロナ感染症の蔓延も落ち着き、海外留学への関心は次第に高まってきていることが感じられた。

V カリキュラム開発 - i 探究的な学び

V-(i)-1	「グローバル探究」の開発と実施	
	通年	拠点校（教育開発部）

昨年度より計画していた、学校設定教科「グローバル探究」を本年度から実施し始めた。この教科は、令和4年度入学生から学年進行で開設し、GIクラスのみが履修していた「GI探究」に換わり全クラスで実施する教科である。基本的には、「GI探究」の学習内容をベースとしながら、全クラスで実施が可能となるように改良と修正を加えて指導計画と内容を策定した。以下、拠点校における教育目標となる基本方針、WWL事業における育成を目指す人材像、年間スケジュール、実践報告、今後の展望等を示す。

1. 拠点校の教育目標となる基本方針との対応

以下に「グローバル探究」に関連する拠点校の教育目標となる基本方針の部分を抜粋し、教科内容として盛り込むべき項目に下線を付した。

(1) 女子教育

① 品格ある女性を育てる教育

- a. 食育や、生活指導を通して、自立した生活を営むための基礎を養う。
- b. 日本の歴史と文化への理解を深めることで、先人を敬う心やアイデンティティを養う。

② 自己肯定感の涵養

- a. 一人ひとりが力を発揮する場を作ることで、自己肯定感を育むと同時に、他者を理解し尊重する態度を養う。

(2) キャリア教育

① 自己実現に向けて主体的に学び、自立した社会人となることを目指す教育

- a. 基礎学力の充実に加えて、「思考力・判断力・表現力」を教科横断的な深い学びを通じて養う。
- b. 協働作業や探究活動を通して、変化や多様性に富み予測困難な社会を生きる上での強さとしなやかさを養う。
- c. 女性の活躍が益々期待される未来社会での自己実現を目指し、自ら必要な学びに主体的に取り組む姿勢を養う。

(3) グローバル教育

① 国際社会で輝く女性を目指す教育

- a. 地球規模の課題に関心を持ち、主体的に課題解決に取り組む姿勢を養う。 ※原文修正
- b. 多様性受容力やコミュニケーション力を向上させ協働性を育むことを通して、将来イノベーション的なグローバル人材として社会貢献できる女性を育てる。

② 国際人となるにふさわしい語学力、国際理解に必要な知識・教養を養う。

2. WWL事業構想における育成を目指す人材像

以下に令和3年度WWLコンソーシアム構築支援事業の構想計画書にある「1 構想目的・目標の設定」の「(1) イノベーションなグローバル人材像」に記載した、育成を目指す人材像について抜粋する。「グローバル探究」で育成すべき力に関連する部分に下線を付した。

- ① 日本人としての自覚を持ち、豊かな文化的感性や礼儀・作法を身につけている。
- ② 地球規模の課題への関心を持ち、自主的で継続的な学習ができ、課題発見力・課題解決力、多様性受容力、コミュニケーション力を備えている。
- ③ (高次の)課題解決力…答えのない課題や予測不能な事態に対して、いち早く的確に状況を察知・観察し、核心をつく問いかけを何度も行い、それに合う最適な方法でプロジェクトを企画・実行し、状況に応じた最適解を導くために必要な力。
- ④ 突破力…大きな壁(課題)にぶつかっても、諦めることなく論理的な思考で乗り越える力。
- ⑤ 創造力…既存の観念にとらわれることなく、新たな価値を創造する力。
- ⑥ 調和力…国内外の人とのつながり・協働にとどまらず、新しい知識と既存の知識・自己の経験と他者の経験等を結びつけて協働する力。
- ⑦ 自分の可能性を信じ粘り強く努力することで、自己の能力が発達し、持続可能な社会が実現するというマインドセット。
- ⑧ 得られた知識を活用しながら様々な手法を試行し、失敗の経験を生かして次の改善につなげ、答えのない問題にも諦めずに取り組む意欲や態度、忍耐力。

3. 1年次の達成目標

- ▶ 日本(特に地元福岡)を知る、世界(特にアジア)を知る。
- ▶ 「食」の4領域の学習を通して、課題を発見し解決法を考えることができる。
- ▶ 課題研究の方法の基礎基本を理解する。
- ▶ 自分の考えをポスターにまとめたりして発表する(論文作成につなげる)。
- ▶ 主にグループ活動を通してコミュニケーション力や多様性受容力を身につける。

4. 年間スケジュール

今年度の年間スケジュールを次の表に示す。なお、下線を付した「食と社会文化」・「食と栄養」・「食と経済」・「食と環境」に関しては、実践報告をあとに述べる。

日程	探究内容	活動
4/18・4/25・5/2	GI スタートアップセミナー	ガイダンス
5/9・5/23・5/30	<u>食と社会文化①②③</u>	レポート作成・発表
6/6・6/13・6/20	<u>食と栄養①②③</u>	レポート作成
7/4・9/5・9/12	グローバル・キャンパス準備①②③	プレゼンテーション準備
9/26・10/3	グローバル・キャンパス振り返り①②	代表者プレゼンテーション
10/17	GI 講演	
10/24・11/7・11/14・ 11/28・12/5・12/12	<u>食と経済・食と環境①②③④⑤⑥</u>	レポート作成・発表
12/19	食さのミットに向けて(ポスターセッションについて)	ポスター作成について
1/16	食と経済・食と環境振り返り	
1/23・1/30・2/6・ 2/13	ポスターセッションクラス発表①② ③④	ポスターセッション
2/27・3/6	1G 探究1年間の振り返り①②	アンケート

5. 実践報告

(1) 食と社会文化

① 概要

グローバル探究の初回の「食と社会文化」をテーマに行った。はじめての探究活動は生徒にとって身近に取り組みやすいものとして、「世界の料理」について自分が興味をもったものを調査することとした。様々な国や民族の料理を調べてみると、自然環境の違い、経済状況の違い、宗教や慣習の違い、色々な社会的、文化的な特徴を見出すことができる。料理の起源や普及を調査することを通じ、物事を細かな側面でとらえ、違いが生じる背景を調べるトレーニングの機会とした。また、事前に行ったGIスタートアップセミナーを通じ、生徒は論理的に思考し整理すること(ロジカルシンキング)を学んでいた。生徒は自分の調査対象について、論理的にまとめ、クラスメイトに情報を伝えるというトレーニングとしての狙いもあった。

3回の授業の内容は以下のとおりである。

- ・第1回…社会文化とは何か。世界の料理についてテーマ設定を行う。
テーマに対し、ロジック・ツリーを通じて様々な背景や要素をまとめる。
- ・第2回…作成したロジック・ツリーを下地に、A4サイズのレポート(ポスター)を作成する。
- ・第3回…生徒同士が自身の作成したレポートを用いて、調査内容を発表する。

② 結果

発表後の自己評価は以下のとおりである(自由記述での回答に関しては、主なものを抜粋)。

○ 自己評価

とてもよく出来た・頑張った	出来た・頑張った	どちらともいえない	あまり出来なかった・頑張りが足りなかった	全然出来なかった・頑張りが足りなかった
26.04%	54.86%	16.67%	2.08%	0.35%

○ 自己評価の理由

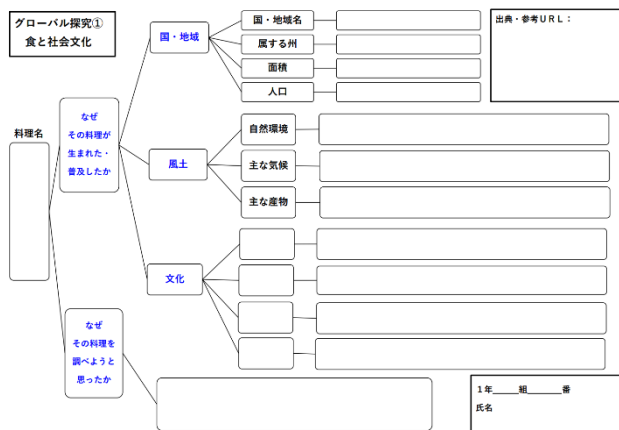
- ・なぜその料理が普及したのかをはっきりさせるために、沢山の情報を調べたから。
- ・発表する内容のほとんどがポスターに書いてあることそのままであり、自分で考えて話すことができなかったから。
- ・実際に料理を調べて、気候や食文化との繋がりを自分なりに考察してみると、自分が思っていたよりも料理との繋がりがあることを知れました。
- ・まとめるのは上手にできた気がするが、自分の感想を書いておらず考察で終わってしまったから。
- ・繋がりがよくまとめられたから。
- ・テーマについていろんな観点で調べ関係のありそうなことをピックアップしてみんなに伝えられる様に絵なども描いて工夫することができたからです。
- ・自分なりにポスターを作る際に、読み手ができるだけ文字をはっきりと見やすいと感じるように、イラストを入れることでより丁寧に説明をできるよう最善を尽くすことができたと思ったからです。

○ 自分の発表の改善点

- ・長々と話さずにもう少しわかりやすく要点をまとめて話したかった。
- ・質問が出る＝ポスターが不十分ということもあると思ったので、わかっていることをもうすこし書けばよかったですと思いました。
- ・声を大きくし、相手を見て、間の取り方などを工夫した話し方をする点やPREP法などを意識して分かりやすくまとめる点。
- ・ポスターに書いてあることをそのまま読むのではなく、少し言葉を変えて分かりやすいように説明したら良かったと思った。
- ・もっとハキハキ喋れるようになりたい。曖昧な表現も避けられるようになりたい。

○ 今回の取り組みで、より興味を持てたこと・調べてみたいと思ったこと

- ・料理が生まれた理由には、想像を超えるほどのたくさんの経緯が含まれていることを知りました。他の些細なものですらも、たくさんの経緯が同じようにあるのかも知れないなと思っているので、少しでも気になることがあれば調べてみると、思っているよりも深く様々なことを学ぶことができるのかなと思いました。
- ・今日の授業で私が聞いたことのなかった料理をたくさん知ることができて、その料理を一度は食べてみたいなど関心を持ってました。今日知ることができた料理以外の特有の料理についてもっと知りたいと思いました。
- ・各国の伝統ある料理を知ることができ、そこにはいろんな物語があることを知ってすごく、興味を持つことができました！これからいろんな世界の料理に興味を持っていこうと思います。
- ・一つの料理にもたくさんの派生料理があつて面白かった。更に詳しく調べられたら新たな発見が生まれると思う。



「食と社会文化」 ロジック・ツリー



レポート例

(2) 食と栄養

① 概要

グローバル探究2回目のテーマは「食と栄養」とした。初回の「食と社会文化」で選んだ料理について、具体的な調理法のレシピを調べ、栄養価を計算した。レシピと栄養価をそろえたら、Microsoft PowerPoint でプレゼンテーション資料としてまとめた。「食と社会文化」は文献資料にのっつた探究だったので、数字を扱って分析することを目的に、グラフの作成の練習もかねて実施した。また、「食と社会文化」のときはポスター形式のレポートの作成を成果物としていたが、今回はスライドショー形式でのレポート作成の指導機会とした。

3回の授業の内容は以下のとおりである。

- ・第1回…世界の料理を多面的に見よう！（栄養学的視点から世界の料理を考える）
料理のレシピを調査、アプリ『Lorraine』を活用し栄養価の計算を行う。
- ・第2回…Microsoft PowerPoint の使い方の指導。レシピと栄養価についてのレポート作成。
- ・第3回…グループ発表を行う。

② 結果

発表後の生徒の感想・気づきは以下のとおりである（主なものを抜粋）。

- ・実際に家で野菜多めのタコスを作ってみて、とても美味しいタコスが食べられたことが印象的でした。
- ・普段自分たちが食べているご飯にはどのくらいの栄養が入っているのか、なんの栄養が足りていないかなど詳しく調べることを頑張った。
- ・炭水化物、脂質、たんぱく質、無機質（ミネラル）、ビタミンこの5大栄養素を偏りなく摂取することが非常に重要だということを学び、豆乳、ナッツ類、ブロッコリー、納豆 と栄養価の高いものを食べる回数を増やすことを心がけている。
- ・脂質よりも糖質の方が太りやすいということが印象に残っていて驚いた。
- ・その食材にある栄養や栄養同士バランスの良い料理の仕方などを考えました。
- ・どのようにしたら栄養価の高い料理を作れるのか、果物や野菜で栄養を摂れるのかを考えることを頑張りました。
- ・スライドショーをつくる大変さや栄養バランスをとるために何が足りないのか取りすぎているのかを調べることが大変でしたが、日常的に食べているものの中で何が足りていないのかを知る機会になってよかったです。

③ 考察

栄養価計算によって日ごろ自分たちが口にしている食品に対する理解が深まった生徒が多く見られた。実際に家で工夫しながら調理をした生徒もおり、食事や料理そのものに関心が向くようになったという点で、探究の成果が見られた。一方でグラフの作成やスライドショーの作成といった技術面での指導に時間が多く割かれ、内容の深まりや、スライドショー自体の完成度を高める余裕がなかったことが課題となった。限られた時間で、多くの教育的効果を求めようとすると学びの深まりに影響が出てしまう。今後、技術や手法の指導についてはカリキュラム上どのように行っていくべきか再検討が必要である。

- ・第3回…探究テーマについて個人活動その1
- ・第4回…探究テーマについて個人活動その2
- ・第5回…探究テーマについて個人活動その3
- ・第6回…レポート発表

② 結果

探究活動の感想・気づきは以下のとおりである(主なものを抜粋)。

- ・菓子産業についてグラフを読み取り需要と供給の関係について調べた。
- ・あまおうフェアを行うのに伴う、輸送コスト問題を取り上げそれに対する解決策を自分で考えました。
- ・福岡市の私の住んでいる地域でも公民館で離乳食教室が開催されていたり、保育園の栄養士さんがメニューを配布したりしているという活動を知ったけれど、普段生活している中では全く知らなかったのだから大変な思いをしている妊婦さんなども多いのではないかと感じました。
- ・恵方巻きだけでも経済損失額が10億にもなるというのを聞いて、日本の行事食だけでも経済損失額がどのくらいになるのかと想像するだけで恐ろしく思いました。
- ・日本が輸入に依存するようになった原因がどこにあって身近なことで私たちができることには何があるかを調べた。日本全体で行わなければいけない事を探究することも大切だけど、私たち一人が実践できる事で改善していくことが今私にできる最大限の事だと思った。
- ・日本では食料自給率が低いですが、どのようにしたら食料自給率を高くすることができ、経済をも支えることができるのかについて考え、難しい課題でしたが、食に関する問題は全て繋がっていて食品破棄が大量に存在することも課題になるということが分かりました。
- ・日本で開発されている飢餓を改善するための技術が開発されていることを初めて知った。日本の技術が世界をより良くするために使われていることに誇りを持てた。

③ 考察

福岡県の施策と食の問題を掛け合わせるというテーマの設定を行ったが、テーマを決定するまでに難儀した生徒が多かった。ただ社会文化や栄養のときと違い、探究活動の十分な時間を確保できたので生徒はレポートの完成にこぎつけることができた。経済や環境の問題は関心を抱きにくいのか生徒にとってはやや取り組みづらいジャンル・カテゴリーである。今回は福岡県という生徒自身にとって身近なところを切り口にしたので、結果的に前向きに取り組んだ生徒が多かった。探究活動を積極的に行う生徒を増やすためには、テーマ設定やそれにいたるまでの姿勢作りが重要である。まずは生徒自身に直接関係があるものや、強い関心を抱くもの、使命感を感じるものをテーマに据えられるようにしなくてはならない。今後は生徒をいかに探究に没頭させられるか、指導の体制づくりと、生徒への声掛けやフィードバックのあり方を検討していきたい。

家庭の貧困率と子ども食堂

現状・課題

福岡県内の調査における世帯の年間収入は、平均年収が母子家庭では240万円、父子家庭が404万円と公表されている。その中でも、母子家庭においては、年間収入300万円未満の割合が全体の7割を超えている。就学援助を受けると、経済的に貧困状態にあると推測される子ども(18歳未満)の数が、九州7県で約42万人に上ることが、2013～14年度の統計データを基にした西日本新聞の試算で明らかになった。県別の貧困率は福岡が23.0%と最も高く、鹿児島21.3%、長崎18.5%と続いた。小中学生については、自治体による就学援助(福岡市の場合は生活保護支給基準の1.25倍の年収以下程度の世帯を対象)を受給している子どもとし、九州7県で19万6352人(13年度)となった。高校生や高専生については、おおむね世帯年収250万円未満程度を対象となる低所得世帯向け奨学金給付金の受給者を対象とした。高校の授業料無償化見直しの影響で、14年度の1年生(九州で計2万3830人)しか実数がないため、これを3倍して約7万人と試算した。未就学児童については、小中学生の就学援助受給率を当てはめ、貧困層を約15万人と試算。これらの合計が約42万人となり、九州7県の18歳未満の人口約216万人のうち、19.4%に当たった。ただ、就学援助や奨学金給付金はあくまで申請した人が対象だ。奈良県子ども家庭課は「援助を受けていないが貧困状態にある子どももおり、実際の貧困率は、もっと高い可能性がある」としている。



解決策

福岡県における子ども食堂の数は、2018年時点で90箇所確認されている。この数は、年々増加しており、福岡県内で多くの子ども食堂が求められていることが分かる。「安価で美味しいご飯を食べられる」という目的もあるが、「地域をつながれる場を持つ」というのも子ども食堂にとって大きなメリットといえる。福岡県では、平成28年度から、食品ロス削減(資源の有効活用)と食に困っている人への支援にもつながる「フードバンク」活動を普及促進するために以下の取り組みを行っている。食品製造等を行う事業所に「フードバンク」活動への食品提供を呼びかけやフードバンクの取り組みを検討しているボランティア団体等の把握、運営に関わる支援、子ども食堂で使われる食料確保にも、貢献している。北九州市では、子ども食堂に関する情報提供や意見交換、衛生管理に関する研修、ボランティアや寄付関係の支援を行うネットワーク団体を運営している。子ども食堂を新しく立ち上げる人々を助ける団体として機能している。さらに北九州市では、市内に子ども食堂の新設を予定している団体や既存団体に対して、活動支援の助成を行う。補助区分は、ハードとソフトに分けられている。ハードは施設の修繕、改修費用などの開設に関わる費用を最大20万円を上限に保証する。ソフトは、食料品、消費品費、光熱費、食材費などの運営に関わる費用を20万円を上限に保証する制度である。北九州市では、子ども食堂の開設・運営に関する情報提供を行うコーディネーターを配置する取り組みを開始した。福岡市内で行われている子ども食堂立ち上げ等に対する補助金を支援する制度である。補助金交付書類を、団体の所在地のある区の社会福祉協議会に申請を行う。補助上限額は、事業開始に要する経費が10万円、事業実施に要する経費は活動回数が1回～4回以上で上限額が変わる。

県	施設数(前年比)	定員数(前年比)	運営者
福岡	117(+27)	15.9%(+3.7%)	市民
佐賀	20(+9)	12.2%(+5.5%)	市民
熊本	23(+16)	7.0%(+4.9%)	市民
大分	52(+21)	14.9%(+6.0%)	市民
長門	53(+23)	19.5%(+8.5%)	市民
鹿児島	33(+15)	13.6%(+6.2%)	市民
宮崎	46(+22)	8.9%(+4.3%)	市民
全国	3718(+1432)	17.3%	市民

レポート例1

レポート例2

6. 今後の展望

グローバル探究は今年度はじめて実践したが、次年度以降改善すべき点があった。

(1) 学習内容の多さ

グローバル探究の時間は生徒の個人探究だけではなく、グローバル・キャンパスやポスターセッション(食のサミット)といった行事での課題学習にも時間が割かれた結果、15コマ程度しか確保ができなかった。今後は行事との兼ね合いを改善し、20コマ以上の時間は確保したい。この時間数の中で、食の4領域、日本や世界の食の課題、課題研究の基礎的な知識や技術を取り扱った。結果的に教員側からの教授の時間が多くなってしまった。取り扱う内容を精選し、よりシンプルな目標設定が必要である。

(2) 探究の深まり不足

上述の通り限られた時間で多くの内容を取り扱った結果、生徒にとって自身の関心や課題を掘り下げる時間を十分には確保できなかった。探究学習のプロセスを得ることが目的であったが、内容が細切れの学習となってしまった。生徒がより主体的に取り組み、半年から1年間継続するような課題設定が必要である。

(3) 指導体制、意識の改革

通常の授業において、教員側の指導姿勢には「教員は生徒に情報や技術を教える・与える」ということがベースとして存在する。そしていかにそれを効果的に実行できるか、指導の体制を築いておくことが求められる。しかし、探究活動においてはそうした前提とはむしろ逆の姿勢が必要となる。生徒の自主性を重んじるのであれば、むしろ教員がそうした指導を一旦手放す必要がある。グローバル

「選ばれる福岡県」に向けたブランド力強化、販売の促進

現状・課題

《現状》

福岡県では、販売単価17年連続日本一の「あまおう」をはじめ、九州一の出荷羽数を誇る「はかた地どり」等の県産品種や全国茶品評会「玉露の部」において7年連続で農林水産大臣賞を受賞した「福岡の八女茶」、全国有数の生産量を誇る「福岡有明のり」等、数多くのブランド農林水産物が生産されている。→これらのブランド農林水産物は高単価で販売される等、市場関係者や消費者から高い評価を得ているが、他産地も独自品種を開発し、ブランド化を進めており、産地間の競争がますます激しくなっている。

《課題》

このため、消費者ニーズに対応した県独自品種の開発・普及を加速するとともに、県内はもとより、国内外に向けて本県農林水産物の魅力発信と認知度向上に取り組みブランド力を強化していくことが必要



解決策

《施策》

・県産農林水産物の認知度向上によりブランド力を強化し、収益性の高い農林水産業を目指す
・消費者ニーズへの対応で販売力を強化し、国内外から選ばれる福岡の農林水産物を目指す

《施策》

- ①世界への福岡の農林水産物等の魅力発信と輸出の拡大
 - ・アジアをはじめ海外での市場調査やニーズ把握を強化し、県産農林水産物や県産酒、八女茶をはじめとする加工品の輸出を拡大する
 - ・輸出先国の規制に対応した生産等を支援し、輸出産地づくりを推進する
 - ・現地でのフェア開催等による情報発信の強化や九州各県等と連携したPRを通じ、県産農林水産物等の認知度を向上する
- ②県独自品種や新技術の開発・普及の加齢競争や消費者・実需者ニーズに対応した新品种の開発を加速するとともに、現地産産を拡大し、新品種の普及を迅速化する
 - ・生産現場と連携し、高品質化・低コスト化技術を開発・実証する
- ③福岡の農林水産物等の認知度向上と販売の促進
 - ・首都圏・関西圏等での販売促進活動を通じ、県産農林水産物及び日本酒等の加工品の一体的な売込みを強化する
 - ・有名店での「福岡フェア」の開催や大規模な大会等でのPRを通じ、県産農林水産物等の認知度を向上する
 - ・販売促進活動で得られた外食事業者等のニーズを産地へフィードバック情報還元し、次の生産や販売に活かされる体制づくりを進める
 - ・県内の複数産地による共同輸送等により、流通コストの削減を促進する
- ④新たな木材需要獲得による県産木材の利用促進
 - ・民間建築物の木造・木質化を促進する。また、展示会や商談会を遊覧用具や木製品の販路を拡大し、県産木材の利用を促進する
 - ・間伐等で発生した林地残材等の木質バイオマスのエネルギー利用を促進します。



探究を1年間行う中で、指導体制の再編と、教員間の意思疎通について改めて考えさせられた。来年度以降は探究内容に関することと探究指導員の育成について、学校組織の運営面から改善をはかっていきたい。

7. 年度末アンケート結果

- (1) 設問1：食の4分野(社会文化、栄養、経済、開発)のなかで、取り組んだ内容について特に頑張った分野、印象に残った分野を選んでください。

食と社会文化	食と栄養	食と経済	食と環境
20.3%	31.47%	43.15%	5.08%

- (2) 設問2：1年間を通じて、探究の基本(テーマ設定、調査の仕方、文章のまとめ方等)を学びました。探究学習について理解が深まりましたか？

理解が深まった	どちらかといえば理解が深まった	どちらかといえば理解が深まらなかった	理解が深まらなかった
49.25%	49.25%	1.51%	0%

- (3) 設問3：設問1について、特に頑張ったこと、印象に残ったことを具体的に書いてください。

回答例)・自分で調べて自分でまとめるのはとても大変だったけど班のみんなと協力して完成できた。

・飢餓問題が世界に起こっていることは知っていたけど、なぜ起こっているのか？について考えたことはなかったのでたくさん調べて考えたこと。

・栄養素のひとつひとつに対してどのような効果があり、どう体に影響してくるのか調べました。組み合わせや時間帯など、生活に大きく関わってきたことでした。

- (4) 設問4：設問2について理解が深まったと答えた人は探究ができるようになったことを中心に、理解が深まらなかったと答えた人は疑問に思ったことを中心に、一年間のグローバル探究の感想を自由に、具体的に書いてください。

回答例)・初めて食について調べて、普段食事している時も栄養について考えるようになりました。食材を買う時や使う時にも意識をすることになりました。

・グローバル探究がないと調べようとも思っていなかったことも調べるようになりました。

・将来管理栄養士になりたいので、食のテーマでの探究活動はとても良い経験になったと思いました。知らなかったことを知ることができてよかったです。

- (5) 設問5：今年度は食の課題を通じた探究を行いました。来年度1年間を通じて、「食」のテーマを探究するとしたら、何をテーマにしたいと考えますか？

回答例)・ゲノム編集食品について調べたいです。

・スポーツ選手の体を作るために何が必要なのか。

・食品ロスをテーマにしたいと思います。先進国に住んでいる私たちが1番真剣に取り組まないといけない問題で、私たちにできる事が沢山あるからです。

・昔と今の食事の違い

V-(i)-2	GI 探究の開発・実践 (1年)	
通年	拠点校：1年GI クラス	

令和4年度の1年次ではGIクラスに「GI 探究」としての単位を独立して設けず、他クラスと共通の科目である「グローバル探究」の時間を通して探究の学習および活動に取り組んだ。したがって、通年で取り組んだ内容については、前述の「V-(i)-1 グローバル探究の開発と実施」に準ずる形となっている。本項では、GI クラス1年次にあたる本クラスにおいて、「LHR」や「グローバル探究」、「総合的探究の時間」、加えて学校行事や放課後の時間等を利用し、クラス独自で行った取り組みについて挙げるものとする。

1. 海外留学生の受け入れ

本校では文部科学省の「アジア高校生架け橋プロジェクト」を通して毎年、海外留学生の受け入れを行っている。本年度は、学校全体で7名の生徒を受け入れており、その内、本クラスでは5名の生徒を受け入れ、普段の学校生活を共にした。原則として、留学生として特別な扱いはすることなく、クラスの一員として、全生徒が漏れなく交流を図ることができるように取り計らっている。探究的な活動としては、7月にウェルカムパーティーを実施し、その中で留学生の母国の食文化についての学習やディスカッションを行い、ハロウィンやクリスマス、バレンタイン等のイベントに合わせて英語でのアクティビティを生徒に企画・立案させ実施するなど、クラス内のイベントとして様々なコミュニケーションや学習の場を設けている。また、後述する学内・学外のイベントに関しても、留学生は一般生徒と同じ扱いで参加させている。(WWL としての留学生の活動については、後述の「V-(ii)-2 留学生の受け入れ」を参照)



海外留学生ウェルカムパーティーの様子
(プレゼンテーション・英語コミュニケーションのアクティビティ)

2. Blue Earth Project 2022 への参加(GI クラス 1年生・2年生の有志生徒)

Blue Earth Project は「女子高生が社会を変える！」をキャッチフレーズに、札幌から沖縄までこれまで2千名以上の女子高校生が取り組んできた環境啓発活動である。毎年、NPO 法人 Blue Earth Project のサポートの元、環境問題やSDGs に対して生徒自身が身近なアクションを考えてイベント等で発信を行っている。

本年度は、福岡地区として本校が初めての参加となり、GI クラス1年生・2年生の有志51名が活動を行った。本年度の取り組みは「エコ給水キャンペーン」をテーマに、海洋汚染を主とした環境問題についての探究活動やディスカッション等を行い、海洋プラスチックゴミの削減に向けて啓発活動の計画や準備に取り組んだ。具体的なアクションとしては、街中の給水スポットを増やし、ペットボト

ルではなくマイボトルを持ち歩くライフスタイルを社会の人々に推奨するため、キャナルシティ博多(福岡市博多区の複合商業施設)にある飲食店に対し、キャンペーンへの協力依頼を呼びかける「店舗アタック」を生徒達で手分けして実施した。各飲食店に対しては ①キャンペーンについての趣旨説明(店長へのプレゼンテーション)、②キャンペーンに賛同頂けるかの確認(承諾確認)、③キャンペーンに必要な道具の持参(生徒自作のオリジナルポスターやPOPの配布)という流れで3度の訪問を行い、最終的に21店舗の飲食店が参加を引き受けてくれるに至った。キャンペーン期間は9月17日～9月25日の一週間とし、各飲食店がマイボトルを持参した客に対して無料で飲料水を提供してもらうことを実現することができた。



キャナルシティ博多での準備や店舗アタックの様子
(生徒がチームを組み、飲食店の店長に対してキャンペーンへの参加を交渉)

3. RKBカラフルフェス2022への参加(GIクラス1年生の有志生徒)

福岡RKBのテレビ・ラジオ・オンラインが一体となったイベント「RKBカラフルフェス2022」にGIクラス1年生の有志生徒10名(内5名は海外留学生)が参加した。今回は、事前にRKBのテレビ番組「タダイマ!」の1コーナーである「カレー探偵たける」に出演した際に考案した、猪肉を使ったジビエカレー(生徒による命名「ジビエットカレー」)の調理・販売を行い、害獣問題の解決策としての提案とアクションを行った。また、同イベント内で収録が行われたRKBオンライン番組「ツナぐ! 私たちのSDGs」に生徒達が出演し、本校で行っているSDGsに対する活動について報告を行っている。



RKBカラフルフェス2022の様子
(ジビエカレーの調理・販売、SDGsの活動報告)

V-(i)-3	GI 探究の開発・実践 (2年)	
通年	拠点校：2年GIクラス	

1. 活動の目的

① 探究力の育成

GI 探究を通して、自分の興味と社会的・学術的課題が重なる分野を模索しながら、自身と向き合う力、社会問題と向き合う力、自分の進路と向き合う力を涵養し、探究力の基礎を身につける。

② グローバル・マインドセットの育成

国際交流を通して、高度な英語運用能力、批判的思考力、異文化理解力、多様性受容力など、グローバル人材として求められる資質を身につける。

③アントレプレナーシップの育成

産学連携や国際交流などを通して、SDGs に配慮した商品の企画・販売や世界的な課題の解決策など、リーダーシップ、チームビルディング、イノベーションスキルの基礎的な資質を身につける。

2. 活動の記録

4月19日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑩ (商品仕様書 作成)	2年GIクラス
4月26日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑪ (商品仕様書 発表)	2年GIクラス
5月10日(火)	カナダ留学報告会(留学生徒13名のプレゼンテーション)	2年GIクラス 1年GIクラス
5月24日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑫ (企業担当者からの商品仕様書への助言・フィードバック)	2年GIクラス
5月31日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑬ (商品開発PR方法の検討①)	2年GIクラス
6月7日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑭ (商品開発PR方法の検討②)	2年GIクラス
6月14日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑮ (商品開発PR案の提出)	2年GIクラス
6月21日(火)	アントレプレナーシップ講座①(SG インキュベーター様来校)	2年GIクラス
7月22日(金)	Blue Earth 福岡 エコ給水キャンペーン 店舗アタック①	2年GIクラス 1年GIクラス
8月2日(火)	Blue Earth 福岡 エコ給水キャンペーン 店舗アタック②	2年GIクラス 1年GIクラス
8月25日(木)	Blue Earth 福岡 エコ給水キャンペーン 店舗アタック③	2年GIクラス 1年GIクラス
9月10日(土)	GI 海外FW 出発(シンガポール・マレーシア)	2年GIクラス
9月11日(日)	マレーシア工科大学における個人研究プレゼンテーション	2年GIクラス
9月15日(木)	GI 海外FW より帰国	2年GIクラス

9月20日(火)	GI 海外FW の振り返り・発表準備	2年GI クラス
9月27日(火)	GI 海外FW の報告プレゼンテーション①	2年GI クラス
10月4日(火)	GI 海外FW の報告プレゼンテーション②	2年GI クラス
10月18日(火)	GI 海外FW の報告プレゼンテーション③	2年GI クラス
10月23日(日)	サステイナブルブランド国際会議 第3回 SB Student Ambassador 九州ブロック大会	2年GI クラス 代表生徒12名
10月24日(月)	リトアニアの高校生徒とのオンライン国際交流	2年GI クラス 代表生徒6名
10月25日(火)	GI 海外FW の報告プレゼンテーション④	2年GI クラス
10月29日(土)	Blue Earth 塾 エコワークショップ	2年GI クラス 1年GI クラス
11月1日(火)	個人探究テーマ発表①	2年GI クラス
11月8日(火)	個人探究テーマ発表②	2年GI クラス
11月15日(火)	個人探究テーマ・ディスカッション	2年GI クラス
11月29日(火)	「食のサミット」準備① (テーマ設定・個人研究の方法)	2年GI クラス
12月3日(土)	TORYUMON PRE EVENT at FUKUOKA (学生/U25 向け起業促進イベント)	2年GI クラス 代表生徒6名
12月6日(火)	GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑩ (企業担当者来校・商品の試食・改善案のディスカッション)	2年GI クラス
12月17日(土)	WWL 報告会(ステージ発表)	高校1・2年生 中学3年生
12月18日(日)	全国高校生フォーラム	2年GI クラス 代表生徒4名
12月18日(日)	九州大学 世界に羽ばたく高校生の成果発表会 参加者投票賞受賞	2年GI クラス 代表生徒8名
1月17日(火)	「食のサミット」準備② (個人研究プレゼンテーション①)	2年GI クラス
1月24日(火)	「食のサミット」準備③ (個人研究プレゼンテーション②)	2年GI クラス
1月24日(火)	京都先端科学大学附属高校 Global Simulation Gaming	2年GI クラス 代表生徒8名
1月28日(土)	Blue Earth Project オンラインイベント	2年GI クラス 1年GI クラス 希望者計6名
1月31日(火)	「食のサミット」準備④ (個人研究プレゼンテーション③)	2年GI クラス
2月7日(火)	「食のサミット」準備⑤ (個人研究プレゼンテーション④)	2年GI クラス
2月14日(火)	「食のサミット」準備⑥ (代表チームのテーマに関するリサーチ・ディスカッション)	2年GI クラス

2月28日(火)	・「食のサミット」準備⑦(発表・運営の準備) ・GI 探究 産学連携 企業とのコラボ商品開発⑩ (文化祭・企業店舗での販売に向けた準備)	2年GIクラス
3月10日(金)	「食のサミット」1日目(ステージ発表・会議)	全校生徒 (高3年除く)
3月11日(土)	「食のサミット」2日目(共同宣言)	全校生徒 (高3年除く)
3月12日(日)	産学連携・企業とのコラボ商品の販売(水仙祭)	2年GIクラス
3月13日(月)	京都先端科学大学附属高校 WWL 課題研究成果発表会	2年GIクラス 代表生徒2名
3月14日(火)	産学連携・企業とのコラボ商品の店頭販売(石村萬盛堂)	2年GIクラス 希望者20名

3. 活動の振り返り

(1) 探究力の育成

海外FWワークでの個人テーマ研究では、食の問題のみならず、環境、政治、ジェンダー、スポーツ、芸術など、生徒が関心を持つテーマに関して「なぜ」を問う探究を行うことができた。また、「食のサミット」に向けたリサーチでも、食の課題を環境や教育など様々な分野と関連させて探究を行っている。今後はより適切な調査・実験方法を用いて、客観的なデータ収集を行い論理的にまとめる力を養うことで、次年度のGI課題研究論文作成につなげていきたい。

(2) グローバル・マインドセットの育成

昨年度の台湾や韓国の高校生徒との国際交流に続き、本年度はリトアニアの高校生徒との交流を行った。また、食のサミットに向けてアジア架け橋留学生と協力しながらリサーチやプレゼンテーションの準備をすることができた。さらに、本校が初参加となるWWL連携校の京都先端科学大学附属高校のGSG(Global Simulation Gaming)において、各国の首脳やメディアなどの役割を演じながら国際社会の現状や様々な国の立場について理解しながら英語でディスカッションをすることができた。

(3)アントレプレナーシップの育成

産学連携の一環として、福岡の老舗店「(株)石村萬盛堂」様と共同開発した「みつっとカヌレ」を校内の文化祭および石村様の店舗で販売し、完売することができた。企画の段階では、オリジナリティやSDGsなどの付加価値を考慮する中で、地産地消にこだわった地元の「八女茶」使用したり、売上金の一部を食の問題を解決するNPOに寄付したりするアイデアも生まれた。また、実現には至らなかったものの、フェアトレード素材を使う案なども出るなど、社会の課題に対してアクションを起こそうとする姿勢が見られたのも成果である。1年次の探究学習のテーマ「食と経済」からスタートし、商品考案からPR、販売までのプロセスを実体験の中で学ぶことで、創造力や課題解決力、協働力を養うことができた。

V-(i)-4	GI 探究の開発・実践 (3年)	
通年	拠点校：3年GI クラス	

GI 探究 3 年次は探究科 9 名の教員に加え、AL ネットワーク組織の協力を得ながら PBL 学習活動を開発・実践した。概要は以下の通りである。

[GI クラス 3 年次の目標] 課題解決力とイノベーションスキルの育成

[育成する人材像] (高次の)課題解決力、突破力、創造力、調和力などを備えた
グローバル・イノベーター

[育成のための主な取り組み] ・「食」に関わる SDGs 課題探究

・GI プレゼンテーション、論文作成(27-02 詳述)

GI 探究を開発するうえで常に心掛けて実践したことは、下記の 3 つである。

- (1) すべての活動に事前学習(準備)、活動、事後学習(振り返り)を行い、特に事後の振り返りはシートを使って個人で内省した事柄を言語化し、グループや学級全体で共有した。
- (2) 一つひとつの活動が単発にならず、つながりを持たせるような生徒間、生徒教員間のフィードバックを行った。
- (3) これまでの探究活動と社会や進路との結びつきを意識した。

GI 探究の開発と実践を重ねることで見えてきた生徒の成長と課題については下記の表のとおりである。

	成長	課題
生徒の視点から	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見を持ち、表現する ・内容を深掘りし、話し合いを充実させる ・スライド等視覚資料を用いた発表や表現力の向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・計画を立て、時間を意識して実行する ・情報収集・コミュニケーションツールとしての英語運用能力を高める ・文章表現力、情報編集力を高める
教員の視点から	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な出来事から社会課題、世界の諸問題に至るまで、知るだけでなく、疑問を抱いてさらに考える ・アウトプット(表現、発表)を前提としてインプットする 	<ul style="list-style-type: none"> ・解決策を提案に留めず、実行する(実行し続ける) ・実地調査(フィールドワーク)や実験、データやエビデンスに基づいて探究活動を行う

最後に、探究活動を担当する教員も下記の 3 点の成長が得られたと考えられる。

- ・研究活動をさらに深めるための質問力の向上や手がかりをつかませるためのアドバイスの幅が広がった
- ・授業づくりをする際に、教科活動と探究活動の結びつきを意識する
- ・探究活動を支援する外部とのつながり、教育職員以外の視点に触れる

V-(i)-5	英語探究の活動 (1年)	
	通年	拠点校：教室、AL ルーム

前述の「V-(i)-2. GI 探究の開発・実践(1年)」で述べたとおり、令和4年度の1年次では、GI クラスに「GI 探究」としての単位を独立して設けられていない。それに伴い、本年度のGI クラス1年次における「英語探究」の時間については、英語力(英語でのコミュニケーション能力)を高めるための学習活動と、イベントや発表会に向けた探究活動の補助的な時間として取り扱うものとした。

1. 活動の目的

- (1) 生きた英語を使用しながらアジア各国の学生との国際交流を通して、英語でのコミュニケーション能力、異文化理解力、多様性受容力を養う。
- (2) SDGs や食の問題に関して、本やインターネットなどから情報を収集し、自分なりの意見を持ち、英語でディスカッションやプレゼンテーションを行うスキルを身につける。
- (3) 上記の(1)・(2)の取り組みを通じて、日本人としての自覚と素養、グローバル・リーダーやイノベーターとしての資質を涵養する。

2. 活動の内容

探究的な活動については前述の「V-(i)-1. グローバル探究の開発と実施」や「V-(i)-2. GI 探究の開発・実践(1年)」に準ずるものとし、本項では英語力を高めるための学習活動やイベント活動について記述する。

[5月～7月]

- 英語力の向上を目指した学習活動
 - ・英検準2級～2級程度のスピーキングやリスニング、リーディング&リスニングテスト練習(ネイティブを含めた英語科教員3名による同展授業)
 - ・英語課外としての授業実施

[7月]

- アジア架け橋留学生に対するウェルカムパーティー
 - ・各留学生が自国の食文化について英語で紹介
 - ・日本の伝統文化を留学生に対して英語で紹介

[10月]

- ハロウィンパーティー(GI クラス1年・2年の交流会)
 - ・歌や踊りを通じての交流や出し物

[12月]

- クリスマスパティー(クイズ大会)
 - ・生徒が自作した英単語クイズや英文法クイズの実施
 - ・英語で書かれたプロフィールシートを用いてのクイズの実施

[1月]

- GI 留学プログラムに向けた事前学習
 - ・海外留学中における英語でのコミュニケーションについて
 - ・カナダの地理や文化について
 - ・英会話練習

[2月]

- アジア架け橋留学生お別れ会
 - ・留学生が考案した英語コミュニケーションゲームの実施

3. 英語の学習活動について

5月から7月にかけて、生徒を3つのクラスに分け、英語力向上ワークショップを実施した。各グループは10名程度で、それぞれ1名の英語教諭が指導を担当した。生徒たちは、ネイティブスピーカーと1対1のスピーキングや英作文(ロジカルライティング)のスキルも向上させることができた。

7月には、アジア各国からアジア架け橋留学生を迎えた。GI生徒は、新しい友人たちのために歓迎会を企画し、英語での歓迎スピーチや日本文化の紹介など、豊富な内容で留学生をもてなした。また、各留学生に母国の食文化についてプレゼンテーションをしてもらい、英語によるコミュニケーションを中心としたアクティビティに取り組んだ。

歓迎会後の授業でも、GI生徒は、それぞれの国について学んだことを英語でアジア架け橋留学生に発表したり、食の問題に関して英語で話し合ったりする機会を設けることで、英語でのコミュニケーション能力を向上させた。また、GI生は留学生が日本語でのプレゼンテーションを行う準備の手伝いも行った。

1月には、GI留学プログラムに参加する生徒の事前学習を兼ねて、海外留学中における英語でのコミュニケーションやその注意事項、留学先であるカナダの地理や文化について等、より実践的な英会話練習に取り組ませることに注力した。

V-(i)-6	英語探究の活動 (2年)	
	通年	拠点校：教室、AL ルーム

1. 活動の目的

- (1) 国内外の学生と共通のテーマへ取り組み、英語で交流することを通して、協働力、コミュニケーション能力、異文化理解力、多様性受容力を養う。
- (2) 地球規模の課題に関して、リサーチクエスチョンを導き、仮説を立て、文献調査やアンケート調査を行い、考察を発表する能力を養う。特に、情報を適切に分析・活用する能力を育成する。
- (3) 上記の2点を通して、日本人としての自覚とグローバル・マインドセットを涵養し、自身の興味と社会的な課題に共通するテーマに関して、リサーチスキルと英語でのディスカッションやプレゼンテーションスキルを向上させる。

2. 活動内容

[世界的な課題・SDGs に関する学習・リサーチ・プレゼンテーション]

テキスト：「やさしい英語でSDGs」（合同出版）

授業で取り扱った内容：

- SDGs Goal No.1 No Poverty(貧困をなくそう)
- SDGs Goal No.2 Zero Hunger(飢餓をゼロに)
- SDGs Goal No.4 Quality Education(質の高い教育をみんなに)
- SDGs Goal No.5 Gender Equality(ジェンダー平等を実現しよう)
- SDGs Goal No.12 Responsible Consumption and Production(つくる責任 つかう責任)
- SDGs Goal No.13 Climate Action(気候変動に具体的な対策を)
- SDGs Goal No.14 Life Below Water(海の豊かさを守ろう)

2年次の英語探究では、上記のテキスト・内容で世界の現状を知ることから始めて、個人やグループでリサーチしたことをディスカッションやプレゼンテーションへとつなげた。テキストの内容の選定は各種行事やイベントとリンクするように配慮した。例えば、海洋プラスチック削減を目指すBlue Earth エコ給水キャンペーンの前には、SDGs のNo. 12 やNo. 13 の学習を通して、海の豊かさや気候変動に関して学んだ。また、「食のサミット」に向けたレディネスを整えるためにNo. 2 やNo. 12 の学習を通して、飢餓やフードロスに関して学んだ。

3. 英語探究に関連する主な行事・イベント

- 5月 カナダ留学報告会(留学生徒13名のプレゼンテーション)
- 7月～9月 Blue Earth 福岡エコ給水キャンペーン(店舗アタック)
- 9月 GI 海外FW(マレーシアの大学での個人テーマ研究プレゼンテーション)
- 10月 リトアニアの高校生とのオンライン国際交流
- 12月 WWL 報告会、全国高校生フォーラム、九州大学世界に羽ばたく高校生の成果発表会
- 1月 京都先端科学大学附属高校 GSG(Global Simulation Gaming)
- 3月 食のサミット(アジア架け橋留学生との協働を含む)

このように、年間を通して、英語探究の授業内容を各時期の行事への準備あるいは行事後の報告会と関連させて英語でプレゼンテーションを行う機会を持ったことで、世界的な課題への興味・関心が高まるだけでなく、行事へのモチベーションや学習の質の深まりとともに、生徒のプレゼンテーション能力も大いに向上した。



カナダ留学の報告①(学年集会)



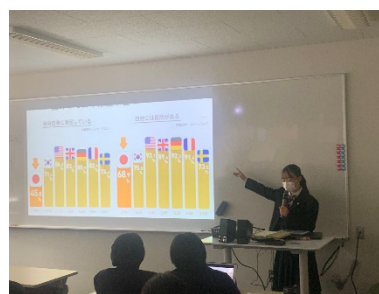
カナダ留学の報告②(学年集会)



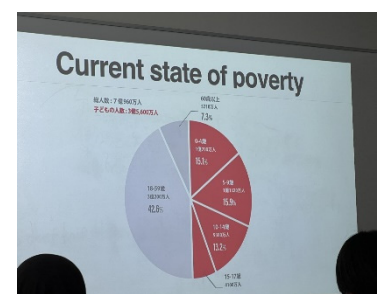
英語探究における発表①



英語探究における発表②



英語探究における発表③



英語探究における発表④



リトアニアの高校との交流①



リトアニアの高校との交流②



リトアニアの高校と交流③



GI 海外 FW(マレーシア工科大)



京都先端学大学附属高校 GSG



食のサミット(本校)

V-(i)-7	英語探究の活動 (3年)	
	通年	拠点校：教室、AL ルーム、大会議室

In our English Research class, we focused on learning deeply about the United Nations Sustainable Development Goals. On each goal, the students studied about the problem in a specific country that faces that issue. Through each goal, the students had a writing assignment and a group presentation because of this it broadened their knowledge about the problems of the world and tremendously helped improve their critical thinking skills and as well as their English skills. The students also had multiple chances to interact with the exchange students from the Asia Kakehashi Project. They had the chance to learn about five different countries and the problems that each country faces. The English Research class was an opportunity for the students to cultivate their critical thinking skills and practice presenting in English through project-based learning.

グローバル化が加速する時代を生き抜くためには、異なる言語や文化背景を持つ人々と協働することが求められ、英語は、必要な情報や自分の考えを適切かつ効果的に発信するためのツールとしてますます重要となる。英語探究の授業では、4技能の中でも発信に必要な Speaking と Writing に重点を置いて授業を行った。この授業はネイティブスピーカーである ALT と日本人英語教員によるティームティーチングの形式を取り、英語で授業を行う。また、生徒たちには単元学習後に関連事項に関する発表活動をさせることで、インプットだけでなく主体的に考えさせることや表現するアウトプット活動と位置付けた。さらに、ICT 活用の幅を広げるために、これまで使い慣れた Keynote や PowerPoint だけでなく、Canva を使ったポスター作成や英文校正アプリ Grammarly などを積極的に紹介し、活用の機会を設けた。英語探究も3年目となり、国内外の課題に関わる多くの立場や視点の理解が深まったと思われる。また、英語を用いた表現活動に自信を持つようになり、アジア架け橋留学生との協働活動が活発に行われるようになったと感じている。その他、授業単位等については下記の通りである。

[授業単位] 2単位

[使用テキスト] 読解力と表現力を高める SDGs 英語長文 Core(三省堂)

[授業実践]

- 4月 SDGs 発表会① 関心のある SDG 目標を選択、課題やその解決策に関するプレゼンテーション発表
- 5月 ウクライナ募金、男女共用トイレについて考える株 TOTO 様とのセッション
- 6月 気候変動を食い止めるために私たちにできること
- 7月 Eco-Tourism について インフォグラフィック作成
- 9月 SDGs に関する復習とクイズの作成、社会課題に関する英作文
- 10月 「海の豊かさを守ろう」を題材とした英文のスライドもしくは動画の作成
- 11月 「陸の豊かさを守ろう」を題材としたディベート、アジア架け橋留学生との協働活動
- 12月 SDGs 発表会② 関心のある SDG 目標を選択、課題に関わる複数の立場を英語劇で表現

Reducing garbage and plastic

PROBLEM
Marine creature accidentally swallow plastic waste and die

WE CAUSE

Waste that was not separated flows into river and oceans.



Sea turtles misunderstand plastic bags jellyfish and eat them

Microplastics




SOLUTION IDEAS

Instead of plastic product we use
"My bag" "My bottle" "My chopsticks"



Participate in volunteer clean-up activities.



LET'S ALL DO OUR BEST TO BE MORE ECO-FRIENDLY

SAVE CORAL REEFS!

PROBLEMS

- Tourism is hurting coral reefs. For instance, boating, fishing and diving.
- When people do these activities, they step on the coral reefs.
- Coral reefs are so sensitive. Thus, they are damaged easily.



WHAT CAN WE DO?

COLLECTING GARBAGE

Actively participate in garbage collecting activities.



USING SNS

Share problems about coral reefs.



BUY RECYCLABLE BOTTLES

Choose recyclable bottles rather than cans.



CHOOSE ECO-FRIENDLY goods

Buy eco-friendly healthy foods



Help protect coral reefs!

7月 インフォグラフィック 生徒の作品

Rubric for scoring the 3-7 debate

Criteria	Levels of Performance for				Team
	4	3	2	1	Score
1. Organization & Clarity: Main arguments and responses are outlined in a clear and orderly way.	Completely clear and orderly presentation	Mostly clear and orderly in all parts	Clear in some parts but not overall	Unclear and disorganized throughout	
2. Use of Argument: Well-researched reasons are given to support the teams arguments.	Very strong and persuasive arguments given throughout	Many good arguments given, with only minor problems	Some decent arguments, but some significant problems	Few or no real arguments given, or all arguments given had significant problems	
3. Use of cross-examination and rebuttal: <ul style="list-style-type: none"> • Identification of weakness in opposing team's arguments. • Ability to defend the team against attack with clear and 	Excellent cross-exam and defense against the opposing team's objections	Good cross-exam and rebuttals, with only minor slip-ups	Decent cross-exam and/or rebuttals, but with some significant problems	Poor cross-exam or rebuttals, failure to point out problems in the opposing team's position or failure to defend itself against attack.	
4. Presentation Style: <ul style="list-style-type: none"> • Tone of voice, • clarity of expression, • precision of arguments all contribute to keeping audience's attention and persuading them of the team's case.	All style features were used convincingly	Most style features were used convincingly	Few style features were used convincingly	Very few style features were used, none of them convincingly	
TOTAL SCORE:					



11月 ディベートの様子とルーブリック評価表

V-(i)-8	GI スタートアップセミナーの開催	
2022. 4. 25(月)・5. 2(月)	拠点校：教室	

この研修は本来、「グローバル・イノベーターを目指してスタートする高校生活についての学習面や生活面でのアドバイスを行う」「グローバル・イノベーターの人物像や心構えをグループワークで考えさせる等の内容を盛り込み、コミュニケーションを通してGI クラスの一員としての自覚を促す」ことを目的としたプログラムである。合宿での研修や外部講師を招くといったことも当初は構想していたが、残念ながら新型コロナウイルスの蔓延によりどちらも実施が困難となったため昨年度に引き続き、拠点校にて本校職員で実施した。

本年度はグローバル・リーダーとして必要な素養として、論理的に思考し・表現する能力が必要であると、「ロジカルシンキング」を学ぶ場として研修を実施した。3年間の探究科活動のベースとして位置づけ、課題を発見する力や想像力、他者とのコミュニケーション能力につながることを期して実施した。

第1回目は、論理的に筋道を立てて説明できる能力が探究には大切だと説き、「本質」と「具体性」の間を行き来しながら説明する技術を紹介した。抽象的な発言と具体的な発言を比較し、いかに自分のメッセージを相手に受け取りやすく説明できるかの重要性を説明した。論理的な説明の練習として、グループワークで「5W1H(Why, What, Who, When, Where, How)」を意識した話し方や、「PREP 法(Point, Reason, Example, Point)」を用いた説明を行わせた。生徒からは以下のように、日常での言葉の使い方や、コミュニケーションにおける重要性を学ぶことができたという感想が多く聞かれた。

- ・筋道を立てて話をするのは探究だけでなく日常生活でも大切だと思いました。
- ・隣の人との練習をする時に、5W1H や PREP 法を使うと、わかりやすいのは勿論、無駄なく必要な情報のみを伝えることが出来たので、聞く側も内容を理解しやすくなり、とても理にかなっていると思いました。
- ・人になにかを伝えるときに情報を的確に整理して伝えなければ、誤解を生んだり上手く伝わらなかつたりすることがあるので、会話をするとき5W1Hを意識することが大切だとわかりました。

第2回目は、自分の考えを論理的にまとめ、表現する能力を育成しようと、思考の「可視化」する技術を紹介した。思考の整理やアウトプットにフレームワークの活用が有効であると説明し、「ロジック・ツリー」「マンドラノート」「ピラミッド・ストラクチャー」「ポジショニングマップ」を挙げた。第1回で学んだ「5W1H」・「PREP 法」を踏まえた上で、例として「高校生での目標」についてロジック・ツリーを用いて作成させるグループワークを行った。以下は生徒からの感想である。

- ・目標を達成するためのフレームワークは意外にも難しかったが、文字に表すことで自分が今、何をすべきなのかが明確になるので、すごく役に立つなと思った。
- ・自分の目標などを可視化するための方法を知ることができた。今までまったく知らなかったものもあり、勉強になった。
- ・自分のしたい事や目標に向けてのやるべき事をまとめる方法がこんなに沢山あるとは思いませんでした。これからは是非とも活用したいと思います。

当初の狙いどおり、思考の整理やアウトプットに役立ったという感想が多く聞かれた。探究活動を含め学校生活全般において、こうした論理的思考力を活かしてより深い学びを実現し、課外解決力や創造力といったイノベーターとして必要な能力につなげていってもらいたい。

V-(i)-9	GI プレゼンテーション(論文発表会)の実施
2022. 7. 29(金) 13:00～16:00	拠点校：講堂、教室、講義室、AL ルーム等

GI プレゼンテーションは、生徒のこれまでの課題研究の成果を発表する論文発表会である。令和3年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により論文作成に十分な時間を取ることができなかったが、新たに外部講師(以下、学外指導者と記す)による論文作成の指導を対面とオンラインを併用して導入し、令和4年度初めてGI プレゼンテーションが行われた。

1. 課題研究と論文作成の課題とその解決策

拠点校のSGクラス(平成27年度～令和3年度)およびGIクラス(令和2年度～)では、3年次に論文作成を行っている。これは、SGクラスにあつては2年間、GIクラスにあつては3年間の課題研究(探究活動)の成果をまとめ、広く公開するためのものである。これまで、その成果を実績の一つとして進路実現に活用した生徒も少なくない。しかしながら、多くの論文の出来栄は、総じて質的には決して高いものになっていないという課題があった。そこで、探究活動へのモチベーションをさらに高め、能力伸長の可能性を引き出すために導入されたのが学外指導者による論文指導である。

生徒たちへの探究活動や論文作成の方法などの基礎・基本については、これまで通り拠点校の教員が指導を継続する。これに加え今後は拠点校外の指導者(学外指導者)からの、より専門的な意見や助言が、生徒たちの更なる意欲や能力を引き出してくれるものと期待している。また、拠点校内に留まらず外部へ向けた発信型の発表会も、同様のことを期待して積極的に行った。

2. 論文指導の形態

学外指導者には2～3か月に1回の頻度で来校していただき、担当する生徒(5～8人)に論文作成について指導・助言をしていただく。各回の流れは次の通りである。

- ①生徒はグループごとに会場教室へ移動
- ②与えられた課題についての生徒発表(課題は事前に与えておく。一人5～10分程度の発表。)
- ③発表について、学外指導者との質疑応答
- ④学外指導者による助言、次回の課題提示
- ⑤学外指導者による指導記録簿(指導カルテ)への記入

3. 指導計画と実践

① 学外指導者による第2回目の指導 日時：6月16日(木)14:00～15:40

内容(課題)は「仮説を立て、調査・実験方法を考える(調査実験開始)研究計画書の作成・発表」についてである。当日は2名の学外指導者が来校、1名はオンラインで参加された。3年GIクラスの生徒33名は5グループに分かれ、学外指導者に1グループずつ受け持ってもらい、残り2グループは拠点校職員が指導を行った。参加された学外指導者(氏名五十音順)は次の表の通りである。

(敬称略)

No.	指導者氏名	所属	役職	備考
1	小野 博	グローバル人材育成教育学会	理事長	運営指導委員
2	寺澤 洋子	中村調理製菓専門学校	特任教授	事業協働機関
3	中島 義和	広島女学院大学	准教授	検証委員 オンライン参加

グループでの指導後には、各指導者に指導記録簿(指導カルテ)にコメントを記入したものを後日返送していただき、生徒へのフィードバックや担当する教員の指導引き継ぎに役立てた。

② GI プレゼンテーション 日時：7月29日(金)13:00～16:00

当日は6名の学外指導者が来校され、3年GIクラスの生徒33名は3グループに分かれて発表した。参加された学外指導者(氏名五十音順)と生徒の発表タイトルを含む各会場のプログラムは次の表の通りである。

No.	指導者氏名	所属	役職	備考
1	岩本 仁	福岡成蹊学園	理事長	運営指導委員長
2	小野 博	グローバル人材育成教育学会	前理事長	運営指導委員
3	副島 雄児	九州大学	総長特別補佐	運営指導委員会 オブザーバー
4	寺澤 洋子	中村調理製菓専門学校	特任教授	事業協働機関
5	中島 義和	広島女学院大学	准教授	検証委員
6	山下 浩之	岡山理科大学	講師	検証委員

(敬称略)

[会場①] AL ルーム

[指導委員] 岩本 仁、小野 博、副島 雄児

[生徒]

氏名	タイトル
1 石田 桜子	食と照明
2 高橋 杏佳	我が家のフードロスの取り組み
3 宇野 美空	にがりを用いての人工的な超硬水の作成とその検証
4 吉田 起子	食物アレルギー対応の代替メニュー～結婚式場での工夫～
5 城戸 智映	新体操選手のスタイルづくりについて
6 重留 小春	賞味期限表示を見ることによる味覚の変化
7 吉田 心鈴	見た目と食欲の関係性～お皿の大きさ～
8 間瀬 花怜	アメリカにおける味噌の価値観
9 加賀田 光海	ph値と水の硬度によるバタフライピーの色の変化
10 大賀 曜	音が及ぼす味覚への影響

11 安永 朱里	人間の味覚 ～視覚が与える味覚への影響および味覚の感じ方について～
12 永蔭 華子	菜食主義と競泳選手

[会場②] 講義室H

[指導委員] 中島 義和

[生徒]

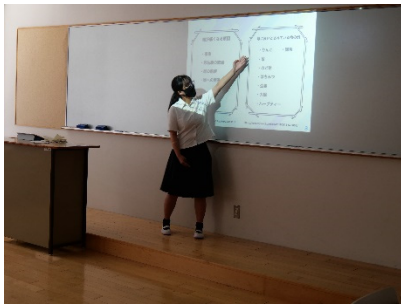
氏名	タイトル
1 淡島 涼心	和菓子と世界のスイーツ～季節との関連性についての考察～
2 大村 綾香	どれが一番伸びる!?!～再生栽培～
3 富田 こころ	カフェインと睡眠
4 部原 小晴	喉ケア食材の提案～りんごの効果を中心に～
5 池田 実生	世界の食生活と健康
6 中島 碧	ネガティブバイアスにおける食べ物の好き嫌いの 解決策の考察
7 井上 きらり	JKには欠かせないスタバ
8 平井 花季	駄菓子屋が子どもたちに与える影響と駄菓子屋を残す方法の提案
9 木村 仁咲	日本と世界の食品照射
10 小牧 いずみ	日英における食のオノマトペに関する表現
11 伊藤 若葉	中学生における嫌いな食べ物と給食の食べ残しの関連

[会場③] 中学理科室

[指導委員] 寺澤 洋子、山下 浩之

[生徒]

氏名	タイトル
1 宮房 安梨	朝食欠食とその影響
2 本山 世奈	ヴィーガンとベジタリアンの文化はなぜ日本に遅れて やってきたのか
3 金 攸怡	なぜ「混ぜる」のかー日本と韓国の食文化の違いー
4 諫元 このか	低糖質は本当に“低”糖質なのか
5 宮内 愛梨	音楽は植物の成長を本当に促進させるのか?
6 畑中 杏月	太る食べ物と太らない食べ物の違い
7 早瀬 友里	見た目において白いお皿は有能なのか
8 奥 和	お母さんがこれなら作りたいと!と思える離乳食とは ～イギリス発のBLW法～
9 大崎 日陽	調味料と着色料の相性
10 李 曜霊	中華料理と中国料理の違い
11 大石 愛実	離乳食～時代背景とインスタント～



4. 最後に

学外指導者からいただいたフィードバックをもとに研究内容をさらに深化させ、論文にまとめた。研究内容を論文として説得力のある文章にする工程は生徒たちにとってとても難しいものを感じられたようである。しかし、論文作成を含む一連の探究活動は、自分の興味関心を見出すこと、物事に疑問を抱き深掘りすること、考えを言葉にして表現することにつながり、生徒一人ひとりの進路実現の一助になったと確信している。

V-(i)-10	企業コラボの実施(GI 探究)	
2022. 10. 28～2023. 0314	拠点校：2年GI クラス	

昨年度に9つの商品案から2度の選考を経て、生菓子「みつっとカヌレ」と焼き菓子「かんしゃもじサンド」の2つの商品案が試作検討対象に選ばれた。最終的には、「みつっとカヌレ」のみの販売となった。実際に企画から販売まで生徒主体で企業コラボを実現できたことは、生徒の成長にとって貴重な経験となった。目的と実施計画は以下の表に挙げた通りである。

1. 目的

探究授業において、産学連携の一環として企業とコラボして商品を開発する取り組みをスタートした。「商品の考案から販売までのプロセスを実体験しながら学ぶ」ことをモットーとして、コンセプトから商品開発、販売に至るまで全て生徒主体で行うなかで、協働力やイノベティブな素養を身につけることを目的とした。

2. 実施計画

① 10月28日	商品開発導入(企画の趣旨を生徒・探究科教員で共有)	1年GI 探究
② 11月4日	商品企画書作成①(企業調査、商品案の検討、企画書作成)	1年GI 探究
③ 11月11日	商品企画書作成②(企画書仕上げ、プレゼン準備)	1年GI 探究
④ 11月18日	商品企画書プレゼン①(校内探究教員向け)	1年GI 探究
⑤ 12月2日	商品企画書プレゼン②(石村萬盛堂様・担当者向け)	1年GI 探究
⑥ 2月8日	商品企画・1次選考結果発表(9つの商品企画から5つを選抜)	1年GI 探究
⑦ 2月10日	商品企画・2次選考に向けたリサーチ	1年GI 探究
⑧ 2月17日	商品企画・2次選考結果発表(2つの商品企画を選抜)	1年GI 探究
⑨ 2月24日	商品の試作・広報計画作成	1年GI 探究
⑩ 4月19日	商品仕様書作成	2年GI 探究
⑪ 4月26日	商品仕様書発表	2年GI 探究
⑫ 5月24日	企業担当者からの商品仕様書への助言・フィードバック	2年GI 探究
⑬ 5月31日	商品開発PR方法の検討①	2年GI 探究
⑭ 6月7日	商品開発PR方法の検討②	2年GI 探究
⑮ 6月14日	商品開発PR案を石村萬盛堂様へ提出	2年GI 探究
⑯ 12月6日	企業担当者来校・商品の試食・改善案のディスカッション)	2年GI 探究
⑰ 2月28日	文化祭・企業店舗での販売に向けた準備	2年GI 探究
⑱ 3月12日	企業とのコラボ商品「みつっとカヌレ」の販売(文化祭)	2年GI 探究
⑲ 3月14日	企業とのコラボ商品「みつっとカヌレ」の店頭販売(石村萬盛堂)	2年GI クラス 希望者 20名

3. 実践の詳細

(1) GI クラス(1 年次)

GI クラスによる企業コラボによる商品開発は、企画と主旨を生徒および探究科教員で共有するところから始まった。グループに分かれて、石村萬盛堂様の歴史や商品のラインナップなどを調査し、グループに分かれて商品案を検討した。ペルソナ設定や商品のコンセプト、原材料などを考慮し、企業担当者の前で 9 つのグループがそれぞれ独自の商品企画案のプレゼンテーションを行った。5 つの商品企画案が 1 次選考を通過し、2 次選考では生菓子として「みつっとカヌレ」、焼き菓子として「かんしゃもじサンド」が選抜された。

■ 商品企画「みつっとカヌレ」(生徒が実際にプレゼンに使用したデータ)



(2) GI クラス(2 年次)

2 年次では、商品仕様書を作成し、企業担当者にプレゼンテーションするところから始まった。その後、商品を PR する方法として、TV や新聞広告、看板、ポップやディスプレイなどの仕掛けについて学んだ。

商品の PR 方法の検討と同時並行で、商品の試作と改善が進められた。この段階で、「かんしゃもじサンド」の実現が難しい状況になり、「みつっとカヌレ」を販売することに決定した。試食と改善を重ねて、ついに商品が完成し、最終的には校内の文化祭と石村萬盛堂様の店舗で販売することができた。

① 販売日・販売場所

- ・ 2023 年 3 月 12 日(日) 中村学園女子高等学校 文化祭
- ・ 2023 年 3 月 14 日(火) 石村萬盛堂様 4 店舗
(本店、いしむら大橋本店、セ・トレボン平尾店、セ・トレボン キャナルシティ 博多店)

② 販売価格：2 個入 960 円、3 個入 1,440 円、5 個入 2,400 円 (すべて税込価格)

▶ みつっとカヌレ

商品名の「みつっと」には、コロナ禍でも人々の心は密にという生徒の発想から、「距離を密(蜜)に

人々の心を繋げる」という想いが込められている。商品の主な特徴は以下の通りである。

- ・香ばしく甘い香りが漂い、もちっとした食感。
- ・地産地消にこだわり、生地には「八女茶」を使用。
- ・風味豊かに、かつ上品な味わいに仕上がっている。
- ・カヌレには、石村萬盛堂様の「塩豆大福」に使用する、塩豆と餡子をあしらっている。
- ・豆を黒蜜のジュレでコーティングし、香り、甘さ、食感などにリズム感が加えられている。



4. 振り返り

産学連携の一環として、石村萬盛堂様とコラボレーションして、3月14日のホワイトデーに向けて始まった企画であったが、生徒の成長にとって素晴らしい機会となった。いくつか例を挙げたい。

- ・石村萬盛堂様より、製菓業界の現状や市場変化、商品のブランディング・PRなどを学びながら、実際に企画から販売まで携わることで、経済や流通の仕組みへの興味が向上しただけでなく、協働力や創造力も磨くことができた。
- ・地元経済や環境問題にも配慮して「地産地消」にこだわり、原材料に地元の食材を使おうとするグループが多かった。カヌレでは地元の「八女茶」を使用しているが、企画段階では地元の「あまおう苺」を使った別のフレーバーも考えていた。他の商品企画の中にも、このような視点が見られた。
- ・生徒たちはオリジナリティやSDGsなどの付加価値をつけようと努力していた。「売上金の一部国連 WFP 等に寄付してはどうか?」「発展途上国の人々の貧困に目を向けるためにフェアトレード素材を使うことはできないか?」など、今後に生かしたいアイデアが数多く生まれた。

このように、商品開発を通して生徒たちが得たものは大きい。また、広報活動の効果もあり、毎日新聞にも活動の様子が掲載された。文化祭における販売では、実質販売時間は1時間半程度で400個のカヌレが完売した。また、選ばれた20名の生徒が、石村萬盛堂様の店舗販売にも参加させていただいた。お客様にカヌレを買っていただくたびに、生徒の笑顔も増え、積極的に振る舞う姿を見ることができた。

今回の経験を通して、商品の考案から販売までのプロセスを実体験しながら、食を通して経済について学ぶ中で、生徒たちは自らの創造力、行動力、協働力で、企画が実現すること、人々や社会にも変化や影響を及ぼすことを学ぶことができた。



商品企画のプレゼンテーション



商品の詳細に関する打ち合わせ



商品の試食



文化祭での販売①



文化祭での販売②



店舗での販売①(石村萬盛堂 本店)



店舗での販売②(キャナルシティ博多店)





店舗での販売③(いしむら大橋本店)

V-(i)-11	第1回GI講演(グローバル講演)	
2022. 10. 17(月) 9:45~10:30	拠点校：講堂	

高校1年生は「食と社会文化」「食と栄養」「食と経済」「食と環境」の4分野の観点から、グローバル探究の授業を全生徒受けている。1学期は「食と社会文化」「食と栄養」の2つの分野に関して探究をすすめた。9月に学年行事であるグローバル・キャンパスを終えた後、「食の栄養」に関する実践例として、「食と経済」「食と環境」の予習として株式会社ファンケル様からSDGsについての講演を実施していただいた。

化粧品事業や健康食品事業を展開しているファンケル様の会社紹介のなかで、「創業理念」や「経営理念」を示していただき、「世の中の『不』の解消を目指し、安心・安全・やさしさを追求する」という目標からSDGsに会社を挙げて取り組んでいるという説明をいただいた。その後、SDGsについての基本的な情報と、ファンケルグループとしてSDGs「2. 飢餓をゼロに」SDGs「3. すべての人に健康と福祉を」の2つに取り組んでいることを紹介していただいた。続けて、世界中で食に困っている人々が多くいる一方で日本が食料を大量に廃棄していることや日本の若者がかかえる栄養問題(栄養過多、無理なダイエット、栄養不足)について説明をいただいた。とくに日本の栄養問題については「新型栄養失調」とよばれ、ファンケル様はこの課題に対して製品等を通じた解決に取り組んでいるということについては生徒も大きな関心をよせていた。また、女性従業員の活躍や教育活動、災害支援等活動が多岐に及んでいることも大きな学びとなった。

<タイムテーブル>

関連する SDGs	 
9:45~9:50	ファンケル会社紹介
9:50~9:53	SDGs とは? ファンケルのサステナブル宣言
9:53~10:15	食料格差 食品ロス問題 【ディスカッション】: 食品ロスについて考えよう! 若者の栄養課題
10:15~10:20	ファンケルの取り組み 講座のまとめ(SDGs と自分たちにできること)
10:20~10:30	質疑応答 アンケート

[生徒のアンケート回答例]

- ・現代の若者には栄養不足や無理なダイエットによる体調不良などが多く起こっていること、新型栄養失調があることを初めて知りました。自分の知らないことから、役に立つ情報まで幅広く知れてとてもいい機会になりました。

- ・肥満の原因が、食べ過ぎだけでなくお金がない故に添加物のたくさん入ったものを食べざるを得ないからだということを初めて知りました。
SDGs は、最近よく聞くようになった言葉ですが自分から積極的に調べることがなかったので、とても良い機会になりました。
- ・健康的な体を作るためには適度な栄養をとる必要があると改めて感じた。食べ物を残さないように食べることや多く買いすぎないことが SDGs に繋がると知ったので、まずは簡単なことから始めたいと思った。
- ・講演を聞いて最初は SDGs とどうゆう関係があるのかなって思っていたけど一人一人の問題だし世界の達成する目標に関係ない人とかはいないんだなと思いました！これから自分で身近にできるものから貢献していけたらいいなと思いました！
- ・お話を聞きながら自分は新型栄養失調かもしれないと思いました。これからは、バランスの良い食生活を心がけるようにします。また、昨日お話いただいたことを学校の SDGs 学習に繋げていこうと思います。
- ・SDGs に対して色々な取り組みをしていることがわかった。自分の出来ることを考え生活の中で実践していきたいと思う。消費者の気持ちになって商品を開発するよう、たくさん研究していることがすごいと思った。ひとのことを考えられるような人になりたいと思った。



V-(i)-12	TOTO 株式会社とのセッション	
2022. 6. 15(水) 9:00~10:40	拠点校 : AL ルーム	

GI クラスでは、GI 探究や英語探究において国内外の諸問題について SDGs と結び付けながら理解や関心を深めてきた。また、学んだことを自分の中だけに留めずに、家庭でも話す機会を持つようになった。すると、TOTO 株式会社勤務の保護者から「公共の場におけるトイレ空間の問題—男女共用トイレの普及のために学生と意見交換をしたい」という依頼をいただいた。この問題は SDGs 目標 5 (ジェンダー平等を実現しよう)・6 (安全な水とトイレを世界中に)・10 (人や国の不平等をなくそう)につながる問題を考えるよい機会だと判断し、実施の運びとなった。また、セッションの事前事後に同じ内容のアンケートを実施し、研修の効果を考察した。研修内容の概要は下記の通りである。

1. 研修内容

- ① SDGs、性的マイノリティ セミナー(動画を活用)
- ② グループディスカッション

テーマ「公共の場におけるトイレ空間～男女共用トイレ；理想とするパブリックレストルームの要素とは」

2. 研修事前／事後の意識の変化

設問 1：今後、学校でも男女共用トイレが必要だと思いますか。

→ 事後、必要だと考える生徒が大幅に増加

設問 2：男女共用トイレを設置する場合、どんな場所なら使いたいと思いますか。

→ 事前事後の回答数を比較すると、普段の教室前と移動教室前の回答数が増えているのは、男女共用トイレを特別ものと捉える必要がないという考えの変化だと思われる。

設問 3：SDGs の取り組みとして優先順位をつけるとき、下の 5 つの中で最優先(1 番目)するものはどれですか。(全体の傾向)

→ 優先順位に大きな変化は見られなかったが、「多様性配慮、ジェンダー平等」がやや高まる結果が見られた。

設問 4：SDGs の取り組みとして優先順位をつけるとき、下の 5 つの中で 2 番目に優先するものはどれですか。

→ バリアフリー配慮の割合が大きい。最優先事項と合わせて、ジェンダーも含めた多様性(インクルーシブとダイバーシティ)を重要視していることがうかがえる。

設問 8：ジェンダー平等の取り組みとしてトイレのあり方はどのような形がいいと思いますか。

→ トイレの利用者が自由に選択できるトイレを望んでいると考えられる。

設問1 今後、学校でも男女共用トイレが必要だと思いますか？



設問2 男女共用トイレを設置する場合、どの場所なら使いたいと思いますか？ (複数回答可)



設問3 SDGsの取り組みとして優先順位をつけるとき、下の5つの中で最優先(1番目)するものはどれですか。



設問4 SDGsの取り組みとして優先順位をつけるとき、下の5つの中で2番目に優先するものはどれですか。



設問8 ジェンダー平等の取り組みの一つとしてトイレのあり方はどのような形がいいと思いますか？



これまでにSDGs学習の際にジェンダー平等、LGBTQについても学習してきたが、トイレという身近な問題であっても考えたことのないトピックに触れることで、学習後に意識は大きく変化したと言える。



V カリキュラム開発 - ii 国際的な学び

V-(ii)-1	GI 留学プログラムの開発・実施	
	2023. 2. 1～4. 2	拠点校、カナダ

本プログラムは、GI1 年生希望者を対象に実施するターム留学である。海外の現地校に通いながらホームステイを体験し、異文化理解や多様性受容力を深めるとともに、英語を実践的に使用し運用能力・コミュニケーション力を高めることを目的とする。新型コロナウイルス感染拡大の影響により初年度(2020 年度)は実施中止となり、昨年度(2021 年度)が初めてのプログラム実施となった。今年度は2 回目となり、GI1 年生 31 名中 18 名が昨年度に続きカナダ・トロント近郊へ渡航した。概要は下記のとおりである。

[プログラム名] GI 留学

[対象] GI1 年生希望者 (31 名中 18 名参加)

[留学先] カナダ・トロント近郊

[留学期間] ①1 か月コース 令和 5 年 2 月 1 日～2 月 27 日(5 名参加)

②2 か月コース 令和 5 年 2 月 1 日～4 月 2 日(13 名参加)

[渡航までのスケジュール]

日付	名称・項目	内容	場所
2022 年 7 月 9 日(土)	第 1 回 GI 留学プログラム説明会 (GI クラス 1 年生徒・保護者希望者対象)	留学のメリット、プログラム概要、申込書記入要領、留学支援金の説明など	視聴覚室
9 月 3 日(土)	第 2 回 GI 留学プログラム説明会 (参加生徒・保護者対象)	アプリケーションフォーム、必要書類に関する説明など	視聴覚室、 オンライン併用
11 月中	第 3 回 GI 留学プログラム説明会 (参加生徒・保護者対象)	渡航準備についての説明など	オンデマンド配信
2023 年 1 月 21 日(土)	第 4 回 GI 留学プログラム説明会 (参加生徒・保護者対象)	渡航に向けての最終確認など	視聴覚室、 オンライン併用

[留学プログラム行程表]

○ 1か月コース

月日曜	発着地／滞在地	現地時間	交通機関	スケジュール	食事
2023年2月1日(水)	福岡空港 羽田空港 成田空港 トロント	11:50 13:25 14:30 15:45 18:35 16:35 18:00	NH250 バス AC010 バス	福岡より羽田へ バスで成田空港へ移動 成田にて出国手続き、トロントへ移動 到着後バスで、滞在先へ移動 ホームステイ先へ移動 【ホームステイ】	昼：各自 夕：機内
<p>◎ 2月6日から現地校での学習予定 ・ 地元のカナダ人学生と同様、地元の学校に通います。</p> <p>◎授業：月曜日～金曜日 滞在期間中4つの科目のクラス</p> <p>◎単位認定：学期全体に出席していないため、正式なコース単位は取得できません。</p> <p>◎ホームステイ：シングルプレイスメント 食事は朝・昼・夕 ☆1日3回の提供</p> <p>◎期間中の祝日【予定】下記は学校がお休みになります。 2月6日現地校授業開始 2月20日：ファミリーデー(祝日) 3月13日～17日：春休み 4月7日～10日：イースターの休み</p> <p>【予定エリア】 ロンドン地区：トロントから約2時間のエリアです。</p>					ホストファミリー 朝・昼・夕
2月26日(土)	トロント	13:30	AC 009	ホストファミリーと別れ、専用車にて空港へ 空港到着出国手続き・ 搭乗手続き後 空路羽田へ 【機内】	

2月27日(日)	成田空港着 成田ホテル	16:55 18:00 夕刻		成田空港到着 入国手続き・搭乗手続き後、成田のホテルへ	朝:機内 昼:機内 夕:各自
2月28日(月)	成田空港 羽田空港 福岡空港	10:00 11:30 12:30 14:35	リムジン NH253	成田空港よりリムジンバスで羽田空港へ 羽田空港で搭乗手続き福岡へ。	朝:ホテル 昼:各自
◎発着時間、交通機関等に変更になる場合があります。 航空機: AC=エアカナダ利用予定 NH=全日空					

○ 2か月コース

日次	月日曜	発着地/滞在地	現地時間	交通機関	スケジュール	食事
1	2023年 2月1日 (水)	福岡空港 羽田空港 成田空港 トロント	11:50 13:25 14:30 15:45 18:35 16:35 18:00	NH250 バス AC010 バス	福岡より羽田へ バスで成田空港へ移動 成田にて出国手続き、トロントへ移動 到着後バスで、滞在先へ移動 ホームステイ先へ移動 【ホームステイ】	昼:各自 夕:機内

<p>◎ 2月6日から現地校での学習予定 ・ 地元のカナダ人学生と同様、地元の学校に通います。 ◎授業:月曜日～金曜日 滞在期間中4つの科目のクラス ◎単位認定:学期全体に出席していないため、正式なコース単位は取得できません。 ◎ホームステイ:シングルプレイスメント 食事は朝・昼・夕 ☆1日3回の提供 ◎期間中の祝日【予定】下記は学校がお休みになります。 2月6日現地校授業開始 2月20日:ファミリーデー(祝日) 3月13日～17日:春休み 4月7日～10日:イースターの休み 【予定エリア】 ロンドン地区:トロントから約2時間のエリアです。</p>					ホストファミリー 朝・昼・夕
4月1日 (土)	トロント	13:45	AC 009	ホストファミリーと別れ、専用車にて空港へ 空港到着出国手続き・ 搭乗手続き後 空路羽田へ <p style="text-align: right;">【機 内】</p>	
4月2日 (日)	成田空港 着 成田ホテル	15:50 17:30 夕 刻		成田空港到着。 入国手続き・搭乗手続き後、成田のホテルへ	朝:機内 昼:機内 夕:各自
4月3日 (月)	成田空港 羽田空港 福岡空港	10:00 11:30 12:30 14:25	リムジンバス NH253	成田空港よりリムジンバスで羽田空港へ 羽田空港で搭乗手続き福岡へ。	朝:ホテル 昼:各自
◎発着時間、交通機関等に変更になる場合があります。 航空機:AC=エアカナダ利用予定 NH=全日空					

昨年度はクラス 41 名中 13 名 (30%) が参加し、帰国後 (高校 2 年生時) に「留学報告会」を行い、留学の成果や今後の展望についてプレゼンテーションを行った。その際 1 年生も参加し、会終了後に 2 年生への相談コーナー等も設けた。留学促進のきっかけとなり、今年度はクラス 31 名中 18 名 (60%) が渡航し、海外経験を深めることができた。次年度以降も報告会を継続するとともに、留学内容の見直しも検討していきたい。

V-(ii)-2	留学生の受け入れ
2022. 6. 25(土)～2022. 3. 11(土)	拠点校

2018年度より5か年プロジェクトで開始した、文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」は最終年度の5年目を迎え、本校では7カ国から7名の5期生を迎え入れた。6月25日より3か国(インド・インドネシア・スリランカ)から3名、7月2日より4か国(カンボジア・ネパール・マレーシア・ラオス)から4名を受け入れ、3月帰国時までの約8か月間、通学をしながら寮生活を体験した。

学校生活においては高校1年のGIクラスに5名、高校2年のGIクラスに2名所属し、授業や清掃、学校行事等の活動に参加した。クラス以外にも中学探究科、高校一貫ACクラス、高校1・2年生GI探究、英語探究(高校1年GIクラス)に参加し生徒との交流を積極的に行った。配属されたクラスでは、生徒と同様の授業を受け、理科実験、調理実習、華道や茶道、浴衣製作等多くのことに参加し、たくさんの生徒と関わることができた。諸活動を通して留学生は日本文化や習慣等を肌身で感じ、より深く日本への理解を深めた。また、本校生徒にとっても英語でのコミュニケーションや様々な国の文化等を知ることができ、双方にとって異文化交流・理解を図る機会になった。

長期休暇中には、全校生徒からステイ先を募集し各家庭で夏休み(2022年8月5日～8月15日)、冬休み(12月27日～2023年1月5日)の間ホームステイを体験した。年末年始には各家庭で餅つきや初詣など伝統的な行事を体験し、たくさんの日本の文化にふれることができた。また留学生は自国の料理を作ってステイ先にふるまうなど、双方にとって異文化交流をするよい機会となった。

本プロジェクトの開始以降、本校では5年間で15カ国・40名の留学生を受け入れ、目的である「日本とアジアの高校ネットワークの構築、互いの国に精通したリーダー育成」の実現につながる有意義な活動となった。

1. 概要

アジア高校生架け橋プロジェクトの留学生受け入れ

[日程] ① 令和4年6月25日(土)～令和5年3月11日(土)

※3カ国：インド・インドネシア・スリランカ

② 令和4年7月2日(土)～令和5年3月11日(土)

※4カ国：カンボジア・ネパール・マレーシア・ラオス

[受け入れ人数] 7名

[地域] インド、インドネシア、カンボジア、スリランカ、ネパール、マレーシア、ラオス

[対象] 高校1年GIクラスに5名・高校2年GIクラスに2名配属

2. 実践の詳細

(1) 主な活動実績と内容

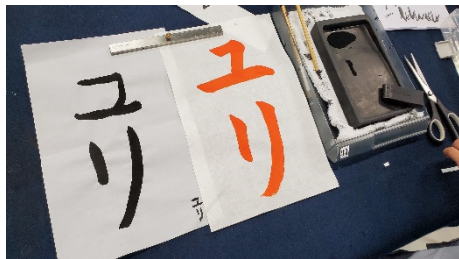
- ① 7/4(月)運動会の結団式にて全校生徒へ紹介
- ② 7/12(火)・7/13(水)運動会リハーサル・運動会に参加
- ③ 8/29(月)配属クラスにて授業参加開始

④ 9/1(木)～3/9(木)日本語レッスン(週2コマ実施)

日常会話を中心に週2時間の日本語レッスンを実施した。授業に加えてホームワークとして問題集や漢字の書き取り、日本語での日記などに毎日取り組んだ。ホームステイ前には日本の生活習慣や会話表現なども教え、実践的に日本語が身に付くよう工夫した。全員が受験した日本語能力検定試験では、5級は全員取得、4級を取得した留学生もおり、一定の成果をみせた。

⑤ 華道・茶道・書道体験

本校の授業で取り入れている「華道」「茶道」「書道」など日本の伝統文化を体験。華道ではクリスマスをテーマにした生け花、茶道では和室の作法・お茶のたて方、書道では刻字・掛け軸製作などをおこなった。日本のわびさびなどを知る良い機会となった。



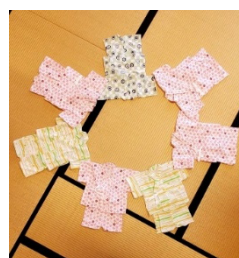
⑥ 浴衣制作・着付け体験

生地選びから裁断、縫製まで、留学生ひとりひとりで実施。初めてミシンを使う留学生も多く、戸惑いもあったが次第に慣れ全員が完成させた。本年度も赤ちゃん用の甚平も作った。「将来、自分の子どもに着せたいです。」と笑顔で話してくれた。また、完成した浴衣で、着付け、帯結び等

の練習を行い、ほとんどの留学生が一人で着ることができるようになった。留学生にとって日本文化への興味関心が深まるよい機会となった。

⑦ 調理実習

留学生が、実習で使用する食材すべてを食することができる回のみ参加した。和食の献立では、味が薄かったようで、各自スパイスを利かせた味にして食していた。お菓子作りはどれも自国に帰っても作れる材料だったので、帰ってからも作れるようにと、意欲的に参加していた。



⑧ 感謝の会

ホストファミリーへの感謝の意を伝える場として、「感謝の会」を開催した。企画・運営は留学生主体で行い、当日は、自分たちで作った浴衣を各自で着つけホストファミリーを迎えた。



(2) 活動実績

	月		火		水		木		金		土	
	1の5	2の6	1の5	2の6	1の5	2の6	1の5	2の6	1の5	2の6	1の5	2の6
1	LH R	LH R	日本語レッスン		国文	化基	日本語レッスン		国文	古典	探究	探究
2	G探	数学	国現	書道	生物	英コ	音楽	英コ	英コ	英探		
3	数学	情報	地総		公共	現文	浴衣作り 被服実習室		英論		英コ	英コ
4	音楽	古典	体育	現文	保健	自習	被服実習室		数学	体育	英論	英表
5	家庭	家庭	書道	英表	英論	数学	体育	英表	地総	数学		
6				GI探	数学	英表	公共	世史	情報	現文		
7	歴総	英コ	数学	GI探	国現	古典	英コ	体育	物理	世史		

年	月	日	曜	主な活動内容	対象
2022	7	12	火	運動会リハーサル	留学生・全校生徒
2022	7	13	水	運動会	留学生・全校生徒
2022	7	16	土	歓迎会	留学生・1の5・2の6
2022	8	30	火	浴衣製作①	留学生
2022	9	1	木	浴衣製作②	留学生
2022	9	5	月	調理実習①(マドレーヌ2種)	留学生・1の5
2022	9	13	火	グローバルキャンパス	留学生・高校1年
2022	9	14	水	グローバルキャンパス	留学生・高校1年
2022	9	15	木	浴衣製作③	留学生
2022	9	16	金	芸術鑑賞	留学生・全校生徒
2022	9	22	木	浴衣製作④	留学生
2022	9	30	金	RKB イベント参加	留学生・1の5
2022	10	1	土	クラスマッチ	留学生・高校1年
2022	10	3	月	調理実習②(ぶりの照り焼き、卵焼き、サツマイモご飯)	留学生・1の5
2022	10	6	木	浴衣製作⑤	留学生
2022	10	13	木	浴衣製作⑥ ラブアースクリーン運動	留学生 留学生・高校1年
2022	10	20	木	浴衣製作⑦	留学生
2022	10	27	木	浴衣製作⑧	留学生
2022	10	31	月	浴衣製作⑨	留学生
2022	11	7	月	調理実習③(クリスマスケーキ)	留学生・3の3
2022	11	17	木	調理実習④(リンゴとサツマイモのマフィン)	留学生・1のA

2022	11	24	木	華道体験	留学生
2022	12	5	月	調理実習⑤(雑煮)	留学生・3の3
2022	12	7	水	太宰府についてのプレゼンに参加	留学生・3のAB
2022	12	9	金	茶道体験	留学生
2022	12	15	木	調理実習⑥(魚のホイル焼きとかきたま汁)	留学生・1のA
2022	12	17	土	WWL 報告会	留学生・全校生徒
2023	1	19	木	赤ちゃん甚平製作	留学生
2023	2	9	木	食のサミットの映像制作	留学生
2023	2	17	金	浴衣着付け	留学生
2023	2	20	月	書道作品完成	留学生
2023	2	21	火	感謝の会	留学生・HS 家族
2023	3	6	月	AFS 終了式	留学生
2023	3	6	月	調理実習⑦(創作マフィン)	留学生・1の5
2023	3	11	土	食のサミットの映像のみ参加	留学生・全校生徒

※留学生と拠点校生徒との協働活動や学校行事への参加の詳細については、「V-1. 探究的な学び」を参照。

3. 転入生の受け入れ

連携校である信男教育学園上海文来高校(中華人民共和国)より、平成 30 年度より転入生を受け入れている。今年度は9月27日から生徒1名を高校2年生に配属した

V-(ii)-3	夏期海外研修
2022. 6. 6 (月) 16:30~17:30	拠点校：聴覚室

夏期海外研修は全校生徒を対象とし、夏休み期間を利用して異文化理解・交流、英語力向上の機会を提供することを目的とした研修プログラムとなっている。昨年度初めて実施をし、今年度は2回目の説明会を行った。説明会では、教育旅行会社と拠点校担当者により選定した研修プログラムを各社が保護者・生徒向けに説明(各社10分)し、説明会後は、旅行社毎にブースを設けて相談ができるようにした。参加者は、生徒32名(中学生6名・高校生26名)、保護者24名であった。

以下は、各社からのプランの概略である。

旅行社	プラン名	地域	主要目的	日数
A社	さあ、行こう。家から世界最前線へ。 (バリ研修)	インドネシア	地域課題解決	9日間
B社	国内 English camp in 福岡	福岡県	英会話力向上、 異文化理解	3日間
C社	ハウステンボス 英語研修	長崎県	英会話力向上	2日間

各研修へA社3名、C社が10名の生徒が参加した。昨年度は海外研修が実現できなかったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響が徐々に緩和される中で、今年度は渡航が可能となった。A社のプログラムでは、現地(インドネシア)の地域課題を実地で学び、大学生を含む参加者と協力していく中で、課題発見・解決力や協働力を養うことができた。また、C社のプログラムでは「英語に親しむ」ことを目的として、研修先でネイティブスピーカーと交流しながら英語を実用的に使用し、英語運用力・異文化理解を深めた。



V カリキュラム開発 - iii 国際会議の開催

V-(iii)-1	「食のサミット」の開催
2022. 3. 10(金)～3. 11(土)	拠点校：講堂、視聴覚室、大会議室、オンライン(ZOOM)

今年度も国際会議「食のサミット」を3月に開催した。昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面参加が本校・高知国際高校・京都先端科学大学附属高校の3校であり、中村学園三陽高校と海外連携校2校はオンラインでの参加となった。また、マレーシアの連携校は学校行事等の折り合いがつかずに今回の参加は見送られた。しかし、対面とオンラインを併用するハイブリットの国際会議の中で、世界の高校生たちが1つのテーマのもとで熱い議論を交わした。以下、その概要を記す。

1. 「食のサミット」の目的と位置づけ

各国からの代表チームとともに地球規模の「食」の課題に関する課題・解決策を議論し、提言書としてまとめる。例年は、サミット後に提言書を国連WFP協会へ提出して取り組みを世界へ発信していたが、本年度は国連WFP協会事務局長が参加されたため、代表生徒が直接提出する運びとなった。

本校WWL事業で最大の行事であり、国内外の中高生による「食」に関する課題解決策の策定と提言の機会とする。使用言語はすべて英語とする。(※ポスターセッションを除く)

2. 日程

- ▶ 食のサミット1日目(ステージ発表・サミット)：令和5年3月10日(金)10:00～14:30
- ▶ 食のサミット2日目(共同宣言)：令和5年3月11日(土)10:00～11:00

※ 食のサミットの前に、事業拠点校が主催したオンラインでの事前会議を開催し、各校の代表チームが参加した。日程は次のとおりである。

- ・令和5年2月28日(火)16:00～17:00 拠点校、海外連携校2校
- ・令和5年3月2日(木)14:30～16:00 拠点校、高知国際高校、京都先端科学大学附属高校

3. テーマ

「すべての人に安全な食を(Safe Food for All People)」

※ SDGs 2番「飢餓をゼロに」、12番「つくる責任 つかう責任」、13番「気候変動に具体的な対策を」など、多くのSDGsにつながる「食」に関わる諸問題とその解決策を議論する

4. 参加チーム

- ▶ 食のサミット1日目(ステージ発表・サミット)

拠点校、中村学園三陽高等学校、京都先端科学大学附属高等学校、高知国際高等学校、モンゴル84th学校、ウズベキスタン・ライシーアム高校 (各学校から代表1チーム、計6チーム)

- ▶ 食のサミット2日目(共同宣言)

拠点校、京都先端科学大学附属高等学校、高知国際高等学校

5. サミットのスケジュール

時刻	内容[場所]	
1日目：3月10日(金) ※参加者：中学、高校1・2年、本選出場チーム、ご来賓(WWL関係者)		
	代表チーム	参加者(教職員含む)
8:30	国内連携校チームは各自で本校へ 本校到着後、スタンバイ[講堂]	8:00 チーフ集合
		8:30 職員朝礼
		8:50 LHR[各教室]事前アンケート回答
		9:30 講堂入場
9:50	スタンバイ完了	9:50 スタンバイ完了
10:00	「食のサミット」開会	
	《オープニング》	
	①校長挨拶 ②生徒会長挨拶 ③来賓紹介 ④注意事項など	
10:15	《コンテスト本選》開始	
	○チーム説明	
10:20	○前半グループ3チーム(高知国際・モンゴル・本校)： 学校の紹介(1分)+主張プレゼン(5分)×3チーム	
10:38	休憩	
10:48	後半グループ3チーム(中村学園三陽・ウズベキスタン・京都先端科学大附)： 学校の紹介(1分)+主張プレゼン(5分)×3チーム	
	休憩・移動 ※この間代表チーム記念撮影	
11:16		
	代表チーム	ポスターセッション
	昼食[カフェテリア]・昼休み	ポスターセッション開始
12:30	国内連携校は会場に集合 [視聴覚室]	11:30 第1クール 発表5分/質問1分/付箋記入2分/貼付2分
13:00	「食のサミット」 開会・活動説明 → 全体会 → → 分科会 → 全体会	11:45 第2クール 発表5分/質問1分/付箋記入2分/貼付2分
14:30	サミット終了	12:00 第3クール 発表5分/質問1分/付箋記入2分/貼付2分
14:30	国内連携校で提言書作成	12:15 第4クール 発表5分/質問1分/付箋記入2分/貼付2分 (12:30分ころ終了予定)
16:00	リハーサル[講堂]	12:30 教室復元、その後昼休み
17:00	リハーサル終了予定、連携校見送り	
	※実行委員最終打ち合わせ	13:30 2-6係生徒はポスターセッションの内容をまとめ、翌日の「振り返り」の準備を行う。

◆運営委員会兼AL ネットワーク連絡会の動き◆			
		11:30	ポスターセッション参観
12:00	昼食[大会議室]		
13:00	昼食後、サミット参観		
13:30	運営委員会兼ALネットワーク連絡会		
14:30	終了		
2日目：3月11日(土) ※参加者：中学、高校1・2年、本選出場チーム、 ※一般来賓はZoomによる視聴			
代表チーム		参加者(教職員含む)	
		8:00	チーフ集合
		8:30	職員朝礼
9:00	国内連携校チームは各自で本校へ 本校到着後、スタンバイ[講堂]	8:50	LHR[各教室]
		9:30	講堂入場
9:50	スタンバイ完了	9:50	スタンバイ完了
10:00	《オープニング》 ○司会よりアナウンス(3.11震災黙祷含む)、内容説明、注意事項など		
10:05	《アジア架け橋留学生による動画》 本校での活動等をまとめたもの。留学修了の記念		
10:20	《ポスターセッションの振り返り》		
10:30	本校チーム・国内連携校の代表者による提言内容の説明		
10:40	《共同宣言》		
10:45	《フィナーレ》 ① 講評(国連WFP協会) ②修了証授与 ③ 閉会宣言		
11:00	《食》のサミット閉会 閉会后、水仙祭オープニング。(事後アンケートは火曜日回答)		
11:15	昼食(カフェテリア)、フェアウェルパーティー(参加生徒対象) [大会議室]		
12:30	フェアウェルパーティー終了、見送り		

6. 参加者数

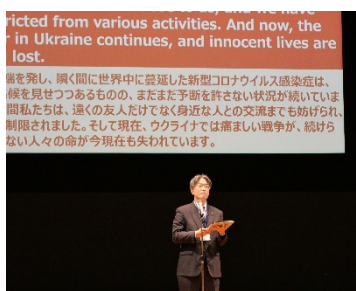
拠点校生徒 764名(高校1・2年生、中学生)、教職員 80名、
 連携校 21名(国内 生徒9名・引率3名、海外 生徒9名)、来賓 13名
 計 878名 ※ オンラインでの参加を含む

7. 「食のサミット」の記録

(1) オープニング(1日目)

2年GIクラスの司会のアナウンスにより、講堂でのステージ発表が始まり、オープニングでは、
 学校長挨拶、水仙会(生徒会)会長挨拶、来賓紹介が行われた。発表では、オンラインでの通信トラ

ブルを想定し、オンライン参加する各校代表チームには事前に発表動画を作成・提出してもらい、万一の際には動画を発表の代替として放映する備えを行った。



(2) 代表チームによる解決策の発表(ステージ発表)

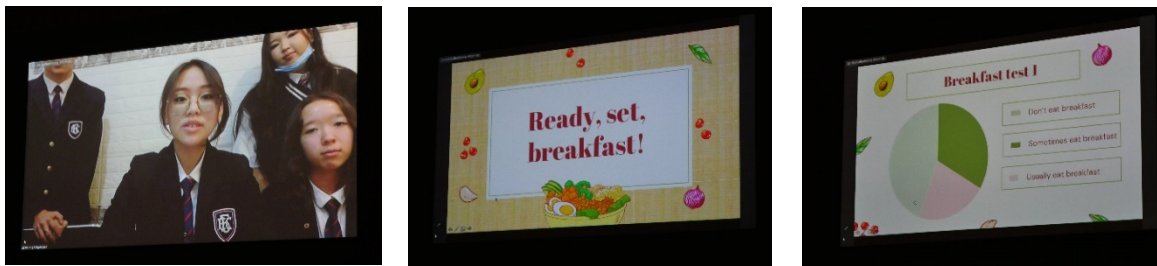
国内外の各校代表6チームが、食のサミットのテーマに基づき、課題とその解決策に関する提言を発表6分間で行った。なお、発表時間には数十秒から1分程度の学校紹介も含まれている。前半の発表は、高知国際高校・モンゴル・本校の3チーム、後半は中村学園三陽高校・ウズベキスタン・京都先端科学大学附属高校の3チームが、熱のこもったプレゼンテーションを行った。各チームのテーマおよび提言の概要は次の表の通りである。

No.	学校名(国名)	人数	テーマ	提言概要
1	高知国際高校	2	To promote people to join Food Drive project	フードドライブプロジェクトへの参加促進
2	General Secondary School #84(モンゴル)	5	To support students to start a healthy breakfast habits	学生が健康的な朝食の習慣を始めるサポート
3	中村学園女子高校	4	Engaging in Regenerative Agriculture	再生型農業への取り組み
4	中村学園三陽高校	4	Sustainable Fertilizer Development	持続可能な肥料開発
5	Academic Lyceum of Westminster Intl. Univ. in Tashkent(ウズベキスタン)	4	Find a way to reduce trans fats	トランス脂肪を減らす方法を見つける
6	京都先端科学大学附属高校	3	To make soy meat products more popular	大豆ミート製品の普及に向けて

[高知国際高校チーム(対面発表)]



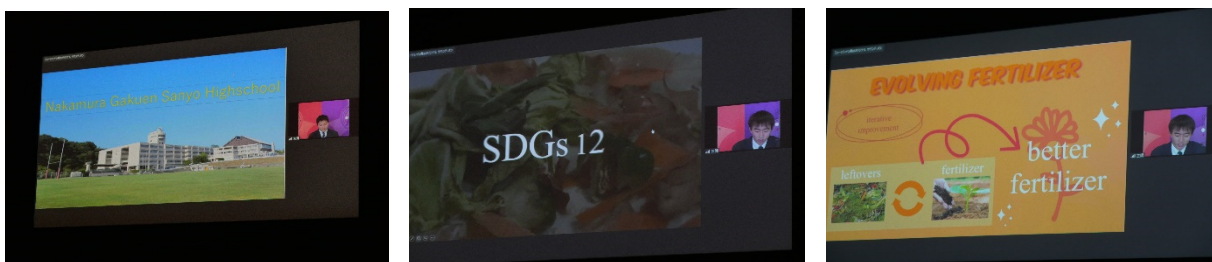
[モンゴルチーム(オンライン発表)]



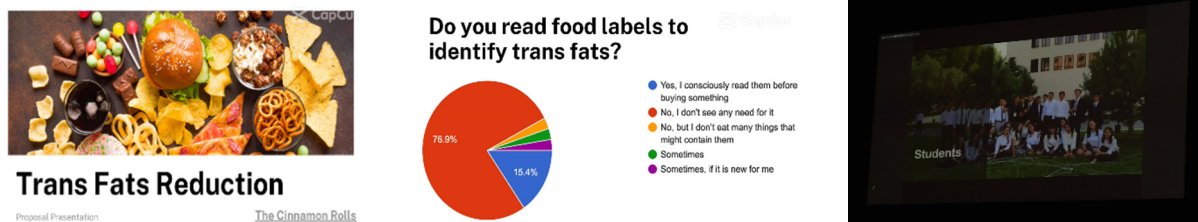
[中村学園女子高校チーム(対面発表)]



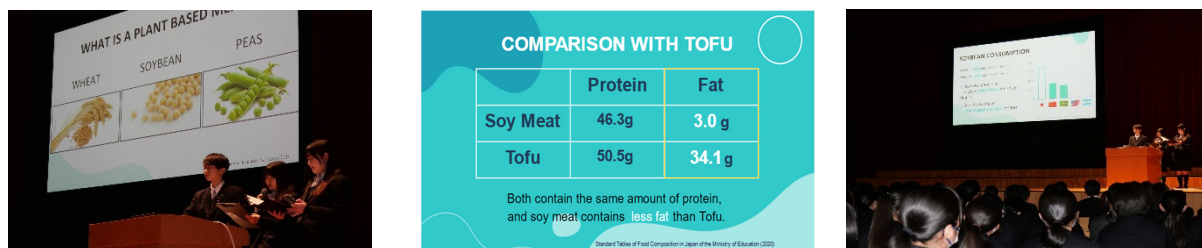
[中村学園三陽高校チーム(対面発表)]



[ウズベキスタンチーム(動画発表)]



[京都先端科学大学附属高校チーム(オンライン発表)]



(3) サミット

第1日目のステージ発表を終えて、国内外の各校代表チームがハイブリット形式で会議を行った。この会議の目的は、食のサミットのテーマ「すべての人に安全な食を(Safe Food for All People)」

に基づいて各チームで出し合った課題と、その解決策を提言書として取りまとめることである。ここで作成された提言書は、翌日のサミットにおいて代表生徒がステージでWFP協会に提出し、参加者全員に向けて共同宣言を読み上げることになっている。

① オープニング

対面参加チームである本校と京都先端科学大学附属高校、高知国際高校の3チーム、および2年GIクラスファシリテーター4名が視聴覚室に集合した。コロナ禍の影響により来校できなかった国内外3つの連携校の代表5チームはオンラインでの参加となった。まず、司会者によってサミットの開始が宣言された。各代表チームの紹介の後、各チームによる提言(課題とその解決策)の説明を行い、質疑応答の時間を設けた。



② グループ討議

各チームから1人ずつ集められて4つのグループを作り、対面とオンラインのハイブリット形式でお互いの課題と解決策についての意見交換を行い、提言書の案を作成した。初対面の生徒同士も、時間の経過とともに距離が近くなり、オンライン上の海外連携校ともジェスチャーを交えて英語で質問や議論をしながら、活発なディスカッションが行われた。今年は、ホワイトボードや付箋も活用し、対面あるいはオンラインに関わらず、生徒が流れを理解しやすいような工夫もなされた。また、GI2年生のファシリテーター4名も各グループに入り、議論のスムーズな進行に貢献した。



③ 提言書作成

本年度は、例年よりも包括的なテーマであったため、代表生徒たちも各校の論点をまとめるのに苦労していた。約2時間半かかり、提言書がまとまった時の生徒たちの表情には充実感が感じられた。提言書は日英両言語で作成し、翌日WFP協会へ提出し、共同宣言において共有される。



(4) ポスターセッション

昨年度は GI クラス以外の生徒もサミットへの関心を高め、食の問題に真剣に向き合う場を作りたいという希望からサテライト会議を開催した。今年度は高1・高2すべての生徒が冬休み期間を利用してサミットと同じテーマでポスターを作成し、サミット当日にクラスの代表生徒がポスター発表を行った。代表者は各クラス4名選出し、一人あたり10分の持ち時間を設けた。全部で84名分の発表が行われ、代表以外の生徒は自分の関心がある発表のところに自由に訪れ、1時間のうちに4名の発表を聞き、質疑応答を行い、付箋で感想を提出した。発表会場の司会進行はGIクラスの生徒が務めた。使用言語は日本語である。

その後、84名分のポスターと感想を書いた付箋はGIクラスの生徒がすべて回収し、サミット当日の午後に優秀なポスターや印象的な発表の選出、感想からわかる生徒たちの声をまとめた。翌日の共同宣言のときに作業をした生徒は「ポスターセッションの振り返り」と題した発表を行った。サミット参加者と同じテーマで拠点校全生徒が課題に取り組み、ポスターセッションを行い、活動を振り返ることで、前年度からのねらいであった学校全体でのサミットへの参加を促すことができた。

3/10(金)「食」のサミット ポスターセッション代表者 一覧									
クール	投票番号	氏名	教室	タイトル	クール	投票番号	氏名	教室	タイトル
第1クール 11:30 ~ 11:40	1	富安 萌葉(1-10)	A 301	Instagram・Twitterからおこるフードロス	第3クール 12:00 ~ 12:10	43	宮崎 七希(1-10)	A 301	大豆ミートの可能性
	2	岡田 希風(1-9)	B 302	昆虫食が世界を救う?		44	樋口 留奈(1-9)	B 302	冷凍食品について
	3	和泉 果乃(1-8)	C 303	海洋生物と私たち		45	鈴木 伊織(1-8)	C 303	フォアグラについて
	4	田邊 紗和(1-7)	E 305	世界の食料問題		46	甲野 紅鈴(1-7)	E 305	食と農業や肥料
	5	窪田 彩(1-6)	F 306	6つの『食』で起きる食卓問題		47	保橋 琴乃(1-6)	F 306	ダイエットは体に良いの?
	6	出水 杏奈(1-5)	G 307	地元の強み〜地産地消の必要性〜		48	藤本 悠(1-5)	G 307	Standard Vegetables
	7	豊松 沙希(1-4)	H 308	米粉を世界へ		49	簡井 美智(1-4)	H 308	日本の食料自給率を上げよう!
	8	切通 千帆(2-9)	I 309	安全な水		50	本郷 みのり(2-9)	I 309	気候をゼロに
	9	鈴木 歩夏(2-8)	J 310	食の安全〜食中毒の現状〜		51	平山 りゆ(2-8)	J 310	世界中に安全な水を
	10	大賀 羽和(2-7)	K 311	ドン・キホーテと3分の1ルール		52	田中 楓(2-7)	K 311	水質汚染の格差はなぜなくさないといけないの?
	11	大久保 リリカ(1-1)	M 401	食と気候変動		53	石橋 七重(1-1)	M 401	新しいフードドライブ
	12	川俣 陽菜乃(1-2)	N 402	食べる幸せ 食べられる幸せ		54	田中 葉莉(1-2)	N 402	安全な水を世界に
	13	藤生 希空(1-3)	O 403	ジャガイモの持つ「毒性」について		55	藤崎 すみれ(1-3)	O 403	気候が経く理由
	14	角本 愛弥(2-4)	Q 405	殺物生産と物価の高騰		56	土田 陽菜(2-4)	Q 405	今後の食肉
	15	小堀 千重(2-3)	R 406	養殖魚は安全??		57	松浦 知世(2-3)	R 406	食中毒
	16	川久保 優月(2-2)	S 407	遺伝子組み換え食品		58	高見 文乃(2-2)	S 407	輸入大豆日本の問題? 野菜水(バーチャルウォーター)って?
	17	権業 那月(2-1)	T 408	身近な毒〜全ての人に安全な食を〜		59	中田 鈴(2-1)	T 408	ZENBでゼーンが食べてみる幸せになあれ*
	18	乾 日向子(2-12)	U 409	被災者に安全な食を〜お弁当プロジェクト!〜		60	村上 優奈(2-12)	U 409	若い世代に増えています 栄養不良について
	19	井上 千寿(2-11)	V 410	牛と環境問題		61	伴丈 和美(2-11)	V 410	水を求めて。
	20	楠田 柚子(2-10)	W 411	食品添加物		62	山崎 紗(2-10)	W 411	すべての人に安全な食を
21	内野 菜月(2-5)	X 412	食品偽装	63	治岩 莉央(2-5)	X 412	園を繋ぐ食		
第2クール 11:45 ~ 11:55	22	野田 夏美(1-10)	A 301	味の素の取り組み	第4クール 12:15 ~ 12:25	64	渡邊 莉子(1-10)	A 301	日本の食料自給率
	23	清水 葵葉(1-9)	B 302	食品の価値動向		65	松永 優芽(1-9)	B 302	着色料と食品
	24	江藤 莉央(1-8)	C 303	世界中の人へ安全な食べ物を		66	中野 心優(1-8)	C 303	無農薬野菜の現状
	25	七岐 和花(1-7)	E 305	食と栄養「栄養素の重要性とは?」		67	山本 一葉(1-7)	E 305	気候をゼロに
	26	貞清 伶奈(1-6)	F 306	森林と私たちの暮らし		68	元木 陽菜(1-6)	F 306	ダイエットによる栄養不足を防ぐには
	27	久木崎 美葉(1-5)	G 307	World Water Safety		69	別府 凜乃(1-5)	G 307	Additives in My Food
	28	田中 花枝(1-4)	H 308	代替肉ってなんであるの?		70	長塚 柚乃(1-4)	H 308	〜気候をゼロに〜食品ロスを減らそう!
	29	四島 梓(2-9)	I 309	食品添加物		71	山田 咲季(2-9)	I 309	海の現状
	30	原 あかり(2-8)	J 310	約7秒に1人が気候によって命がなくなる!		72	八尋 優真(2-8)	J 310	TABLE FOR TWOの取り組みについて
	31	岡田 百合子(2-7)	K 311	残留農薬の恐ろしさ		73	松浦 彩佑(2-7)	K 311	オーガニック…?
	32	濱野 祥希(1-1)	M 401	屋台の安全性 in INDONESIA		74	江藤 美穂子(1-1)	M 401	ミネラルウォーターと環境
	33	里吉 心那(1-2)	N 402	日本貿易の課題		75	長濱 楓(1-2)	N 402	遺伝子組み換えの安全性
	34	柿本 美空(1-3)	O 403	世界の気候と解決策		76	谷 彩羽(1-3)	O 403	その「食」って安心安全?
	35	権藤 佑奈(2-4)	Q 405	気候をゼロにするには?		77	鶴原 優希子(2-4)	Q 405	食品添加物の影響
	36	中山 紗良(2-3)	R 406	僕らの相棒、ミドリムシ		78	三浦 真琴(2-3)	R 406	みんなと同じもの 食べたい!
	37	北川 結(2-2)	S 407	気候変動がもたらす食料問題		79	宮原 小桜(2-2)	S 407	それ ほんとに安全?
	38	横山 歩果(2-1)	T 408	日本が他国の水を奪う? バーチャルウォーター		80	矢作 葉奈(2-1)	T 408	世界のSDGs事情
	39	玉丸 菜々々(2-12)	U 409	どんなに汚い水でもこの水を飲むしかない		81	藤谷 ゆき(2-12)	U 409	食品の安全
	40	岩本 芽依(2-11)	V 410	食品ロス		82	行弘 清香(2-11)	V 410	すべての人に安全な食を
	41	高尾 竜(2-10)	W 411	タンパク質危機		83	和田 結楓(2-10)	W 411	相次ぐ給食の“異物混入”
	42	香山 もえぎ(2-5)	X 412	ひとりじゃない!		84	古川 凛(2-5)	X 412	水の価値を知らう!

[ポスター発表者のリストと発表内容]

ドンキホーテと3分の1ルール

考察 M&S&C, Abate - Corp. Co., JP 2020.03.20 大賀 時和

ドンキホーテが向ける商品の販売戦略に出る事を知った。驚きの歴史と競合するドンキホーテ。2021年1月現在国内160店舗、海外100店舗と世界に広がるドンキホーテの戦略と競合する事を知る事が出来た。

3分の1ルール
ドンキホーテが安く物を売る事の出来た理由に3分の1ルールという、日本の常識にないという事を知った。

3分の1ルールとは何
賞味期限の3分の1は過半数商品は受けとれませんよという、スーパー業界特有の習慣です。例年賞味期限が6ヶ月の製品は製造後3ヶ月は売れていきます。賞味期限が3ヶ月は売れていきます。賞味期限が3ヶ月の1ルールは売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。

3分の1ルール
賞味期限の3分の1は過半数商品は受けとれませんよという、スーパー業界特有の習慣です。例年賞味期限が6ヶ月の製品は製造後3ヶ月は売れていきます。賞味期限が3ヶ月は売れていきます。賞味期限が3ヶ月の1ルールは売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。売れ残りを減らす事で利益を確保する事でアパロと競合しています。

まずは多くの人の企業、小売業者が3分の1ルールについて知り、考えを深めていく事が大切。これによりフードロス削減やSDGの達成に近づく事が出来る。

僕らの相棒ミドリムシ

地球の抱える問題は、爆発的な人口増加。水と食料が不足する。地球温暖化が進む。2050年には日本は人口減少の国になる。

ココがすごい!! ミドリムシ

① 栄養満点!!
② 細胞壁の有無
③ 注目成分パラミロン

ファミマートのエーザナ商品

2年3組 佐藤 中山 結衣

ZENBでゼーンが食べてみんな幸せになあれ

ZENBの目的を知り購入の楽しみ

2020年の目標を知り購入の楽しみ

2020年の目標を知り購入の楽しみ

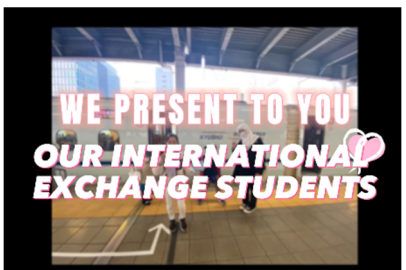
[ポスターの例①②③]

(5) オープニング(2日目)

2日目(3月11日)は、東日本大震災から12年にあたるため、会に先立って1分間の黙とうを捧げてからのスタートであった。2年GIクラスの司会のアナウンスにより、スケジュールの確認が行われた。

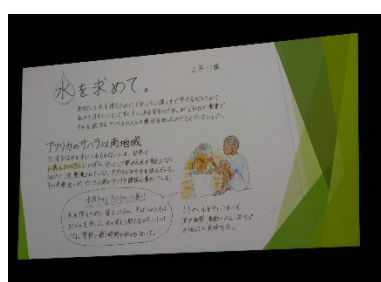
(6) アジア架け橋留学生による動画

昨年度は、アジア架け橋留学生(10カ国10名)が、帰国前の食のサミットにおいて、出身国の踊りをステージで披露した。しかし、今年度のアジア架け橋留学生(7カ国7名)は帰国日程の都合上により食のサミットへの参加が困難であったため、本校での留学修了を記念する動画を作成し、講堂で披露することとなった。食のサミットに向けた準備にあたり、英語やリサーチなどをはじめ、多くの点で日本の生徒たちに助言や刺激を与えた。



(7) ポスターセッションの振り返り

食のサミット1日目の午後に、全校生徒が参加して21教室・4クールに分けてのポスターセッションを実施した。時間の制約上、参加生徒は4つの発表しか見ることができないため、全教室に配置されたGIクラス2年生と1年生のファシリテーターが各会場の情報を共有し、まとめたものをGIクラス2年生の代表生徒がステージで全校生徒に報告した。発表では、前日のセッションで特に印象深いものや切り口が鋭いものなどに焦点を当て、写真や動画も含めてポスターセッションの情報共有と意義の確認がなされた。最後のまとめとして、まずは「知ること」、次に「行動すること」、そして「継続すること」の3点が社会問題を解決し、社会をより良くしていくために大切だと訴えかけた。



(8) 共同宣言・フィナーレ

本校生徒2名と京都先端科学大学附属高校1名、高知国際高校1名の計4名の代表生徒が、前日のサミットにおいて議論し、課題と解決策をまとめて作成した提言書の内容を、日英両言語で読み上げる「共同宣言」を行った(共同宣言の内容は次のページに記載)。その後、提言書をWFP協会事務局長鈴木様に提出し、本サミットの講評をいただいた。



(9) 閉会行事(修了書授与)

各校代表チームの1人ひとりに、学校長より修了証(Certificate)の授与を行った。その後、司会者による閉会宣言で食のサミット2022は幕を閉じた。



2022年 食のサミット 共同宣言

2023年3月10日
中村学園女子高等学校

1. はじめに

私たちは食の安全について考えた。現在世界では農薬の過剰使用などで食の安全が脅かされており、私たちの健康に大きな影響をもたらしている。私たちはこの問題を解決すべく以下の内容を提案する。

2. 提案

(1) 現在の問題

1. 飢餓
2. 気候変動
3. 健康被害

(2) 解決法の提案

1. 食品表示

- ・遺伝子組み換え食品や原材料を可視化する。
- ・トランス脂肪酸の危険性を示す。

2. 小学校でフードドライブを広める。

- ・ハピフルバッグを用いて、小学校に家庭で余った食品を持ち寄る。
- ・支援の必要な人に食品を渡す。

3. 大豆ミート

- ・宗教や健康上の理由で肉を食べられない人への販売を進める。
→トランス脂肪酸が少ない、たんぱく質が豊富、環境にも良い。

4. 再生農業

- ・土壌を再生、改良しながら自然環境の再生を目指す。
- ・不耕起栽培や輪作など様々な方法で環境保全を進める。

(3) アクションプラン

1. カフェテリアのメニューに原材料の表記をする。
2. 家庭科の授業でハピフルバッグを製作する。家庭で使わなくなった服や布を学校に持ち寄る。
3. 学校のメニューに入れる、ベジメニューをつくる。→食の選択肢が広がる。
4. 学校の畑で実践する。→コンポストについて学び、殺虫剤の必要性について考える。

3. 結論

私たちは「食の安全」というテーマで今回議論した。その中で浮き彫りになった

問題は「飢餓」「健康」「気候変動」である。それらの問題は私たち学生にはとても大きく、社会と学校が連携しこれらの問題の解決に向けて取り組むことが必要だと考えた。そのため、世界を取り巻く社会問題やその構造を改善するために、学校教育を通して食の安全を広める必要がある。国や企業には市民に食の安全を保障する責任があり、市民にはそれらを楽しむ権利とともに、現状の課題を解決するために努力をしていく必要がある。

2022 FOOD SUMMIT PROPOSAL STATEMENT

11 March 2023

Nakamura Gakuen Girls' Senior High School

1. Introduction

We researched about food safety. Currently, food safety in the world is threatened by the excessive use of pesticides, which has a significant impact on our health. We propose the following to solve this problem:

2. Proposals

Current problems

1. Hunger
2. Climate change
3. Health hazards

Proposed solutions

1. Food labelling

Make genetically modified foods and ingredients known.
Show the dangers of trans fats.

2. Promote food drives in primary schools.

Use HAPPY FULL BAGS to bring surplus food from home to the primary school.
Give food to those in need.

3. Soy meat

Promote sales to people who cannot eat meat for religious or health reasons.
Low in trans fats, rich in protein and good for the environment.

4. Regenerative agriculture

Aimed at restoring the natural environment by regenerating and improving the soil.

Promote environmental conservation through various methods such as no-till cultivation and crop rotation.

Action plan

1. Labeling of ingredients on cafeteria menus.
2. Make HAPPY FULL bags in home economics classes. Bring clothes and cloths no longer used at home to school.
3. Create a veggie menu to be included in the school menu. → Expand food options.
4. Practice in the school → Learn about composting and think about the need for insecticides.

3. Conclusion

We discussed the theme of 'food safety'. The issues that emerged were 'hunger', 'health' and 'climate change'. These issues are very big issues for us students. We thought that society and schools need to work together to solve these problems. Therefore, it is necessary to spread food safety through school education to solve the social problems surrounding the world and improve their structure. States and companies have a responsibility to guarantee food safety to their citizens and citizens have the right to enjoy them.

(11) その他

○ フェアウェルパーティー

サミット終了後、本校、京都先端科学大学附属高校、高知国際高校の代表チームがカフェテリアで昼食をともにした後、フェアウェルパーティーを開催した。遠方から来校してともにサミットを創っていただいた両校代表チームの生徒と指導・引率の先生方への感謝の気持ちを込めたものである。GI2年生が企画・運営したもので、アイスブレイクやミニゲームから始まり、サミットに参加しての感想の共有も行った。終始和やかな雰囲気でも盛り上がり、最後は会場の全員で京都と高知の代表チームを見送り、全ての日程を終了した。



8. アンケート結果と考察

サミットの前後に全校生徒へのアンケート調査を行った。結果は次の表の通りである。いずれも肯定的な回答の割合(%)を記した。集計した回答数は高1・高2で244名である。

[事前アンケート] ※中学は未実施

	日本国内の「食」に関する課題について								海外の「食」に関する課題について							
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後		
	日本には「食」に関する課題がある	日本には「食」に関する課題がある	私は、日本の「食」に関する課題解決に興味がある	私は、日本の「食」に関する課題解決に興味を持った	日本の「食」に関する課題を解決するために、私たちができると思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、私たちができると思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	海外には「食」に関する課題がある	海外には「食」に関する課題がある	私は、海外の「食」に関する課題解決に興味がある	私は、海外の「食」に関する課題解決に興味を持った	海外の「食」に関する課題を解決するために、私たちができると思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、私たちができると思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う	海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う
1年GI	100	100	93.3	93.3	100	93.3	93.3	93.3	100	100	93.3	93.3	100	93.3	46.7	93.3
1年全体	98.0	99.2	89.8	97.1	98	100	75.6	97.5	98.4	99.2	86.6	96.3	91.1	95.1	52.8	93.4
2年GI	96.7	100	96.7	97	100	100	90	93.9	100	100	96.7	97	96.7	97	50	97
2年全体	98.3	99.3	82.8	94.1	96.4	98.4	71.5	94.4	96	98	79.8	91.5	89.1	93.8	49.3	90.8

	生徒の興味・関心について								提携校との連携について				満足度調査	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事前	事後	事後	事後
	現在、海外への興味・関心がある	海外の連携校の発表を聞いて、海外への興味・関心が増した	英語や探究の授業が好きだ	海外の連携校の発表を聞いて、英語や探究の学習意欲が増した	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<現在>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<現在>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<将来>必要であると思う	多様な文化背景を持つ人の考えを聞くことは、<将来>必要であると思う	国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う	食のサミット(ステージ発表やポスターセッション)は印象に残った発表やキーワードがある	食のサミット(ステージ発表やポスターセッション)は印象に残った発表やキーワードがある
1年GI	80	93.3	80	93.3	93.3	100	93.3	100	86.7	80	93.3	93.3	93.3	93.3
1年全体	75.6	91.8	61.4	84	95.1	98.4	97.6	98.4	73.6	46.7	74	45.5	82.8	72.1
2年GI	86.7	87.9	90	90.9	100	97	100	97	90	90.9	90	93.9	100	97
2年全体	72.8	86.3	56.6	82.4	94.4	98.7	95	97.7	67.5	78.1	64.6	77.8	93.1	94.1

[考察]

- ① 「日本国内の『食』に関する課題について」の項目の中では、「私は、日本の「食」に関する課題解決に興味を持った」・「日本の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う」の項目が高1・高2ともに全体で大きく肯定的な回答の割合が上昇している。
- ② 「海外の『食』に関する課題について」の項目の中では、「私は、海外の「食」に関する課題解決に興味を持った」・「海外の「食」に関する課題を解決するために、何か行動してみたいと思う」の項目が高1・高2ともにGI・全体で大きく肯定的な回答の割合が上昇している。
- ③ 「生徒の興味・関心について」の項目の中では、「海外の連携校の発表を聞いて、英語や探究の学習

意欲が増した」の項目が高1・高2ともに全体で大きく肯定的な回答の割合が上昇している。

- ④「提携校との連携」の項目の中では、「国内の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う」・「海外の連携校の生徒とコミュニケーションをとってみたいと思う」の項目が高1全体で大きく肯定的な回答の割合が低下した。それに対して、高2全体では割合が上昇している。
- ⑤「満足度調査」の項目は事後アンケートのみの回答であったが、「食のサミット(ステージ発表やポスターセッション)は有意義な時間だったと思う」・「食のサミット(ステージ発表やポスターセッション)で印象に残った発表やキーワードがある」の項目において、高1全体では他の母集団に比べ肯定的な回答の割合が低かった。
 - ▶ ①・②からわかることは、食のサミットを実施したことで、学校全体として国内外の「食」に関する課題に関心を持つことができたということである。GIクラスはもとより、それ以外の生徒にも関心を持たせることができたことはサミット実施のねらいはひとつ達成できたといえる。
 - ▶ ③からは、海外の連携校の参加が学校全体の英語学習への意欲向上に大きく影響を与えているということが分かる。
 - ▶ ④については、高1と高2で結果が異なっている点が興味深い。昨年度の「食のサミット」を知る高2生は、学校生活全般でも指導的な役割を担い、活躍できる場面も増えていることから外部との連携活動に積極的なのだろう。それに対して、高1生は今回の「食のサミット」がはじめてで、まだまだ学校生活では指導を受ける場面の方が多い。積極的に外部との活動に参加したいというよりは、尻込みし、消極的な感想を抱く生徒が多かったのかもしれない。
 - ▶ ⑤についても、高1の割合が低い点が興味深い。④と同様の理由で、消極的な姿勢が見られると予想される。
 - ▶ アンケート全体から総括すると、GIクラスが「食のサミット」に対して初めから積極的な姿勢・肯定的な印象を持っていることは言うまでもないが、他クラスの生徒もサミットを通じて、食の課題や語学学習に積極的・肯定的になったことはサミットの成果といってよいであろう。ただし学年で見たときに、高1生についてはこちらの満足した成果は得られなかった。高2と高1で意識に差があることを今後の課題として、来年度以降の特に高1生への取り組み方を検証していきたい。

VI 事業全体の検証

VI-1	検証委員会
2023. 3. 22(水) 16:00～18:00	オンライン

検証委員会は、WWL 事業で得られた様々なデータに基づき事業効果の検証を行う委員会である。

以下にあげる①～⑳の項目順にデータの説明、および質疑応答を行った。検証する各項目は、いずれも事業構想計画書の「4 実施体制の整備」の「(4) 運営指導委員会や検証組織の設置及び運営に向けた計画」の中で記したデータ・資料に準ずるものである。

⑫に関して、今年度 34 名の卒業生のうち約 30%の生徒が国際・言語系の大学・学部に進学することが決まっている。この数値は、以前の SGH 指定の頃に比べて低下している。しかし代わりに社会科学系統や、地域創生、教育学といった多岐にわたる進学先を選んでおり、これは多くの探究活動やイノベーション教育の成果だととらえることができる。

⑭に関して、ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)のガイドラインにおける BI レベル以上の生徒の割合を提示した。WWL 事業対象の GI クラスにおいては約 27%の生徒がこの水準を超えているのに対し、非対象クラスは約 12%と GI クラスは他のクラスの 2 倍以上の割合で英語の水準が一定程度をこえている。グローバル教育の成果はこうした数値からうかがうことができた。

一方で、委員会全体を通じて本校の教育活動の改善点も挙がった。とくに生徒に意見を持たせ、議論をするといった生徒に主体性を持たせる活動がやや少ないことは今後の課題である。生徒の主体性や自由な意見、論理的な言語活動というのは数値だけでは把握することができない。効果検証等のアンケートは引き続き実施するが、学習活動の振り返りや評価とフィードバックのあり方を吟味する必要がある。

⑬、⑳、㉑、㉒の項目については、データの収集ができておらず会での報告・検証ができなかった。

[拠点校に関する項目]

- ① 生徒数・留学生数・帰国子女数
- ② 国内外の連携校からの生徒の訪問期間・訪問回数
- ③ 国内外の連携校への生徒の訪問期間・訪問回数
- ④ 留学生の探究活動の実施学級数・実施回数
- ⑤ 国内外の連携校とのオンラインでの合同授業や会議などの交流回数
- ⑥ フィールドワークへの参加人数(実施先による人数内訳を含む)
- ⑦ 外部での生徒の成果発表の回数と受賞(国内・海外の区分による内訳を含む)
- ⑧ 協働機関への訪問人数・訪問回数(訪問先による内訳を含む)
- ⑨ 「食のサミット」への参加者数と参加者内訳
- ⑩ AP 受講者数・単位取得者数
- ⑪ 教職員研修の実施内容と実施回数
- ⑫ 卒業生の進学先・留学先・就職先(学校・地域・専攻分野による内訳を含む)
- ⑬ 生徒や卒業生の起業者数
- ⑭ 英語検定試験の結果
- ⑮ その他の受賞歴

- ⑯ 生徒・保護者による学校評価の結果
- ⑰ 教育課程表や学校パンフレット等

[連携校に関する項目]

- ⑱ 他の連携校や協働機関からの生徒・学生・関係者の訪問期間・訪問回数(オンラインを含む)
- ⑲ 他の連携校や協働機関への生徒・学生・関係者の訪問期間・訪問回数(オンラインを含む)
- ⑳ 年度内に新たに連携した学校・企業・法人等
- ㉑ 卒業生の進学先・留学先(学校・地域・専攻分野による内訳を含む)
- ㉒ 生徒や卒業生の起業者数
- ㉓ 教育課程表並びに学校パンフレット等

[協働機関に関する項目]

- ㉔ 他の連携校や協働機関への出向(オンラインを含む)
- ㉕ 拠点校から提出された成果物(論文や発表資料等)
- ㉖ 拠点校の生徒訪問時の評価
- ㉗ その他、拠点校の生徒の変容に関する資料等

VI-2	第1回運営指導委員会
2022.10.4(火) 15:00~16:30	拠点校(大会議室)

1. 日時：2022年10月4日(火)15:00~16:30
2. 場所：拠点校(大会議室)
3. 参加者：

[運営指導委員]

- 岩本 仁 氏 (学校法人福岡成蹊学園 理事長)
- 小野 博 氏 (グローバル人材育成教育学会 名誉会長)
- 末松 大和 氏 (NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡 専務理事)
- 高橋 信命 氏 (福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局私学振興課 参事補佐)

[オブザーバー]

- 相川 洋 氏 (SG インキュベート株式会社 代表取締役社長)
- 岩本 新治 氏 (株式会社久原本家グループ本社 経営管理本部 経営企画部)
- ※代表取締役社長 河邊 哲司 氏 代理ご参加

[管理機関(中村学園)]

- 中村 紘右 (WWL 管理機関長 / 理事長)
- 松本 公典 (経営企画室 室長)
- 伊東 正子 (経営企画室)

[拠点校(中村学園女子高等学校)]

石丸 篤志 (WWL 実行委員長 / 校長)

高良 清文 (教頭)

堤 明雄 (教頭)

吉川 正治 (事務長)

西尾 正 (事務長補佐)

西岡 隆行 (教育開発部長)

三浦 隆博 (教育開発副部長 / GI クラス 2 年担任)

4. 会次第：

- (1) 開会挨拶 (WWL 実行委員長 石丸)
- (2) 運営指導委員紹介
- (3) 令和 4 年度 WWL 事業運営について(管理機関 WWL 事務局 松本)
- (4) GI クラスの取り組みについて ※探究学習プレゼンテーション参観
- (5) 拠点校の取り組みについて(拠点校教育開発部長 西岡)
- (6) 審議及び質疑応答
- (7) 閉会挨拶(WWL 管理機関長 中村)

5. 委員からのご意見

- ▶ 世界の問題に目を向けていくうえで、日本人として自国の文化や歴史を知ることも必要である。海外の学生は、自国への誇り・愛国心を多くもっている印象がある。高校でもカリキュラムの中で、日本文化や歴史等に触れる機会をより多くもっていただきたい。
- ▶ プレゼンテーションを通して自分の考えを表現するとともに、聴衆もプレゼンターへの考えや意見を受け入れようとする姿勢が育っている。集団としての質を高めていくために、工夫している点(生徒の興味関心をベースに社会的貢献・進路に繋がる探究学習、協働学習やディスカッションの活性化等)をさらに深めていっていただきたい。
- ▶ 「GI フィールドワーク basic(グローバル・キャンパス)」等、海外留学生との協働学習においてはファシリテーターの事前指導・研修を充実させて、より効果的なプログラムにすることが望ましい。

VI-3	第 2 回運営指導委員会 兼 AL ネットワーク連絡会	
2023. 3. 10(金) 13:30~14:30	拠点校(大会議室)	

1. 日時：2023 年 3 月 10 日(金)13:30~14:30
2. 場所：拠点校(大会議室)

3. 参加者：

[運営指導委員]

岩本 仁 氏 (学校法人福岡成蹊学園 理事長)

小野 博 氏 (グローバル人材育成教育学会 名誉会長)

末松 大和 氏 (NPO 法人アジア太平洋子ども会議・イン福岡 専務理事)

高橋 信命 氏 (福岡県人づくり・県民生活部 私学振興・青少年育成局私学振興課 参事補佐)

[オブザーバー]

相川 洋 氏 (SG インキュベート株式会社 代表取締役社長)

岩本 新治 氏 (株式会社久原本家グループ本社 経営管理本部 経営企画部)

※代表取締役社長 河邊 哲司 氏 代理ご参加

[管理機関(中村学園)]

中村 紘右 (WWL 管理機関長 / 理事長)

松本 公典 (経営企画室 室長)

伊東 正子 (経営企画室)

[拠点校(中村学園女子高等学校)]

石丸 篤志 (WWL 実行委員長 / 校長)

高良 清文 (教頭)

堤 明雄 (教頭)

吉川 正治 (事務長)

西尾 正 (事務長補佐)

西岡 隆行 (教育開発部長)

三浦 隆博 (教育開発副部長 / GI クラス2年担任)

4. 会次第：

- (1) 開会挨拶
- (2) 管理機関長挨拶(WWL 管理機関長 中村)
- (3) 運営指導委員長挨拶 (福岡成蹊学園 理事長 岩本 仁 氏)
- (4) 令和4年度 WWL 事業運営・検証報告 (拠点校教育開発部長 西岡)
- (5) 審議及び質疑応答
- (6) 閉会挨拶

5. 委員からのご意見

- ▶ 留学が希望制のため、留学に行った生徒と行かなかった生徒達との間に価値観や感覚などの差が出てくる懸念があるため、フォローが必要である。
- ▶ コロナ禍の影響によりオンラインが普及したことで、一般的にも「留学に行かなくてもいい」という風潮が出てきている。実際に海外を経験し、自分の目で見て肌で感じることも貴重な経験になるため、留学を推奨するとともにオンラインの使い方を工夫していく必要がある。

- ▶ プレゼンテーションスキルが高く表現力もあるが、発表時間や質疑応答の時間をもう少し長く設けることで、発表がより深まるように思う。
- ▶ ポスターセッションでは、ファシリテーターを全て生徒が行っていることは素晴らしいが、聴衆からの質問が殆ど出ていない。質問が出るような工夫・仕掛けづくりが必要。
- ▶ 身近なことに疑問・課題をもつ「着眼点」が鋭い生徒がいる。社会での新人教育等においても「褒める」ことを適宜行うが、学校でも状況に応じて「褒める」ことを行い、モチベーションの向上に繋げていただきたい。
- ▶ 論文指導を行う上で、生徒の進捗に個人差が見受けられる。ある程度進度を揃えて指導段階にもっていくことが望ましい。

VI-4	カリキュラム検討委員会
2022. 10. 24(月)、2023. 2. 21(月)、2023. 2. 24(金)	拠点校：会議室、オンライン

昨年度から委員会の人員を改組し、今年度のカリキュラム検討委員会は九州大学の小島健太郎氏、タイガーモブ株式会社の中村寛大氏の2名をカリキュラムアドバイザーとし、実行委員長である拠点校の校長、教務部長、教育開発部長で構成している。拠点校で実施しているカリキュラムの進捗状況の確認と改善・修正を定期的に行い、アドバイザー両名から適宜、指導と助言をいただいた。

今年度は10月24日の第1回を皮切りに、2月24日の最終回までの年3回を対面・オンラインで開催した。各回の審議・報告事項は次の通りである。

回	開催日	審議・報告事項	参加者
1	2022. 10. 24(月)	委員会の目的、WWL 事業の概要、今年度の主な取り組み項目、今後の予定	小島氏・中村氏 他5名
2	2023. 2. 21(月)	来年度の事業計画、探究活動の高度化、グローバル・キャンパスやGI スキルアップセミナーの内容の改善	中村氏他5名
3	2023. 2. 24(金)	来年度の事業計画、探究活動の高度化、高大接続や科目等履修制度の取り組み・現状、論文指導について	小島氏他5名

小島氏からは高大接続事業や論文作成指導、中村氏からは海外交流や他校の探究実践例を中心に、貴重な助言と指摘を受けた。広く探究活動について、大きく3つの分野の知見を得た。

(1) 探究活動の動機づけ

- ① 学校がテーマを与えても生徒の探究のモチベーションは上昇しない。
- ② 生徒自身の強い関心・熱意・使命感をテーマにすることが探究活動の成功に近づく。
- ③ 生徒一人一人の自由な思いを、理解・尊重し、主張しあえる雰囲気づくり。

(2) 探究の指導のあり方

- ① 探究の目的だけを伝え、教員は生徒に教え込まない。
- ② 探究の内容・成果ではなく、どう向き合ったかのプロセスを尊重・評価する。
- ③ 教えない学び方を教員全体が理解し、生徒に任せられる指導体制をつくる。

(3) 探究活動の成果と将来・進路

- ① 大学生・社会人でも自分で問いをつくることは難しい。その指導・教育はさらに困難である。
- ② 個人の問いと大学の専門分野が一致するほど、研究への熱意や深まりは増していく。
- ③ 高校で育まれる学ぶ姿勢は、大学生・社会人での学びや仕事の向き合い方と大きくかわる。

いずれの項目にしても、活動の内容というよりも学校が、教員が、そして生徒がどういった姿勢で取り組むか、また取り組むように仕向けていくかという教育の体制に関わるものである。今後、校内での探究活動をはじめ教科指導、進路指導、行事の運営等、学校運営全体に関わる意識的な改革を目指していかなくてはならない。

VI-5	指導指標の測定	
	年3回(学期末)	拠点校

今年度も毎学期末に指導指標の測定を行った。教師自身に指導実態の自己評価を行わせることで授業改善を意識させ、学校全体としてアクティブ・ラーニング型授業の導入を積極的に推進してきた。今年度の指導指標測定結果をあとの表に示す。昨年度と比較して大きな変化が見られたのが、No.6とNo.9の項目である。No.6の14%数値を下げ、No.9に関しては12%数値を上げている。昨年度との学校生活の状況の違いは何といてもコロナ感染症の蔓延状況が落ち着き、ほぼすべての授業が対面授業に戻ったことが挙げられる。No.6に関してはコロナ以前の授業形態に戻ったことで、体系的な教科指導の方に教員の意識・姿勢が向いたことが回答に影響を与えたと考えられる。No.9に関しては、具体的な活動事例を数点あげる。

[具体例]

- ▶ 自宅付近のハザードマップを作成して、災害時に自分が行うべき行動を考え課題として提出させ、考察し合った。
- ▶ イカの解剖レポートにて、気づいたことに加え、ヒトとの比較を行わせた。
- ▶ 課題英作文の相互添削をした。
- ▶ 自分でテーマを設定した統計地図の作成をした。
- ▶ 興味がある社会問題のテーマに関するプレゼンテーション、ディスカッション、スピーチ等

本校では生徒全員がタブレット端末を所持している。具体例もふくめ、学習活動のなかで電子機器を利用した活動が積極的に行われた結果がNo.9の項目の数値を引き上げたと考えられる。来年度以降もICTの活用実践を中心に研修をすすめ、生徒一人一人にとって有意義な学習のあり方を研鑽していきたい。

令和4年度 指導指標測定結果

測定教員数：73名

No.	指標項目	1学期		2学期		年度全体	
		教員の割合%	昨年度との差	教員の割合%	昨年度との差	教員の割合%	昨年度との差
1	ほぼ毎時間、生徒が考える時間を少しでもとっている。	97	+1	99	-1	98	-1
2	ほぼ毎時間、生徒が発表する機会をとっている。	83	-4	85	-3	85	-4
3	これまでに一人では解決できない発問を投げかけ、その問題解決のためにペアワークやグループワークなどをする時間をとったことがある。	69	+11	67	+6	70	+8
4	これまでに生徒どうして教え合う時間をとったことがある。	64	+7	73	+3	67	+3
5	生徒がテーマや課題に基づき、それを調べたり考察したりするような活動を行ったことがある。または、そのような宿題を課したことがある。	53	+10	58	+11	56	+3
6	学期中には、これまでの教科内外で学んだ知識を関連づけた学習内容を扱うことで、生徒により深い理解を促すような授業を行ったことがある。	53	-8	61	-9	58	-14
7	学期中には、情報を精査して新たな考えを形成させるなど、批判的思考力を身につけさせることをねらいとした授業を行ったことがある。	39	-3	45	+7	46	+3
8	学期中には、問題を見出して課題解決を考えさせる授業を行ったことがある。	53	+8	59	+16	57	+4
9	学期中には、生徒の思いや考えをもとに創造し表現する活動を取り入れた授業を行ったことがある。	51	+12	55	+13	54	+12
10	「生徒が学びの主人公」であることを常に念頭におき、日々の授業を改善しようとする意欲をもち続けているか。	100	+8	99	+3	98	+3
11	授業や生徒指導、生徒会活動、クラブ活動などで「生徒が学びの主人公」であることを具体化するための実践を行ったか。	79	+18	86	+8	83	+9

令和4年度 WWL 関連年間行事一覧

日程	内容	対象	実施形態
6月			
6日	夏期研修説明会	高校1・2年生希望者	対面
21日	第1回 GI スキルアップセミナー 講師：SG インキュベート株式会社様 テーマ「価格設定について」 (事業協働機関：SG インキュベート株式会社)	GI2年生	対面
25日	第5期アジア架け橋留学生第一陣(4か国4名)到着	GI1・2年生	対面
7月			
1日	文部科学省主催 WWL 連絡協議会	管理機関・拠点校 関係者	オンライン
1日	Nakajo-Times Global (3号) 発行	—	—
2日	第5期アジア架け橋留学生第二陣(3か国3名)到着	GI1・2年生	対面
9日	第一回 GI 留学プログラム説明会	GI1年生希望者	ハイブリッド実施
14日	第2回 GI スキルアップセミナー 講師：株式会社 SG インキュベート様 テーマ：「ターゲットと PR 方法について」 (事業協働機関：SG インキュベート株式会社)	GI2年生	対面
15日～29日	留学支援金一次選考(書類選考)	GI1年生希望者	—
29日	GI プレゼンテーション	GI3年生	対面
21日	夏期職員研修「ICT教育」	拠点校教職員	対面
8月			
6日・7日	夏期海外研修「英語研修(長崎県)」 (主催：日本旅行)	中学生・高校生希望者 10名	対面
18日～26日	夏期海外研修「バリ研修(インドネシア)」 (主催：タイガーモブ株式会社)	中学生・高校生希望者 3名	対面
9月			
3日	第二回 GI 留学プログラム説明会	GI1年生留学予定者	ハイブリッド実施
10日～15日	GI フィールドワーク Advance 「マレーシア・シンガポール研修」 (連携校：SMK SultanIbrahim Girls School (マレーシア)) (事業協働機関：University of Technology, Malaysia (マレーシア))	GI2年生	対面
13日・14日	GI フィールドワーク Basic 「グローバルキャンパス」 (事業協働機関：立命館アジア太平洋大学)	高校1年生	対面

10月			
4日	第一回運営指導委員会	管理機関、拠点校、 運営指導委員	
17日	GI講演 講師：株式会社ファンケルSDGs推進室様 内容：食に関するSDGs(現代人の欠食、摂食問題等)	高校1年生	対面
24日	第一回カリキュラム検討委員会	拠点校、カリキュラム アドバイザー	対面
11月			
4日	第三回GI留学プログラム説明会	GI1年生留学予定者	オンデマンド配信
10日	Nakajo-Times Global(4号)発行	—	—
12月			
15日	第3回GIスキルアップセミナー 講師：株式会社クラダシ 代表取締役社長 関藤 竜也氏 テーマ：「SDGsとフードロス問題。ビジネスでの解決方法」 (事業協働機関：SGインキュベート株式会社)	GI1年生	対面
17日	WWL報告会 (連携校：高知県立高知国際高等学校、京都先端科学大学附属高等学校、中村学園三陽高等学校)	高校全学年、国内連携校	ハイブリッド実施
18日	九州大学高大連携「世界に羽ばたく高校生の成果発表会」 (事業協働機関：九州大学)	GI2年生代表生徒	対面
1月			
21日	第4回GI留学プログラム説明会	GI1年生留学予定者	対面
24日	京都先端科学大学附属高等学校主催「Global Simulation Gaming」 (連携校：京都先端科学大学附属高等学校)	GI2年生代表生徒	対面
25日	第4回GIスキルアップセミナー 講師：株式会社キッチハイク プロデューサー 酒井 美加子氏 テーマ：「『地域』から『地球』へ繋ぐ地域課題を解決するスタートアップの働き方」 (事業協働機関：SGインキュベート株式会社)	GI1年生	オンライン

2月			
1日	GI留学1か月コース(カナダ)出発 ※～2月28日 2か月コース(カナダ)出発 ※～4月3日	GI1年生留学希望者 18名	—
21日・24日	第2回カリキュラム検討委員会 ※2日間に分けて、カリキュラムアドバイザー2名と個別 で実施	拠点校、カリキュラム アドバイザー	対面、オンラ イン
28日	文部科学省主催 WWL 成果報告会	管理機関・拠点校 関係者	オンライン
3月			
10日・11日	食のサミット (連携校：(国内)高知県立高知国際高等学校、京都先端科 学大学附属高等学校、中村学園三陽高等学校 (海外) 84th School (モンゴル)、Academic of Lyceum Westminster International University in Tashkent (ウズ ベキスタン))	高校1年生・2年生、 連携校(国内・海外)	ハイブリッ ド実施
11日	第二回運営指導委員会	管理機関、拠点校、 運営指導委員	
11日	高知国際高等学校探究成果発表会 (連携校：高知県立高知国際高等学校)	GI1年生代表生徒	対面
11日	第5期アジア架け橋留学生帰国の途へ	留学生	—
12日	産学連携(企業コラボ)「株式会社石村萬盛堂」共同開発 商品販売 ※水仙祭(文化祭)にて販売	GI2年生	対面
13日	京都先端大学附属高等学校 WWL 課題研究成果発表会 (連携校：京都先端科学大学附属高等学校)	GI2年生代表生徒	オンライン
14日	産学連携(企業コラボ)「株式会社石村萬盛堂」共同開発商 品販売 ※4店舗にて店頭販売	GI2年生	対面

令和4年度 WWL 事業 効果検証生徒アンケート結果

調査項目	アイデンティティ		グローバル関心度		コミュニケーション		課題解決力		グローバルキャリア形成		突破力・忍耐カ・レジリエンス		調和力		実現可能性へのマインドセット		高度課題解決力																
	日本人としての自覚		地球規模の課題に対する幅広い関心		多様性を容許しつつ、主体性を発揮するためのコミュニケーション		自ら課題を設定し、他者と協働して解決する力		グローバルな分野で挑戦しようとする意欲		解決困難な課題にも諦めず論理的思考で乗り越える力		自己の経験や知識等を融合させ協働する力		自己の実現可能性を信じ努力を続けるための構え		状況に応じた課題解決力(深い力・深い力含む)																
前期質問(夏休み前)	設問1	設問2	設問3	設問4	設問5	設問6	設問7	設問8	設問9	設問10	設問11	設問12	設問13	設問14	設問15	設問16	設問17	設問18	設問19	設問20	設問21	設問22	設問23	設問24	設問25	設問26	設問27	設問28	設問29	設問30	設問31	設問32	
	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上	外国人の文化や生活様式について関心がある程度以上
1年G1クラス	人数	29	20	31	25	30	26	27	18	28	23	24	28	29	23	27	26	30	20	19	20	26	7	29	26	27	21	30	26	16	21	23	30
	割合%	93.5	64.5	100	80.6	96.8	83.9	87.1	58.1	90.3	74.2	77.4	90.3	93.5	74.2	87.1	83.9	96.8	64.5	61.3	64.5	83.9	22.6	93.5	83.9	87.1	67.7	96.8	83.9	51.6	67.7	74.2	96.8
	項目別平均%	84.7																															
1年G1クラス以外	人数	247	181	247	205	197	158	203	118	208	171	120	120	216	173	216	228	175	149	69	100	42	242	191	208	181	219	227	155	187	192	235	
	割合%	96.5	70.7	96.5	80.1	77	61.7	79.3	46.1	81.3	66.8	46.9	46.9	84.4	67.6	84.4	73.4	89.1	68.4	58.2	27	39.1	16.4	94.5	74.6	81.3	70.7	85.5	88.7	60.5	73	75	91.8
	項目別平均%	85.9																															
1年全クラス	人数	276	201	278	230	227	184	230	136	236	194	144	148	245	196	243	214	258	195	168	89	126	49	271	217	235	202	249	233	171	208	215	265
	割合%	96.2	70	96.9	80.1	79.1	64.1	80.1	47.4	82.2	67.6	50.2	51.6	85.4	68.3	84.7	74.6	89.9	67.9	58.5	31	43.9	17.1	94.4	75.6	81.9	70.4	86.8	88.2	59.6	72.5	74.9	92.3
	項目別平均%	67.7																															
2年G1クラス	人数	30	23	33	22	29	26	31	23	32	27	22	25	29	24	32	28	32	24	19	19	27	10	31	25	29	26	28	26	27	26	26	32
	割合%	90.9	69.7	100	66.7	87.9	78.8	93.9	69.7	97	81.8	66.7	75.8	87.9	72.7	97	84.8	97	72.7	57.6	57.6	81.8	30.3	93.9	75.8	87.9	78.8	84.8	78.8	81.8	78.8	78.8	97
	項目別平均%	81.8																															
2年G1クラス以外	人数	307	223	306	277	252	235	262	168	284	234	150	179	260	223	272	239	292	237	198	104	151	71	309	248	255	251	282	288	206	254	257	301
	割合%	95.9	69.7	95.6	86.6	78.8	73.4	81.9	52.5	88.8	73.1	46.9	55.9	81.3	69.7	85	74.7	91.3	74.1	61.9	32.5	47.2	22.2	96.6	77.5	79.7	78.4	88.1	90	64.4	79.4	80.3	94.1
	項目別平均%	87.0																															
2年全クラス	人数	337	246	339	299	281	261	293	191	316	261	172	204	289	247	304	267	324	261	217	123	178	81	340	273	284	277	310	314	233	280	283	333
	割合%	95.5	69.7	96	84.7	79.6	73.9	83	54.1	89.5	73.9	48.7	57.8	81.9	70	86.1	75.6	91.8	73.9	61.5	34.8	50.4	22.9	96.3	77.3	80.5	78.5	87.8	89	66	79.3	80.2	94.3
	項目別平均%	86.5																															
3年G1クラス	人数	31	25	32	26	30	26	31	25	31	29	25	29	32	29	31	29	31	26	27	22	27	15	31	28	30	25	30	28	27	27	30	32
	割合%	96.9	78.1	100	81.3	93.8	81.3	96.9	78.1	96.9	90.6	78.1	90.6	100	90.6	96.9	90.6	96.9	81.3	84.4	68.8	84.4	46.9	96.9	87.5	93.8	78.1	93.8	87.5	84.4	84.4	93.8	100
	項目別平均%	89.1																															
3年G1クラス以外	人数	278	231	277	242	257	222	252	169	260	230	155	156	226	232	255	239	268	250	238	131	153	74	282	251	252	250	270	261	220	252	256	279
	割合%	96.2	79.9	95.8	83.7	88.9	76.8	87.2	58.5	90	79.6	53.6	54	78.2	80.3	88.2	82.7	92.7	86.5	82.4	45.3	52.9	25.6	97.6	86.9	87.2	86.5	93.4	90.3	76.1	87.2	88.6	96.5
	項目別平均%	88.9																															
3年全クラス	人数	309	256	309	268	287	248	283	194	291	259	180	185	258	261	286	268	299	276	265	153	180	89	313	279	282	275	300	289	247	279	286	311
	割合%	96.3	79.8	96.3	83.2	89.4	76.8	88.2	59.9	90.7	79.7	56.1	56.7	80.4	79.8	89.1	81.7	93.1	83.9	82.6	46.4	56.1	26.9	97.5	84	87.9	82.6	93.5	86.5	76.9	83.3	89.1	92.6
	項目別平均%	88.9																															

令和4年度 WWL 事業 効果検証生徒アンケート結果

調査項目	アイデンティティ		グローバル関心度		コミュニケーション力		課題解決力		グローバルキャリア形成		突破力・忍耐・レジリエンス		調和力		実習可能性へのポイントセット		高度課題解決力																
	日本人としての自覚		地球規模の課題に対する幅広い関心		多様性を愛護しつつ、主体性を発揮するためのコミュニケーション力		自ら課題を設定し、他者と協働して解決する力		グローバルな分野で挑戦しようとする意欲		解決困難な課題にも諦めず論理的思考で乗り越える力		自他の経験や知識等を融合させ協働する力		自己の実現可能性を信じ努力を続ける心構え		状況に応じた最適な方法を自ら考え実行する力																
【データ算出】 肯定的意見＝ ①非常にそう思う ②そう思う の人数と割合% (小数第1位まで)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)	後期質問(年度末実施)														
	設問 33	設問 34	設問 35	設問 36	設問 37	設問 38	設問 39	設問 40	設問 41	設問 42	設問 43	設問 44	設問 45	設問 46	設問 47	設問 48	設問 49	設問 50	設問 51	設問 52	設問 53	設問 54	設問 55	設問 56	設問 57	設問 58	設問 59	設問 60	設問 61	設問 62	設問 63	設問 64	
1年G1クラス	人数	12	12	11	11	12	8	7	11	9	12	12	12	11	11	11	8	4	4	12	11	9	7	10	9	10	10	12	8	10	11		
	割合%	100.0	100.0	91.7	91.7	100	66.7	58.3	91.7	75.0	100.0	100.0	100.0	100.0	91.7	66.7	66.7	33.3	33.3	100.0	91.7	75.0	58.3	83.3	75.0	83.3	100.0	66.7	83.3	91.7			
	項目別平均%	95.8																	79.2	93.3	87.5	65.0	72.9	91.7	83.3	87.5							
1年G1クラス以外	人数	194	200	202	211	192	179	171	175	212	184	181	164	202	205	188	190	189	166	139	105	182	174	158	137	168	156	192	198	191	162	174	181
	割合%	88.6	91.3	92.2	96.3	87.7	81.7	78.1	79.9	96.8	84.0	82.6	74.9	92.2	94.0	85.8	86.8	86.3	75.8	63.5	47.9	83.1	80.2	72.1	62.6	76.7	71.2	87.7	90.4	87.2	74.0	79.5	82.6
	項目別平均%	92.1																	81.8	86.1	88.2	70.1	70.7	89.0	80.6	81.1							
1年全クラス	人数	206	212	213	222	204	187	178	186	223	193	193	176	214	217	199	198	200	174	143	109	194	185	167	144	178	165	202	210	203	170	184	192
	割合%	89.2	91.8	92.2	96.1	88.3	81.0	77.1	80.5	96.5	83.5	83.5	76.2	92.6	94.3	86.1	85.7	86.6	75.3	61.9	47.2	84.0	80.8	72.3	62.3	77.1	71.4	87.4	90.9	87.9	73.6	79.7	83.1
	項目別平均%	92.3																	81.7	86.5	88.2	69.8	70.8	89.2	80.7	81.4							
2年G1クラス	人数	21	22	21	23	21	23	21	20	23	21	19	19	22	23	20	20	23	17	14	11	21	19	17	15	17	19	21	22	21	16	20	19
	割合%	91.3	95.7	91.3	100.0	91.3	100.0	91.3	87.0	100.0	91.3	82.6	82.6	95.7	100.0	87.0	87.0	100.0	73.9	60.9	47.8	91.3	82.6	73.9	65.2	73.9	82.6	91.3	95.7	91.3	69.6	87.0	82.6
	項目別平均%	94.6																	92.4	90.4	93.5	71.3	73.9	93.5	80.4	84.8							
2年G1クラス以外	人数	227	222	229	240	229	222	193	201	249	217	219	189	245	246	221	232	229	206	179	141	213	181	194	170	217	216	228	242	230	195	206	211
	割合%	86.3	84.4	87.1	91.3	87.1	84.4	73.4	76.4	95.0	82.5	83.3	71.9	93.2	93.5	84.0	88.2	87.1	78.3	68.1	53.8	81.3	69.3	73.8	64.9	82.5	82.1	87.0	92.0	87.5	74.1	78.3	80.2
	項目別平均%	87.3																	80.3	85.2	88.2	70.2	75.8	89.5	80.8	79.3							
2年全クラス	人数	248	244	250	263	250	245	214	221	272	238	238	208	267	269	241	252	252	223	193	152	234	200	211	185	234	235	249	264	251	211	226	230
	割合%	86.7	85.3	87.4	92.0	87.4	85.7	74.8	77.3	95.4	83.2	83.2	72.7	93.4	94.1	84.3	88.1	88.1	78.0	67.5	53.3	82.1	70.4	73.8	64.9	81.8	82.2	87.4	92.3	87.8	73.8	79.0	80.4
	項目別平均%	87.8																	81.3	85.6	88.6	70.3	75.7	89.8	80.8	79.7							
3年G1クラス	人数	26	27	28	28	26	27	26	27	28	24	28	28	27	28	26	26	26	23	16	8	28	27	23	19	25	25	28	26	28	20	26	26
	割合%	92.9	96.4	100.0	100.0	92.9	96.4	92.9	96.4	100.0	85.7	100.0	100.0	96.4	100.0	92.9	92.9	92.9	82.1	57.1	28.6	100.0	96.4	82.1	67.9	89.3	89.3	100.0	92.9	100.0	71.4	92.9	92.9
	項目別平均%	97.3																	94.6	96.4	72.9	82.1	80.5	96.4	85.7	92.9							
3年G1クラス以外	人数	228	229	234	246	231	217	218	183	242	222	213	200	240	250	235	233	236	219	185	146	224	198	199	189	222	218	223	241	239	202	217	222
	割合%	88.7	89.1	91.1	95.7	89.9	84.4	84.8	71.2	94.2	86.4	82.9	77.8	93.4	97.3	91.4	90.7	91.8	85.2	72.0	56.8	87.2	77.0	77.4	73.5	86.4	84.8	86.8	93.8	93.0	78.6	84.4	86.4
	項目別平均%	91.1																	82.6	86.9	92.8	75.6	80.5	90.3	85.8	85.4							
3年全クラス	人数	254	256	262	274	257	244	244	210	270	246	241	228	267	278	261	259	262	242	201	154	252	225	222	208	247	243	251	267	267	222	243	248
	割合%	89.1	89.8	91.9	96.1	90.2	85.6	85.6	73.7	94.7	86.3	84.6	80.0	93.7	97.5	91.6	91.9	91.9	84.9	70.5	54.0	88.4	78.9	77.9	73.0	86.7	85.3	88.1	93.7	93.7	77.9	85.3	87.0
	項目別平均%	91.8																	83.8	87.9	93.0	75.4	80.7	90.9	85.8	86.1							



pick up 1 高校生の知を結集 「国際会議『食』のサミット」

3月11日(金)・12日(土)、本校5回目の開催となる「食」のサミットを行いました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、昨年度に続きハイブリッドでの実施となりましたが、留学生による華やかなパフォーマンスがオープニングを飾り、サミットでは国内外からの連携校代表者をオンラインで繋ぎ「SDGsターゲット12「つくる責任、つかう責任」につながる「食」に関わる諸問題とその解決策」について熱く議論を交わしました。結集した知はひとつの「提言書」としてまとめ、後日国連WFPへ提出を行います。

高校生が考える課題解決法と行動が、社会・世界を変える一歩になることを願います。



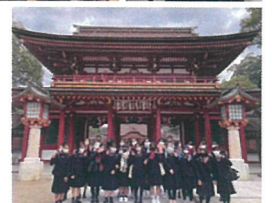
Be a global innovator!

pick up 3 受入総数全国No.1! 「アジア架け橋留学生」

2018年度から5ヵ年計画で開始した文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」において、毎年本校では留学生の受け入れをしています。昨年度は10カ国10名を迎え、11月～3月にかけて本校生徒や地域との協働学習、ホームステイ、各種イベントに参加し異文化交流・理解を深めました。今年夏より7カ国7名を迎える予定で、受入総数は全国一です。



受入れ実績	
2018年度	6カ国6名
2019年度	9カ国10名
2020年度	7カ国7名
2021年度	10カ国10名
2022年度	7カ国7名受入予定



pick up 2 新しい世界・自分を求めて 「GI留学プログラム」

GI留学プログラムは、GIクラス1年生の希望者を対象に、最長3か月間の海外留学を行い、現地校に通いながらホームステイを経験します。今年1月下旬～4月上旬にかけて、GIⅡ期生(現2年生)13名(希望者)が、カナダ・トロント近郊へ留学しました。昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響によりやむを得ず中止となり、今年が本校初のプログラム実施です。帰国後は報告会を行い、留学での成果や今後の展望を伝えます。本プログラムでは、学園の留学支援金制度を設けております。



What is WWL ?

文部科学省支援事業「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」では、国内外の各種学校・企業・国際機関等と協働してイノベティブなグローバル人材の育成を目指すカリキュラム開発を行います。本校は、2020年度より福岡初となるカリキュラム開発拠点校に指定されました。



1. 探究学習の成果の場 「WWL報告会」

WWL事業の取り組みにおける成果を発表する年に1度のイベントです。昨年12月11日(土)に開催し、ステージ発表ではGIクラス代表者、WWL連携校、アジア架け橋留学生等による発表が行われました。また、後半は全校生徒によるポスターセッションを行い、今年度のテーマであるSDGs12「つくる責任つかう責任」について、課題発見と解決法について学びを深めました。



2. 肌で感じる探究実践の場 「GIフィールドワークadvanced」

3月21日(月)～25日(金)、GII期生(現3年生)が熊本・鹿児島・宮崎・大分にてGIフィールドワークを実施しました。本来は海外研修を予定しておりましたが、コロナ禍によりやむを得ず、国内プログラムへと変更しました。「食」を通じた社会課題解決の現場を知る」をテーマに、各地でSDGsに関連する現場や地元の方の講話に触れ、新しい出会いそして新たな自分との発見がありました。



3. 株式会社石村萬盛堂×GIクラス 「産学連携プロジェクト」

昨年度より、GII期生(現2年生)が探究学習の一環で、福岡の老舗和菓子店株式会社 石村萬盛堂様にご協力頂き、お菓子の商品開発に取り組んでいます。地域社会の課題解決を目指し、どのような商品が出来上がるか乞うご期待です!



教育開発
部長挨拶



教育開発部
部長 西岡 隆行

グローバル化や情報化の進展は、社会システムや人間の価値観に急激な変化をもたらしています。激流の前に「予測不可能な時代」という言葉が飛び交っていますが、狼狽えず「自分のあり方」と「社会のあり方」の間で対話し続ける「姿勢」が大切です。GIクラスはそうした姿勢を身につける場でありたいと考えています。

GI公式インスタグラム
始めたのです!
各学年のGIクラス生徒
が学校生活や活動の
様子を発信されるので
す!



pick up
1

立命館アジア太平洋大学(APU)×中村学園女子 「グローバルキャンパス」

9月13日(火)・14日(水)、高校1年生の学年行事「グローバルキャンパス」を本校にて開催しました。

本行事は、WWL事業協働機関であり教育連携協定を結んでいる立命館アジア太平洋大学(APU)の国際学生と英語でコミュニケーションをはかりながら、地球規模の環境問題や国際間の食の問題について相互理解を深めることを目的としています。過去2年間にはオンラインでの実施でしたが、今年はAPUから14カ国計29名の国際学生が来校し対面で行いました。

アイスブレイクで和んだ後は、グローバル探究の授業で学んできた「食に関する課題とその解決策」のプレゼンテーションを行い、国際学生にアドバイスをもらいながら学びを深めました。

クロージングセレモニーでは、グローバルファッションショーを開催。代表生徒が各国の色鮮やかな民族衣装をまとい、国際学生と一緒に登場しました。華やかなステージに、大きな歓声が上がりました。

グローバルキャンパスを通して、英語学習へのモチベーションや異文化・多様性に関する理解、世界の食に関する認識を深め、これからの学びのあり方を見つける貴重な機会となりました。



pick up
2

UTM×スルタン・イブラヒム高校×中村学園女子 Make a History of GI! 「海外フィールドワーク」

9月10日(土)から15日(木)にかけて、GI2年生の海外フィールドワーク(4泊6日/マレーシア・シンガポール)が行われました。新型コロナウイルス感染拡大の状況により、昨年度は海外渡航が実現できず、今年がGIクラス開設以来初めての海外フィールドワークとなりました。

WWL事業協働機関のマレーシア工科大学(UTM)や連携校のスルタン・イブラヒム高校を訪問しました。現地の学生との交流やグループワークを通して、異文化理解力や多様性受容力を高めただけでなく、全員が英語でプレゼンテーションを行い、より自分に自信がつかしました。

普段と違った環境に戸惑うこともありましたが、海外フィールドワークを終え、清々しく頼もしい姿で帰国しました。

【行程(令和4年度実績)】

1日目	マレーシア入国
2日目	アブラヤシ農園を見学→マレーシア工科大学にて研修→現地スーパー流通調査
3日目	フォロファームバンブー→スルタン・イブラヒム高校と交流→コタイスカンダル見学
4日目	シンガポール入国→マライオン公園→班別フィールドワーク
5日目	ユニバーサルスタジアムシンガポール→ガーデンズバイザベイ
6日目	福岡空港着

※UTM: University of Technology Malaysia(マレーシア工科大学)

pick up
3

新カリキュラム・GI探究活動の集大成! 「GIプレゼンテーション」

GIクラスが発足して3年目を迎える今年度、7月29日(金)に初めてのGIプレゼンテーションが行われました。このイベントは、生徒それぞれが食に関する研究テーマに基づき論文内容をプレゼンテーションするものです。論文執筆にあたっては、外部指導委員としてさまざまな機関・大学の先生方より専門的見地から指導していただきました。プレゼンテーションを終えた後は、論文集等にまとめます。

GIクラス1期生として、3年間の探究で培った課題解決力や創造力を発揮することができました。



What is WWL ?

文部科学省支援事業「WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業」では、国内外の各種学校・企業・国際機関等と協働してイノベティブなグローバル人材の育成を目指すカリキュラム開発を行います。本校は、2020年度より福岡県初、唯一のカリキュラム開発拠点校に指定されました。

4 創造力を社会へと生かす 「アントレプレナーシップ講座」

6月21日(火)・7月15日(金)、WWL事業協働機関・株式会社SGインキュベート様の協力のもと、GI2年生を対象に現在進めている産学連携とリンクしたかたちで商品の生産・流通・販売するために必要な知識・考え方を学びました。また、身近な課題発見・解決力が社会のイノベーションをいかに生み出すか、事例を学び起業に対するイメージを深めました。



5 「アジア架け橋留学生」が 留学生生活をスタート

本校は、2018年度より5か年計画で開始した文部科学省補助事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」に参加し、毎年留学生の受け入れを行っています。プロジェクト最終年度となる今年は7か国から7名を迎え、GI1・2年生のクラスに所属し、協働学習を通して相互理解を深めています。



6 海外ターム留学の成果を 「GI留学報告会」にて プレゼンテーション

6月14日(火)、GI留学(GI1年生希望者対象・カナダ2か月半)から帰国したGI2年生の生徒による報告会を行いました。生徒たちは現地校やホームステイでの様子、各自が課題設定をして取り組んだ研究について生き生きと報告しました。「日本と海外の違いを感じ、視野が広がった」「海外ではつねに意見を問われる。自分の意見や考えを持つことが大切だと思った」など、留学を通して大きく成長をしたようです。報告会に参加したGI1年生も、今年の留学プログラム参加に向けて触発されている様子でした。



併設校留学 支援制度

本学園では、新たに併設校留学支援制度を設け、併設校の三陽高校と合同での留学支援選考を行います。女子高校はGI留学希望者を対象に募ります。

審査では、エッセイやプレゼンテーションを通して「留学に対する想い」や「帰国後のビジョン」などを明確に伝えることが求められます。

【令和4年度実績】

最優秀(1名) / 優秀(3名)

※詳細は、「保護者のための高校受験ガイド2023」をご確認ください。



GI留学の様子なのです!



中村学園公式キャラクター
つぼみさん

